佐賀県文化財調査報告書第83集

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 4

1986年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 4

1986年3月

佐賀県教育委員会

はじめに

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先がけて、国庫補助金を得て実施した埋蔵文化財調査報告書であります。

昭和60年度農業基盤整備事業施行予定地区について、昭和59年度に文化財確認調査を行った結果、縄文時代から江戸時代に至る多くの遺跡が確認されました。また埋没した佐賀平野の条里遺構の確認調査を実施しました。

本書に収められた資料を、学術資料として、また重要な文化財を県民の共有財産として大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたって、文化庁、県農林部、各市町村教育委員会・土地改良担当課並びに地元の関係各位の深い御理解と御協力に対し、心からお礼申し上げます。

昭和61年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　志岐常文

例　　言

1．本書は国庫補助を受け、昭和59年度に調査を実施した佐賀県農業基盤整備事業に伴う文化財調査報告書である。

2．調査は市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が行った。

3．遺構の実測・写真撮影は調査員が行った。

4．遺物の実測・整図・報告書作成作業は、県文化課文化財資料室・神埼発掘調査事務所で行った。

・遺物整理……樋口菅子・梅野角子・中島美須三・三好文子・佐藤春子・佐藤信子・境友枝・中島茂子・山崎久枝

・遺物実測……松永節子・徳富則久

・整図……六田育子・梅野角子・徳富

・遺物写真撮影…原口定

5．本書の執筆・編集は、各調査担当者より提出された確認調査結果の報告票及び実績報告書をもとに徳富が行った。なお各調査担当者には必要に応じて助言を頂いた。

凡　　例

1．遺構番号に用いた分類記号はＳＢ：住居跡・建物跡、ＳＨ：竪穴住居跡、ＳＥ：井戸跡、ＳＤ：溝跡、ＳＧ：集石遺構、ＳＫ：土壙、ＳＸ：自然谷・不明遺構・その他、Ｐ．：柱穴・小穴である。

2．用いた方位は、地図が座標北、遺構図は磁北である。

3．挿図中の、■は遺構・遺物包含層が検出された試掘溝、□は遺構・遺物包含層が検出されなかった試掘溝を、――は推定される遺跡の広がりを示す。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
1．昭和60年度農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査……1
(1) 設計協議……1
(2) 文化財確認調査……1
(3) 開発と文化財保護に係る協議……1
2．埋没条里確認調査……2
Ⅱ．調査組織……2
Ⅲ．昭和59年度文化財確認調査の内容……4
1．佐賀東部地区の調査……4
(1) 基山町……5
(2) 北茂安町……6
(3) 上峰村……6
(4) 三根町……7
(5) 東脊振村……9
(6) 三田川町……14
(7) 神埼町……14
(8) 千代田町……14
2．佐賀西部地区の調査……18
(1) 佐賀市……19
(2) 諸富町……20
(3) 大和町……21
(4) 多久市……21
3．佐賀南部地区の調査……23
(1) 武雄市……24
(2) 北方町……25
(3) 白石町……26
(4) 有明町……32
(5) 鹿島市……32
(6) 嬉野町……32
(7) 太良町……32
4．佐賀北部地区の調査……33
(1) 伊万里市……34
(2) 西有田町……34

(3) 相知町……37
5．佐賀上場地区の調査……38
(1) 唐津市・肥前町……39
(2) 鎮西町……39
6．筑後川下流用水事業に係る調査……39
(1) 佐賀東部導水路……39
(2) 大詫間幹線水路……40
Ⅳ．埋没条里確認調査……41
1．はじめに……41
2．調査の内容……41
(1) 神埼町……41
(2) 三田川町……44
(3) 白石町……46
(4) 有明町……51
Ⅴ．旧地籍図の管理保存状況調査……53
Ⅵ．昭和59年度農業基盤整備事業に係る発掘調査の概要……54
1．一ノ坪遺跡……54
2．中津隈四本松遺跡……55
3．本分三本柳遺跡……57
4．大曲遺跡群……59
5．的五本黒木遺跡……61
6．荒堅目遺跡……63
7．森ノ木遺跡……65
8．黒井遺跡……67
9．黒井八本松遺跡……68
10．楢田遺跡……70
11．加与丁野村遺跡……71
12．村中角遺跡……73
13．中小路増富遺跡……75
14．辺田三本松遺跡……77
15．天神搦・浦川内東方遺跡……79
16．鈴桶遺跡……80
17．伊岐佐伊良尾遺跡……81
18．上場地区の調査……83
Ⅶ．総　括……86

挿　図　目　次

第１図　農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査地区・発掘調査遺跡位置図……折り込み
第２図　佐賀東部地区周辺地形図……4
第３図　基山町園部地区試掘溝配置図……5
第４図　上峰村上峰北部地区試掘溝配置図……7
第５図　三根町三根東地区試掘溝配置図……8
第６図　東脊振村西石動地区試掘溝配置図……10
第７図　東脊振村松葉地区試掘溝配置図……11
第８図　東脊振村裏田地区試掘溝配置図……12
第９図　東脊振村西石動農道・広域基幹林道調査地区位置図……13
第10図　広域基幹林道Ａ地点検出土壙実測図……13
第11図　神埼町本告牟田地区試掘溝配置図……15
第12図　千代田町大石地区試掘溝配置図……16
第13図　千代田町柴尾地区試掘溝配置図……17
第14図　佐賀西部地区周辺地形図……18
第15図　佐賀市久保泉東部地区試掘溝配置図……19
第16図　諸富町陣内地区試掘溝配置図……20
第17図　大和町川上南部第２地区試掘溝配置図……22
第18図　佐賀南部地区周辺地形図(1)……23
第19図　佐賀南部地区周辺地形図(2)……24
第20図　白石町白石西第１期地区試掘溝配置図……26
第21図　白石町白石西第４(湯崎)地区試掘溝配置図……28
第22図　湯崎地区確認調査遺構配置図……28
第23図　SG 001集石遺構実測図 ……29
第24図　SK 002土壙実測図……29
第25図　白石町白石西第４(湯崎)地区確認調査出土土器実測図……30
第26図　佐賀北部地区周辺地形図……33
第27図　西有田町大山地区試掘溝配置図……34
第28図　西有田町曲川地区試掘溝配置図……35
第29図　西有田町黒岩地区試掘溝配置図……36
第30図　黒岩地区小森窯跡表採陶器実測図……36
第31図　佐賀上場地区周辺地形図……38
第32図　筑後川下流用水事業に係る文化財確認調査地区位置図……39
第33図　神埼町馬郡地区試掘溝配置図……40

第34図　神埼町三田川町試掘溝位置図……42
第35図　埋没条里確認調査神埼地区試掘溝配置図……折り込み
第36図　埋没条里確認調査三田川地区試掘溝配置図……折り込み
第37図　三田川地区第1試掘溝検出溝跡土層図……44
第38図　三田川地区第3試掘溝平面図・土層図……45
第39図　三田川地区第4試掘溝平面図・土層図……45
第40図　白石町有明町調査対象地区位置図……46
第41図　埋没条里確認調査白石西第3地区試掘溝配置図……47
第42図　第3試掘溝B溝跡出土陶器……48
第43図　第3・第5試掘溝遺構配置図……48
第44図　埋没条里確認調査白石西第4地区試掘溝配置図……49
第45図　埋没条里確認調査有明地区試掘溝配置図……52
第46図　一ノ坪遺跡周辺地形図……54
第47図　中津隈四本松遺跡周辺地形図……55
第48図　本分三本柳遺跡周辺地形図……57
第49図　大曲遺跡群周辺地形図……59
第50図　的五本黒木遺跡周辺地形図……61
第51図　荒堅目遺跡周辺地形図……63
第52図　森ノ木遺跡周辺地形図……65
第53図　黒井遺跡周辺地形図……67
第54図　黒井八本松遺跡周辺地形図……68
第55図　楢田遺跡周辺地形図……70
第56図　加与丁野村遺跡周辺地形図……71
第57図　村中角遺跡周辺地形図……73
第58図　中小路増富遺跡周辺地形図……75
第59図　辺田三本松遺跡周辺地形図……77
第60図　天神搦・浦川内東方遺跡周辺地形図……79
第61図　鈴桶遺跡周辺地形図……80
第62図　伊岐佐伊良尾遺跡周辺地形図……81

表　目　次

表1　農業基盤整備事業施行予定地内文化財確認調査一覧表（昭和59年度調査）……折り込み
表2　昭和59年度　発掘調査遺跡一覧表……折り込み
表3　旧地籍図管理・保存状況調査……折り込み

図　版　目　次

図版1　広域基幹林道A地点検出土壙……13
図版2　川上南部第2地区（北から）……21
図版3　①　湯崎地区試掘溝全景　②　SG001集石遺構　③　SK002土壙……31
④～⑦　湯崎地区確認調査出土遺物
図版4　①　中津隈四本松遺跡全景　②　SB205住居跡　③　SB202住居跡……56
④　SB203～205住居跡　⑤　SE202井戸跡
図版5　①　本分三本柳遺跡全景　②　溝跡　③　木棺墓……58
図版6　①　大曲A遺跡全景　②　周溝　③　亀作A遺跡全景……60
④　竪穴住居跡群　⑤　SH001竪穴住居跡　⑥　SH020竪穴住居跡
図版7　①　的五本黒木遺跡A地区全景　②　的五本黒木遺跡B地区全景……62
③　A地区SH019住居跡　④　A地区SH047住居跡
図版8　①　荒堅目遺跡北部全景　②　荒堅目遺跡中央部全景……64
③　人骨出土状況　④　馬骨出土状況
図版9　①　森ノ木遺跡全景　②　森ノ木遺跡東部　③　森ノ木遺跡中部……66
④　井戸跡　⑤　土壙
図版10　①～③　黒井遺跡Ⅰ区　④　黒井遺跡Ⅱ区　⑤　黒井遺跡Ⅲ区……69
⑥　黒井八本松遺跡全景　⑦　黒井八本松遺跡中央部
⑧　黒井八本松遺跡西部
図版11　①　楢田遺跡全景　②　遺物出土状況……70
図版12　①　加与丁野村遺跡全景　②　遺物出土状況……72
図版13　①　村中角遺跡1区調査状況　②　1区東側井戸跡出土動物骨……74
③　1区東側井戸跡出土動物骨　④　1区鹿骨出土状況
⑤　1区人骨出土状況　⑥　1区井戸跡遺物出土状況
図版14　①　中小路増富遺跡住居跡　②　土壙遺物出土状況……76
③　滑石製品　④　抉状耳飾
図版15　①　辺田三本松遺跡遠景　②～③　全景……78
図版16　①　伊岐佐伊良尾遺跡遠景　②　伊岐佐伊良尾遺跡Ⅰ区全景……82
③～④　Ⅰ区検出小鍛治遺構　⑤　伊岐佐伊良尾遺跡Ⅱ区全景
⑥　伊岐佐伊良尾遺跡Ⅲ区全景　⑦　伊岐佐伊良尾遺跡Ⅳ区全景
⑧　伊岐佐伊良尾遺跡Ⅴ区全景

Ⅰ　調査に至る経過

1．昭和60年度農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査

(1)　設計協議

昭和53年４月に締結され、昭和59年４月に改正された県農林部と県教委の「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」に基づいて、昭和59年９月に農業基盤整備事業施行計画について事業担当部局から文化財保護担当部局へ協議がなされた。

昭和60年度は、佐賀東部地区（基山町・北茂安町・三根町・上峰村・神埼町・千代田町・三田川町・東脊振村・脊振村・三瀬村）433.6ha、佐賀西部地区（佐賀市・諸富町・川副町・大和町・多久市）315.2ha、佐賀南部地区（武雄市・山内町・北方町・大町町・白石町・福富町・有明町・鹿島市・太良町・塩田町・嬉野町）556.1ha、佐賀北部地区（伊万里市・西有田町・厳木町・相知町）103ha、佐賀上場地区（唐津市・肥前町・鎮西町）143 haの合計1550.9haである。施行主体は、九州農政局上場水利事業所々管の国営、佐賀県農林部所管の県営、市町村所管の団体営事業に区分される。また、水資源開発公団所管の筑後川下流用水事業に伴う（神埼町・千代田町・諸富町）協議もなされた。

(2)　文化財確認調査

協議された設計書について現地踏査の結果等をもとに検討を行い、確認調査の必要な地区と必要でない地区との区別を行う。ついで遺跡の存在が予測され、確認調査の必要性が認められる市町村（表１）の教育委員会、土地改良担当課、当該事業を所管する県農林部との第１回目の合同四者協議会を県教育委員会が主催して10月12日に開催した。

その合意を経て文化財確認調査を稲刈りが終了する10月下旬から麦の作付けが始まる12月上旬までの間に行ったが、農作物の状況によっては調査時期がずれることもあった。確認調査は原則として、２ｍ×２ｍの試掘溝を20m間隔で碁盤目状に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、広がりなどを調査した。

(3)　開発と文化財保護に係る協議

確認調査の結果を検討して詳細な遺跡分布図が完成し、佐賀東部地区220,300㎡、佐賀西部地区7,500㎡、佐賀南部地区7,350㎡、佐賀北部地区2,500㎡の計237,650㎡の遺跡が確認された。開発と文化財保護の調整を計る第２回目の合同四者協議会を12月７日に開いた。その後、昭和60年３月まで各市町村教委が主体となって個別協議が継続され、３月19日に第３回目の合同四者協議会を開き、昭和60年度の開発と文化財保護との最終調整がなされた。これらの調整で、昭和58年以前の確認調査で知られていたものを含めた247.6千㎡の遺跡のうち、193.5千㎡については農業基盤整備事業担当部局で設計変更による盛土保存等の処置がとられることになったが、残る48千㎡については発掘調査を実施し、記録保存することになった。

昭和59年度に、市町村教育委員会が実施した発掘調査（第２表）は、58年度に同様な方法で確認調査を実施し、農業基盤整備担当部局との協議を経てきたものである。

２．埋没条里確認調査

昨年度に引き続き、佐賀県教育委員会が主体となって条里地割等の古地割調査のための対応が進められ、その一環として埋没条里確認調査を実施した。調査は、比較的条里地割が良好な状態で残っていると推察される神埼郡神埼町・三田川町、杵島郡白石町・有明町の当該年度工事地区について実施した。

また、各市町村役場に備えつけてある地籍図のうち、最も古いもの（明治年間）について、その資料的価値に鑑み、その重要性を周知させ、また保存状況の実態を把握するため「地籍図の管理・保存状況調査」も実施した。

Ⅱ　調査組織

１．調査主体

佐賀県教育委員会

２．総　　括

局　　長　北村　一義　県文化課長

次　　長　山田　陸三　県文化課長補佐

　　高島　忠平　県文化課長補佐

３．庶　　務

菊池　文夫　県文化課庶務係長

山下　行夫　県文化課庶務係

東　　英明　県文化課庶務係

井原　裕子　県文化課庶務係

４．調　　査

調査主任　木下　　巧　県文化課文化財調査第２係長

調 査 員　天本　洋一　県文化課文化財調査第２係　　福田　義彦　佐賀市教育委員会

　　蒲原　宏行　県文化課文化財調査第２係　　中島　直幸　唐津市教育委員会

　　徳富　則久　県文化課文化財調査第２係　　藤瀬　禎博　鳥栖市教育委員会

　　森田　孝志　県文化課文化財調査第２係　　石橋　新次　鳥栖市教育委員会

　　古庄　秀樹　県文化課文化財調査第２係　　西村　隆司　多久市教育委員会

　　江口　浩文　県文化課文化財調査第２係　　盛　　峰雄　伊万里市教育委員会

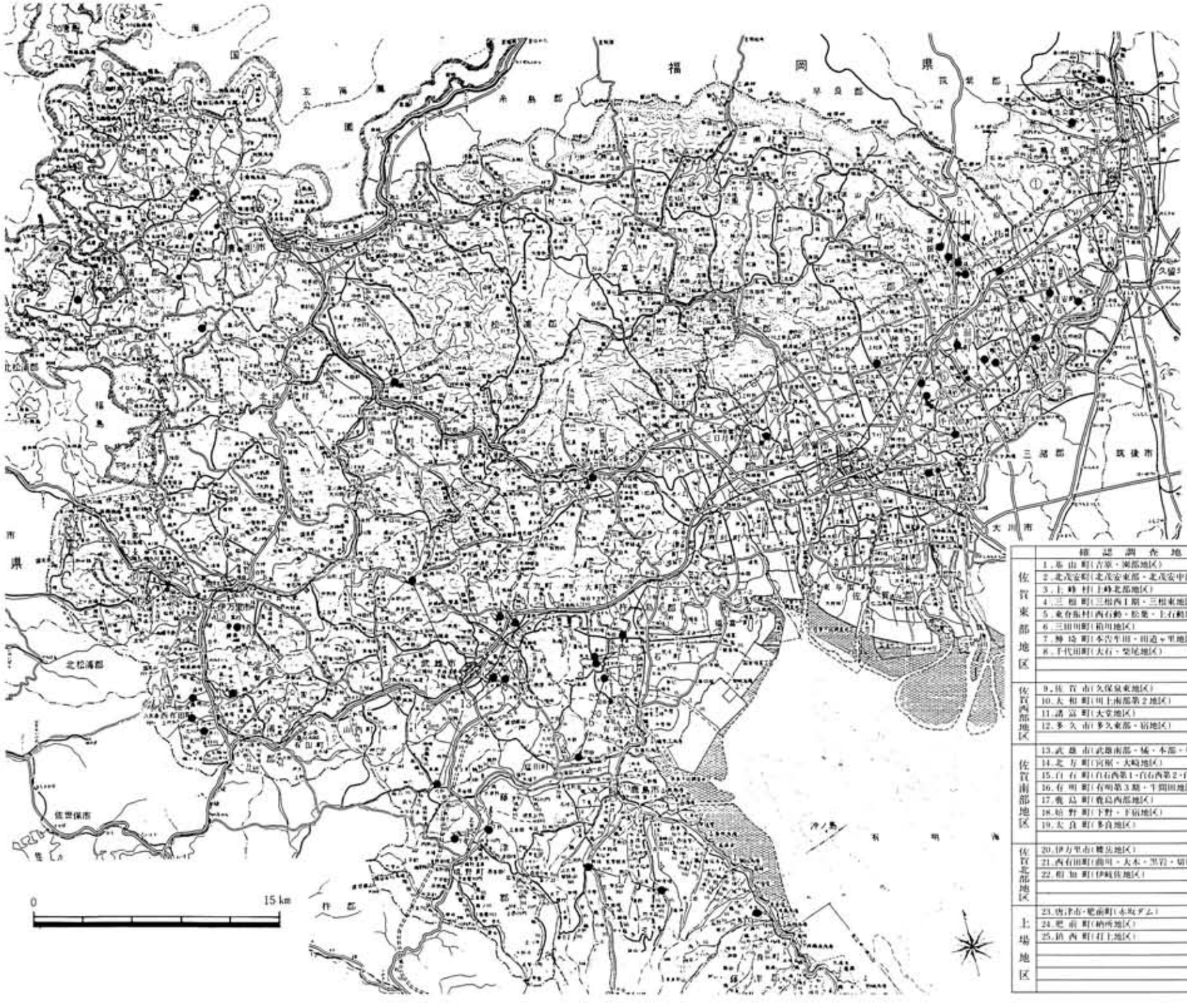
　　種浦加代子　県文化課文化財調査第２係　　原田　保則　武雄市教育委員会

松尾	吉高	県文化課文化財管理係	
松尾	法博	県文化課文化財管理係	
種浦	修	諸富町教育委員会	
川崎	吉剛	大和町教育委員会	
八尋	実	神埼町教育委員会	
緒方祐次郎		神埼町教育委員会	
堤	安信	千代田町教育委員会	
久保	伸洋	東脊振村教育委員会	
山田	正	基山町教育委員会	

5．調査協力

佐賀市教育委員会	神埼町教育委員会	肥前町教育委員会
唐津市教育委員会	千代田町教育委員会	鎮西町教育委員会
鳥栖市教育委員会	三田川町教育委員会	呼子町教育委員会
多久市教育委員会	東脊振村教育委員会	西有田町教育委員会
伊万里市教育委員会	基山町教育委員会	北方町教育委員会
武雄市教育委員会	北茂安町教育委員会	白石町教育委員会
鹿島市教育委員会	三根町教育委員会	有明町教育委員会
諸富町教育委員会	上峰村教育委員会	太良町教育委員会
大和町教育委員会	相知町教育委員会	嬉野町教育委員会

九州農政局上場水利事業所・佐賀県農林部・佐賀中部農林事務所・鳥栖農林事務所・武雄農林事務所・鹿島農林事務所・伊万里農林事務所・唐津農林事務所・各市町村土地改良担当課・地元各位



	確認調査地区	発掘調査遺跡
佐賀東部地区	1.基山町(吉原・園部地区)	① 一ノ坪遺跡
	2.北茂安町(北茂安東部・北茂安中部地区)	② 中津隈四本松遺跡
	3.上峰村(上峰北部地区)	③ 本分三本柳遺跡
	4.三根町(三根西1期・三根東地区)	④ 大曲遺跡群
	5.東脊振村(西石動・松葉・上石動地区)	⑤ 的五本黒木遺跡
	6.三田川町(箱川地区)	⑥ 荒堅目遺跡
	7.神埼町(本告牟田・田道ヶ里地区)	⑦ 森ノ木遺跡
	8.千代田町(大石・柴尾地区)	⑧ 黒井遺跡
		⑨ 黒井八本松遺跡
佐賀西部地区	9.佐賀市(久保泉東地区)	⑩ 柳田遺跡
	10.大和町(川上南部第2地区)	⑪ 加与丁野村遺跡
	11.諸富町(大堂地区)	⑫ 村中角遺跡
	12.多久市(多久東部・宿地区)	⑬ 中小路増富遺跡
佐賀南部地区	13.武雄市(武雄南部・橘・本部・川登地区)	⑭ 辺田三本松遺跡
	14.北方町(宮裾・大崎地区)	
	15.白石町(白石西第1・白石西第2・白石西第4地区)	
	16.有明町(有明第3期・牛間田地区)	
	17.鹿島町(鹿島西部地区)	
	18.始野町(下野・下宿地区)	
	19.太良町(多良地区)	
佐賀北部地区	20.伊万里市(鰈岳地区)	⑮ 鈴桶遺跡
	21.西有田町(曲川・大木・黒岩・切桶地区)	⑯ 大神溜遺跡
	22.相知町(伊岐佐地区)	⑰ 浦川内東方遺跡
		⑱ 伊岐佐伊良尾遺跡
上場地区	23.唐津市・肥前町(赤坂ダム)	⑲ 見徳遺跡
	24.肥前町(納所地区)	⑳ 馬部基蘆山遺跡
	25.鎮西町(打上地区)	㉑ 大良中尾遺跡
		㉒ 小十遺跡
		㉓ 御手洗古墳
		㉔ 鬼ノ口古墳
		㉕ 池ノ田1遺跡

第1図　農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査地区・発掘調査遺跡位置図（昭和59年度）

表１　農業基盤整備事業施行予定地内文化財確認調査一覧表（昭和59年度調査）

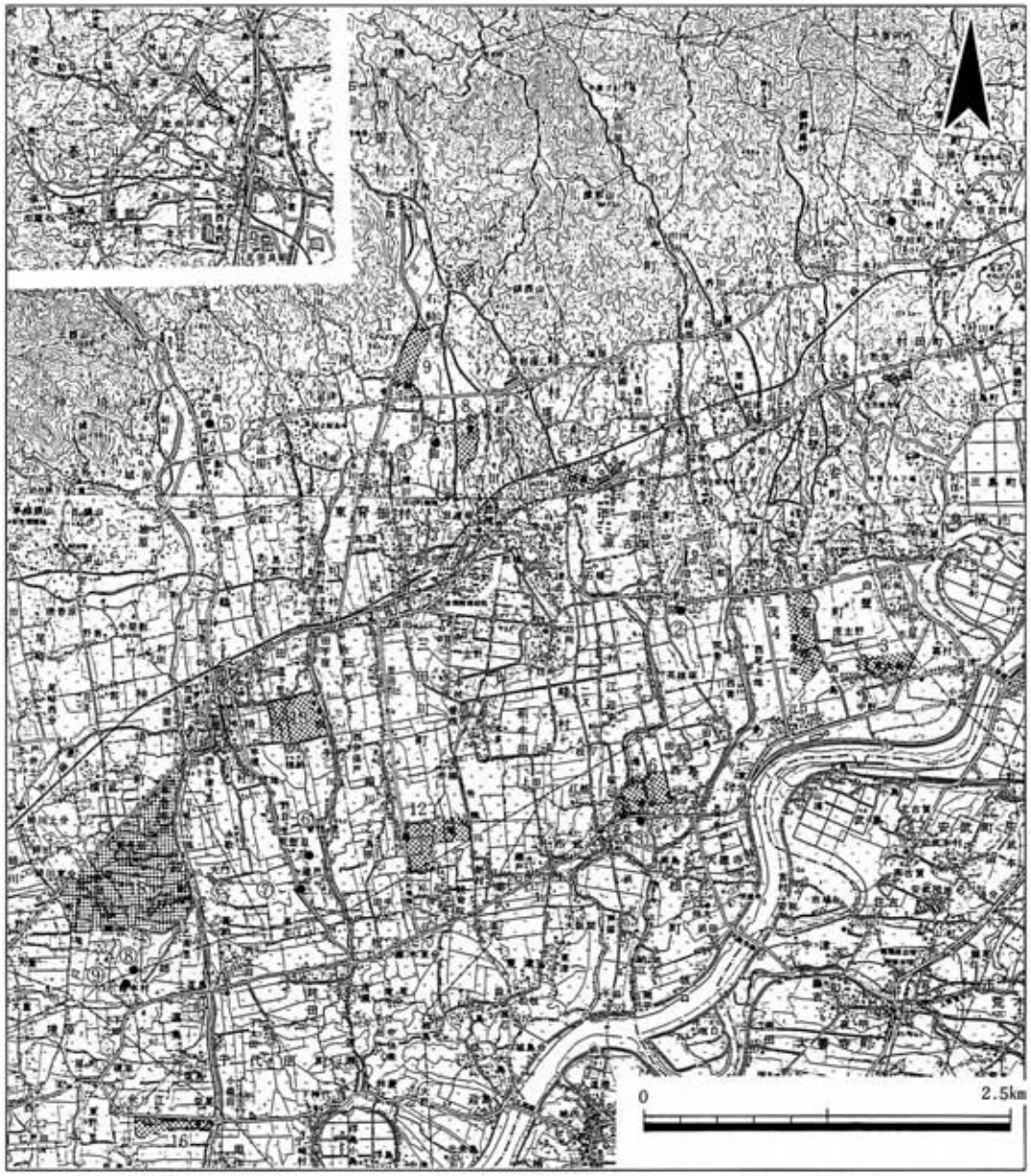
地区	市町村名	工事地区名	所在地	調査対象面積	調査結果	調査担当者	備考
佐賀東部	基山町	園部	基山町大字園部	3 ha	奈良・平安時代集落跡	山田	
		吉原	基山町大字小倉	6	遺構・遺物は検出されなかった	山田	
	北茂安町	北茂安東部	北茂安町大字江口	22	遺構・遺物は検出されなかった	天本	
		北茂安中部	北茂安町大字東尾	46	遺構・遺物は検出されなかった	天本、森田	昭和59年度工事追加分を含む
	上峰村	上峰北部	上峰村大字堤	10	弥生時代集落跡、墳墓	蒲原	船石南遺跡
	三根町	三根東	三根町大字西島	22	弥生時代集落跡	天本	本分遺跡
		三根西１	三根町大字寄人	13	遺構・遺物は検出されなかった	天本	
	東脊振村	東脊振工区(西石動)	東脊振村大字石動	15	弥生～中世集落跡	久保	西石動遺跡
		東脊振工区(松葉)	東脊振村大字大曲	13	中世集落跡	久保	松本遺跡
		上石動	東脊振村大字石動	5	古墳他	徳富	裏田遺跡
		西石動農道	東脊振村大字石動	500(m)	中世生活跡	徳富	石動西一本杉遺跡群
		広域基幹林道	東脊振村大字三津	3,500(m)	中世城跡	蒲原、徳富	三津山田遺跡
	三田川町	三田川工区(箱川)	三田川町大字箱川	30	遺構は検出されなかった	徳富	
	神埼町	神埼工区(本告牟田)	神埼町大字本告牟田	) 160	中世～近世集落跡	森田	本告牟田遺跡群
		神埼工区(田道ヶ里)	神埼町大字田道ヶ里		遺構・遺物は検出されなかった	木下	
	千代田町	千代田工区(大石)	千代田町大字姉	) 97	弥生時代集落跡	堤	大石、上黒井遺跡
		千代田工区(柴尾)	千代田町大字余り江・用作		弥生～古墳時代集落跡	堤	柴尾遺跡
佐賀西部	佐賀市	久保泉東部	佐賀市久保泉町大字下和泉	15	中世集落跡	福田	泉遺跡
	大和町	川上南部第２	大和町大字池ノ上	10	弥生時代集落跡	川崎、蒲原	池ノ上三本松遺跡
	諸富町	諸富工区(陣内)	諸富町大字大堂	46	弥生～中世集落跡	種浦	唐人廟遺跡
	多久市	多久東部	多久市北多久町大字多久原、南多久町大字下多久	26	遺構は検出されなかった	西村	
		宿	多久市西多久町大字板屋	3.1	遺構・遺物は検出されなかった	西村	
佐賀南部	武雄市	武雄南部	武雄市橘町大字片白	24	遺構は検出されなかった	原田	
		橘	武雄市橘町大字片白	35	遺構は検出されなかった	原田	
		川登	武雄市東川登町大字袴野、西川登町大字神六	23.8	遺構は検出されなかった	原田	
		本部	武雄市若木町大字川古	14	遺構・遺物は検出されなかった	原田	
	北方町	大崎	北方町大字大崎	21	遺構は検出されなかった。	天本	
		宮裾	北方町大字大崎	12.3	遺構・遺物は検出されなかった	蒲原	
	白石町	白石西第１	白石町大字馬洗	31	古墳～平安時代集落跡	徳富	馬洗上黒木遺跡
		白石西第２	白石町大字今泉	22	遺構・遺物は検出されなかった	徳富	
		白石西第４	白石町大字堤・湯崎	23	弥生～平安時代集落跡	徳富	湯崎東遺跡
	有明町	有明第３	有明町大字辺田	34	明確な遺構，遺物は検出されなかった	蒲原	
		牛間田	有明町大字漆浦	0.6	遺構・遺物は検出されなかった	蒲原	
	鹿島市	鹿島西部	鹿島市大字三河内・音成	10	遺構は検出されなかった	天本	
	太良町	多良	太良町大字多良	15	遺構・遺物は検出されなかった	木下	
	嬉野町	下野	嬉野町大字下野	6.4	遺構・遺物は検出されなかった	天本	
		下宿	嬉野町大字下宿	6.4	遺構・遺物は検出されなかった	天本	
佐賀北部	伊万里市	腰岳	伊万里市立花町	770(m)	縄文時代生活跡	盛	鈴桶遺跡
	西有田町	大山	西有田町大字大木	23	縄文時代集落跡	徳富、森田	坂ノ下遺跡
		曲川	西有田町大字曲川	21	縄文時代遺物包含層	森田、江口	
		切楠農道	西有田町大字大木・曲川	1,615(m)	遺構・遺物は検出されなかった	徳富、江口	
		黒岩	西有田町大字大木	6.4	近世物原跡	森田、徳富	小森窯跡
	相知町	伊岐佐	相知町大字伊岐佐	14.3	顕著な遺構・遺物は検出されなかった	蒲原	
佐賀上場	唐津、肥前	赤坂ダム	唐津市竹木場、肥前町赤坂	15	遺構・遺物は検出されなかった	松尾	
	肥前町	納所	肥前町大字納所	5	遺構・遺物は検出されなかった	松尾	
	鎮西町	馬部地区農道	唐津市枝去木	2	遺構・遺物は検出されなかった	松尾	
筑後川下流用水事業	神埼町	佐賀東部導水	神埼町大字城原、本告牟田		弥生～平安時代集落跡	森田、江口	
	千代田町	大詫間幹線	千代田町大字黒井		遺構・遺物は検出されなかった	森田、江口	
	諸富町	大詫間幹線	諸富町大字大堂		遺構・遺物は検出されなかった	森田、江口	

表２　昭和59年度　発掘調査遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	略号	遺跡の所在地	調査面積	調査主体者	調査担当者	遺跡の内容
鳥栖市	一ノ坪遺跡	I N T	鳥栖市山浦町一ノ坪	400㎡	鳥栖市教委	石橋	平安･鎌倉時代を中心とする集落跡･小鍛冶遺構
北茂安町	中津隈四本松遺跡	N T G	北茂安町大字中津隈	1,000㎡	北茂安町教委	天本	弥生時代～鎌倉時代集落跡
三根町	本分三本柳遺跡	H B S	三根町大字西島	1,000㎡	三根町教委	天本	弥生時代・中世墓壙・集落跡
東脊振村	大曲A遺跡	O M G	東脊振村大字大曲	11,000㎡	東脊振村教委	久保	弥生時代・中世集落跡
〃	亀作A遺跡	K M S	東脊振村大字大曲		東脊振村教委	久保	弥生時代後期集落跡
神埼町	的五本黒木遺跡	Y K W	神埼町大字的	6,000㎡	神埼町教委	緒方	弥生時代～古墳時代集落跡
〃	荒堅目遺跡	A K M	神埼町大字本堀	4,000㎡	神埼町教委	八尋	弥生時代～鎌倉時代集落跡
神埼・千代田	森ノ木遺跡	M N K	神埼町本堀・千代田町下板	1,500㎡	神埼・千代田教委	森田	弥生時代～中世集落跡
千代田町	黒井遺跡	K R I	千代田町大字黒井	4,000㎡	千代田町教委	堤	弥生時代～中世集落跡
〃	黒井八本松遺跡	K H M	千代田町大字黒井	1,100㎡	千代田町教委	堤	弥生時代集落跡
大和町	椛田遺跡	N R D	大和町大字池上	500㎡	大和町教委	川崎	弥生時代～平安時代集落跡
諸富町	加与丁野村遺跡	K Y C	諸富町大字大堂	800㎡	諸富町教委	種浦	室町時代～江戸時代屋敷跡
〃	村中角遺跡	M N S	諸富町大字大堂	3,200㎡	諸富町教委	種浦	弥生時代～江戸時代集落跡
多久市	中小路増富遺跡		多久市南多久町大字下多久	4,500㎡	多久市教委	西村	弥生時代・平安時代集落跡・鍛冶跡
有明町	辺田三本松遺跡	H S A	有明町大字辺田	630㎡	有明町教委	瀬原	中世～近世生活跡
伊万里市	天神搦遺跡	T E J	伊万里市東山代町大字浦川内	800㎡	伊万里市教委	盛	室町時代集落跡
〃	浦川内東方遺跡	U T T	伊万里市東山代町大字浦川内		伊万里市教委	盛	弥生時代～平安時代包含層
〃	鈴桶遺跡		伊万里市二里町	650㎡	伊万里市教委	盛	縄文時代～弥生時代石器製作遺跡
相知町	伊岐佐伊良尾遺跡	I I O	相知町大字伊岐佐	1,700㎡	相知町教委	瀬原	平安時代～鎌倉時代集落跡・小鍛冶跡
唐津市	見借遺跡		唐津市見借	6,000㎡	唐津市教委	中島	弥生時代～古墳時代集落跡
〃	小十遺跡		唐津市梨川内	2,000㎡	唐津市教委	中島	古唐津窯跡
〃	笹ノ尾遺跡		唐津市佐志	400㎡	唐津市教委	中島	旧石器・縄文時代包含層
〃	大良中尾遺跡		唐津市大良	2,000㎡	唐津市教委	中島	縄文時代集落跡
〃	馬部甚蔵山遺跡		唐津市枝去木	1,513㎡	唐津市教委	中島	旧石器・室町時代集落跡
肥前町	池ノ田I遺跡		肥前町大字納所	2,500㎡	肥前町教委	松尾法	縄文時代集落跡
呼子町	御手洗古墳	O C H	呼子町加部島	50㎡	呼子町教委	松尾法	古墳
〃	鬼ノ口古墳	O N N	呼子町加部島	50㎡	呼子町教委	松尾法	古墳

Ⅲ．昭和59年度文化財確認調査の内容

1．佐賀東部地区の調査



1．基山町（吉原地区）
2．基山町（園部地区）
3．北茂安町（東部地区）
4．北茂安町（中部地区）
5．上峰村（上峰北部地区）
6．三根町（三根東地区）
7．三根町（三根西Ⅰ期 地区）
8．東脊振村（松葉地区）
9．東脊振村（西石動地区）
10．東脊振村（裏田地区）
11．東脊振村（西石動農道）
12．三田川町（箱川地区）
13．神埼町（田道ヶ里地区）
14．神埼町（本告牟田地区）
15．千代田町（大石地区）
16．千代田町（柴尾地区）

①．一の坪遺跡
②．中津隈四本松遺跡
③．本分三本柳遺跡
④．大曲遺跡群
⑤．的五本黒木遺跡
⑥．荒堅目遺跡
⑦．森の木遺跡
⑧．黒井八本松遺跡
⑨．黒井遺跡

第２図　佐賀東部地区周辺地形図

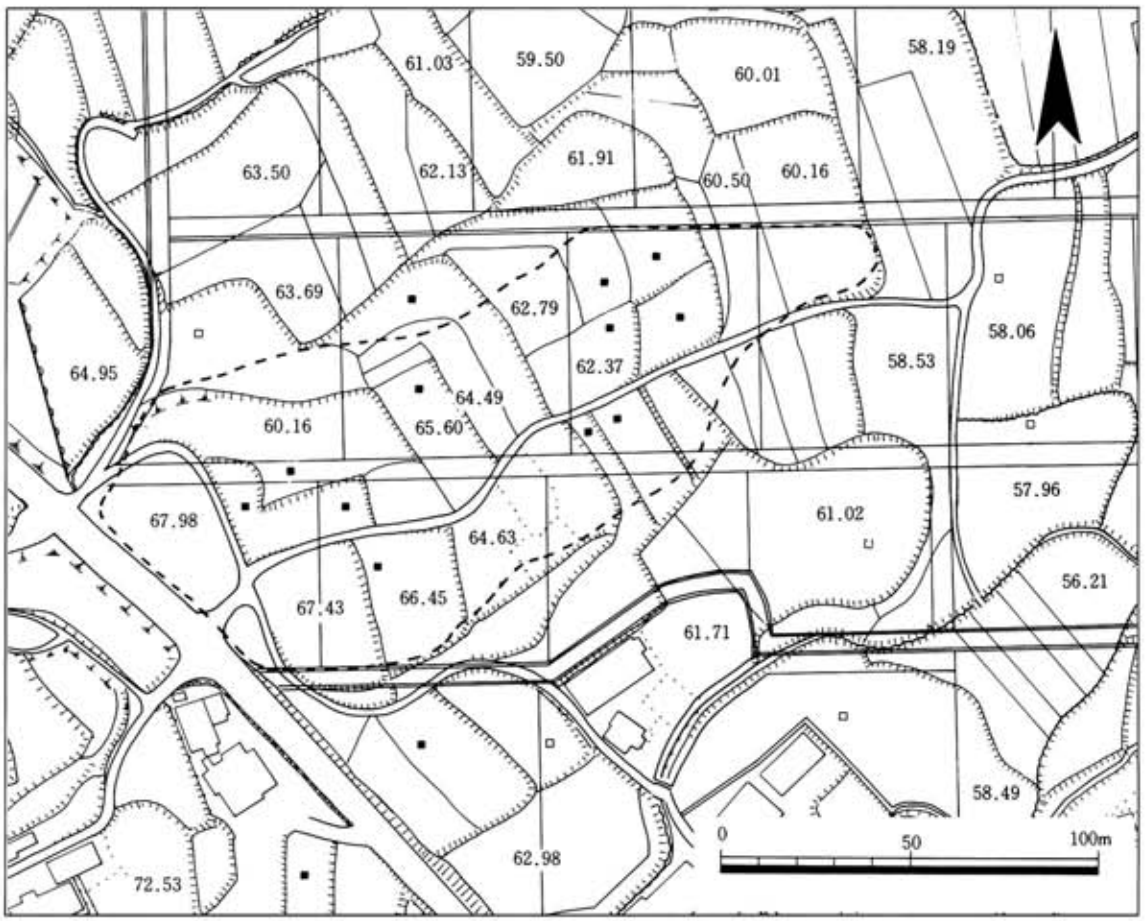
(1) 基山町（吉原地区・園部地区、第３図）

吉原地区は、基山町大字小倉字吉原に所在する。鳥栖筑紫野道路の東側に接する地区で、高原川によって開削された標高43.7～56.0m の谷水田部および畑地である。地区の北側丘陵上には、行司田古墳群・長浦古墳群等の古墳群、南の丘陵上には車路遺跡・玉虫遺跡等の弥生～古墳時代にかけての遺跡が知られている。

調査は対象地６haのうち削平を受ける部分に34の試掘溝を設け実施した。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

園部地区は、基山町大字園部字横石・宮の前に所在する。権現山から杓子ヶ峰へ延びる丘陵と契山から東へ延びる丘陵に挟まれた標高54～67m の水田部に立地する。地区の北方を秋光川、南方を山下川が東流する。対象地区の南側丘陵上には鎌浦古墳群・馬場古墳群・亀ノ甲古墳群等が知られており、当地区にも遺跡が広がっていることが予想された。

調査は対象地３haのうち水路予定部分および、削平予定部分に34の試掘溝を設けて実施した。



第３図　基山町園部地区試掘溝配置図

その結果、地区西部に設けた12の試掘溝より、住居跡・土壙・溝跡・小穴が検出され、7～8世紀のものと思われる土師器・須恵器が出土した。約10,000㎡の広さを持つ集落跡の存在が想定される。

(2) 北茂安町（北茂安東部地区・北茂安中部地区）

北茂安東部地区は北茂安町大字江口に所在する。筑後川右岸の標高3m台の低平な沖積平野上に立地する。調査対象地内には、水田面より0.5m程小高い墓地・畑地があり、この部分は西大島遺跡（中世遺物散布地）として知られていた。

調査は対象地22haのうち、水路予定部分と微高地部分に52の試掘溝を設けて実施した。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

北茂安中部地区は北茂安町大字東尾に所在する。寒水川と通瀬川に挟まれた標高約3～4mの平坦な水田部に立地する。当地区北方の主要地方道小城・北茂安線以北の丘陵地域には、縄文～江戸時代の集落跡・墳墓が密に広がっている。調査対象地一帯は『和名抄』に見える財部郷に比定されており、現在も整然とした条里地割が見られる。

調査は、59年度追加工事分21haと60年度工事予定地25haについて、水路予定部分にそれぞれ48ヶ所、30ヶ所の試掘溝を設けて実施した。その結果、通瀬川に近い部分で一部氾濫原がみられたほかは、遺構・遺物ともに検出されなかった。

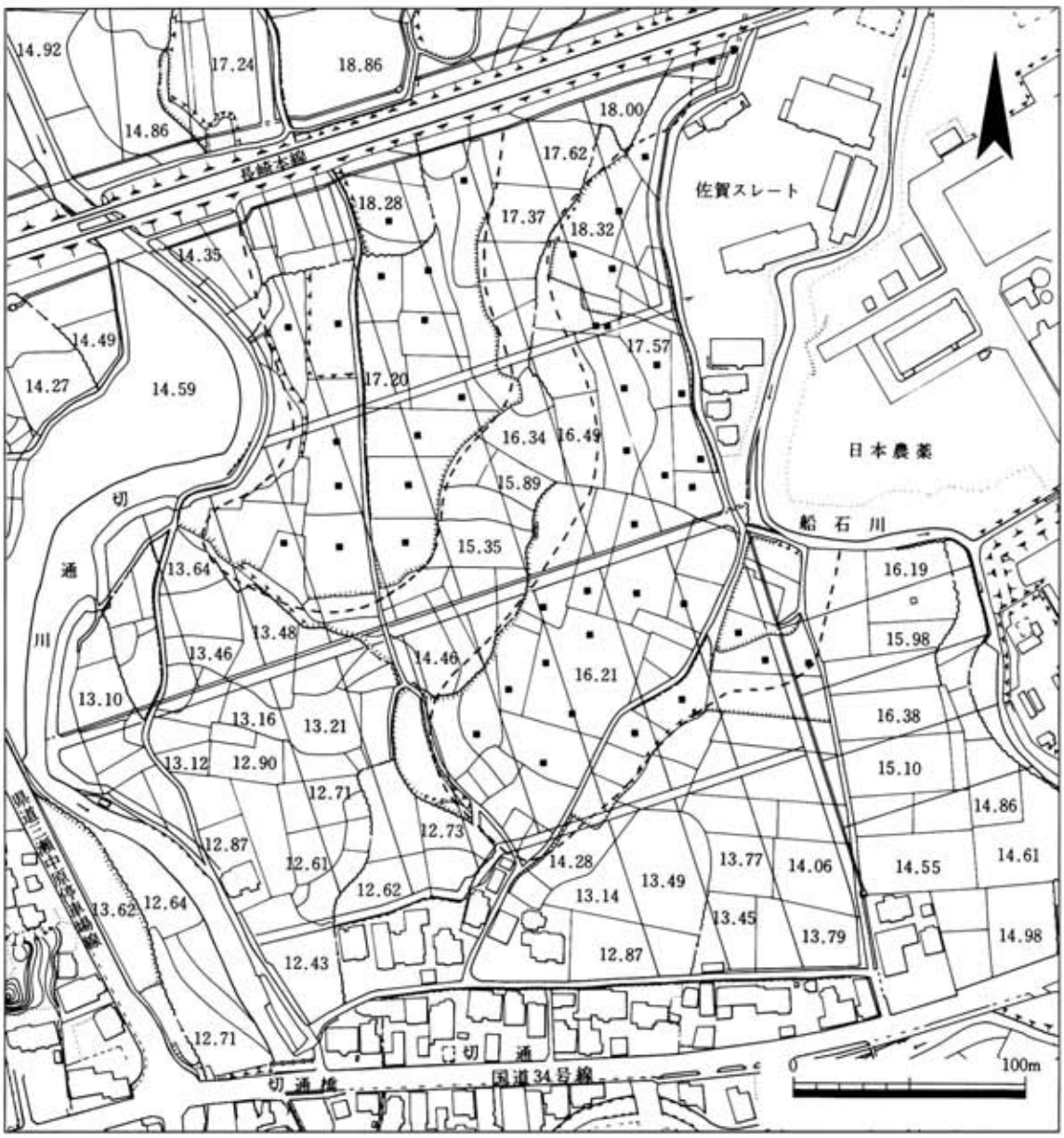
(3) 上峰村（上峰北部地区、第4図）

上峰北部地区は上峰村大字堤字四本杉・一本谷に所在する。切通川両岸の氾濫原および低丘陵縁辺部の標高12～18mの部分に位置し、主に水田として利用されている。地区の北側には長崎本線が走っているが、その北には昭和57年度に上峰村教育委員会による調査で甕棺墓・支石墓・古墳等が検出され、蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛等貴重な遺物が出土した船石遺跡が存在する。また、地区東側には弥生時代の墳墓・集落跡として知られている船石工場団地遺跡・船石南遺跡が隣接しており、調査対象地区の東半も船石南遺跡の範囲に含まれている。調査対象地区内には、甕棺の露頭が見られ、大型甕片の散布もみられる。又東側の日本農薬敷地付近は、〝千人塚〟と呼ばれており、耕作中落ち込む事があったという。良好な甕棺墓群の存在が予想された。

調査は対象地10haに66の試掘溝を設けて行った。その結果、地区東側の低丘陵地縁辺部で削平予定地のほぼ全域から、遺構・遺物が検出された。検出された遺構は、甕棺墓・竪穴住居跡・土壙・柱穴で、特に甕棺墓の遺存状態は良好であった。遺物は、弥生中・後期土器、須恵器、土師器、砥石、石包丁等である。存在が予想される遺跡は地形からみて東西2つのグループにわけられる。西側の一群は船石遺跡から南に延びる集落跡の南端部で、弥生時代中～後期、一部古墳時代にわたる時期のものと思われる。これと小さな谷を隔てた東側の一群は、船石南遺跡の西辺部にあたるもので、弥生時代中期初頭～中頃の甕棺墓群と、同時期の集落跡と思われ、両者合わせて38,600㎡の遺跡の存在が考えられる。

(4) 三根町（三根東地区、第５図・三根西第Ⅰ期地区）

三根東地区は三根町大字西島に所在する。切通川と寒水川に挟まれた標高３ｍ余りの低平な沖積平野に立地する。調査対象地の南側には、佐賀平野を代表する貝塚の一つである本分遺跡が存在する。本分遺跡は弥生時代中期を中心とする遺跡であることがこれまでの調査で確認されていたが、昭和59年度の三根町教育委員会による本分遺跡西端部の調査で（本分三本柳遺跡、本書57頁）、中世に下る遺構の存在が確認された。



第４図　上峰村上峰北部地区試掘溝配置図

第5図　三根町三根東地区試掘溝配置図

調査は対象地22haのうち水路予定部分に75の試掘溝を設けて実施した。その結果、地区南東部に設けた47・48試掘溝より0.7～1.2mの浅い土壙が検出され、内部から弥生中期の土器が出土した。この地点は本分遺跡に近く、本分遺跡の範囲に含まれるものと考えられる。又同じく地区南東部の74・75試掘溝付近は「阿福寺」という遺名が伝えられており、遺構は検出されなかったが比較的浅い部分で地山が検出され、堆積土中より弥生土器・土師器が出土していることから注意を要するであろう。又、地区西部の40・41試掘溝からは堆積土中より土師器片が出土した。

三根西Ⅰ期地区は三根町大字寄人に所在する。三根町西部を南流する井柳川左岸の標高3m前後の低平な沖積平野上に立地する。調査対象地内には周知された遺跡は存在しないが、井柳川下流には直代・菰ノ江・みこし塚等の古代～中世にかけての遺跡が知られているため、当該期に係わる遺跡が存在する可能性を考え確認調査を実施した。

調査は対象地13haのうち水路予定部分に28の試掘溝を設け実施した。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(5) 東脊振村（西石動地区・松葉地区・裏田地区・西石動農道・広域基幹林道）

西石動地区（第6図）は東脊振村大字石動字西二本杉に所在する。田手川によって開析された谷底平野の裾部、標高31～38mの水田部に立地する。地区内を東西に九州横断自動車道が走っているが、これに伴う調査により弥生時代前～中期の集落跡・墓地や奈良時代の集落跡が検出されている。またその北からは中広銅戈鎔范片が表採されたという。この地区の周辺地域には条里制に起因すると思われる地割が遺存し、又「安楽寺草創日記」に永保3(1083)年勅旨により石動荘40町が天満宮安楽寺に寄進されたとあること等から、弥生時代～平安時代に係わる広範な遺構の存在が予測された。

調査は対象地15haに80の試掘溝を設けて行った。その結果、31の試掘溝より土壙・小穴・包含層が検出され、弥生時代前～中期の土器、奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。当該期に係わる68,700㎡の集落跡・墳墓の存在が予想される。

松葉地区（第7図）は東脊振村大字大曲字松本・宮司に所在する。田手川によって形成された河岸段丘の一つ、目達原段丘東部の標高26～28mの水田部に立地する。この地区は弥生～古墳時代の遺物散布地である松本遺跡として知られていた。地区東方500mには、弥生時代墓地として著名な二塚山遺跡、西200mには昭和57～59年度にかけて調査が行われ、弥生時代中期を中心とする集落跡が検出された大曲遺跡群が存在する。

調査は対象地13haに74の試掘溝を設けて実施した。その結果、土壙・小穴・包含層が検出され、中世の土師器が出土した。鎌倉期を中心とした34,500㎡の集落跡の存在が考えられる。

裏田地区（第8図）は東脊振村大字石動字四本杉に所在する。当地区は脊振山系西部の石谷山（754.4m）から南西に広がる丘陵南西端の小谷部に立地する。地区の西方には田手川によっ

第6図　東脊振村西石動地区試掘溝配置図

第７図　東脊振村松葉地区試掘溝配置図

て形成された谷底平野が広がっている。調査対象地は浦田遺跡群の範囲に含まれており、地区北部の微高地上には少なくとも4基の古墳が知られていた。

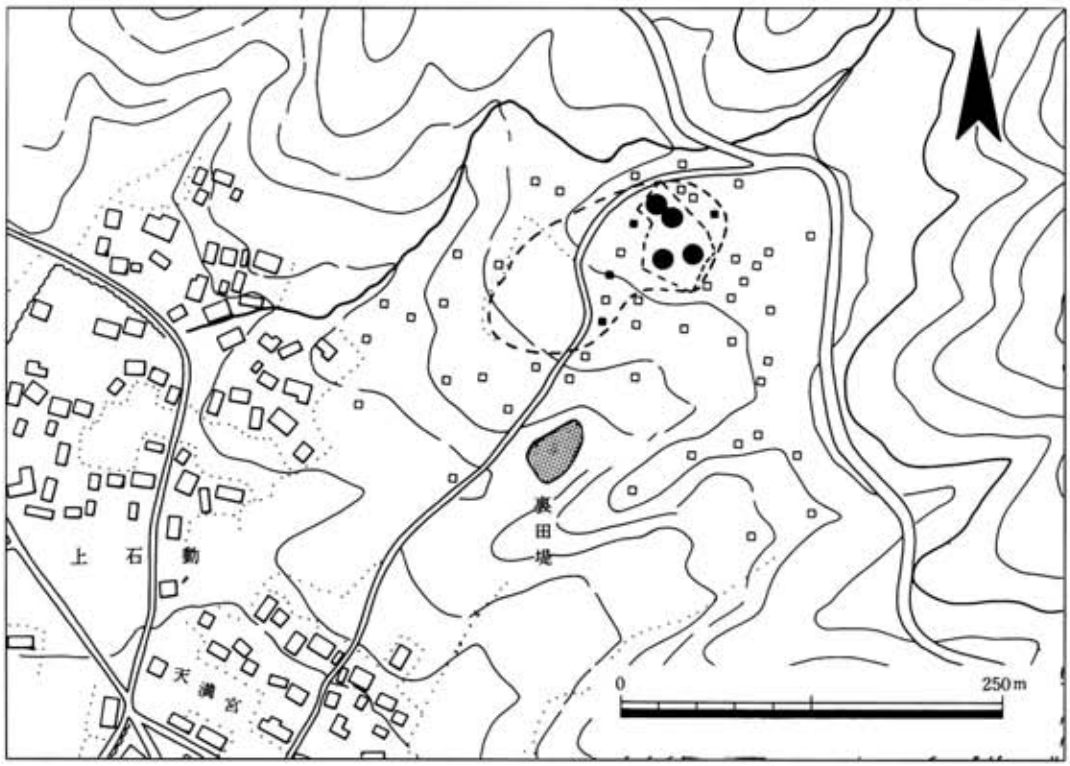
調査は対象地5haに50の試掘溝を設けて実施した。その結果、前記古墳群の北に設けた試掘溝から古墳時代の土師器を含む遺物包含層が、また南からは近世の溝跡が検出された。その他古墳群の所在する微高地周辺に設けた試掘溝より縄文土器片が出土しており、付近に縄文時代に関わる遺跡の存在が予想される。

西石動農道（第9図）は農村総合整備モデル事業に伴う農道開設・拡幅事業である。調査は全計画路線のうち遺跡の存在が予想される西石動地区について実施した。当該地区は石動西一本杉遺跡群の範囲にあたり、地区周辺の尾根から丘陵斜面にかけて多くの古墳が存在する。

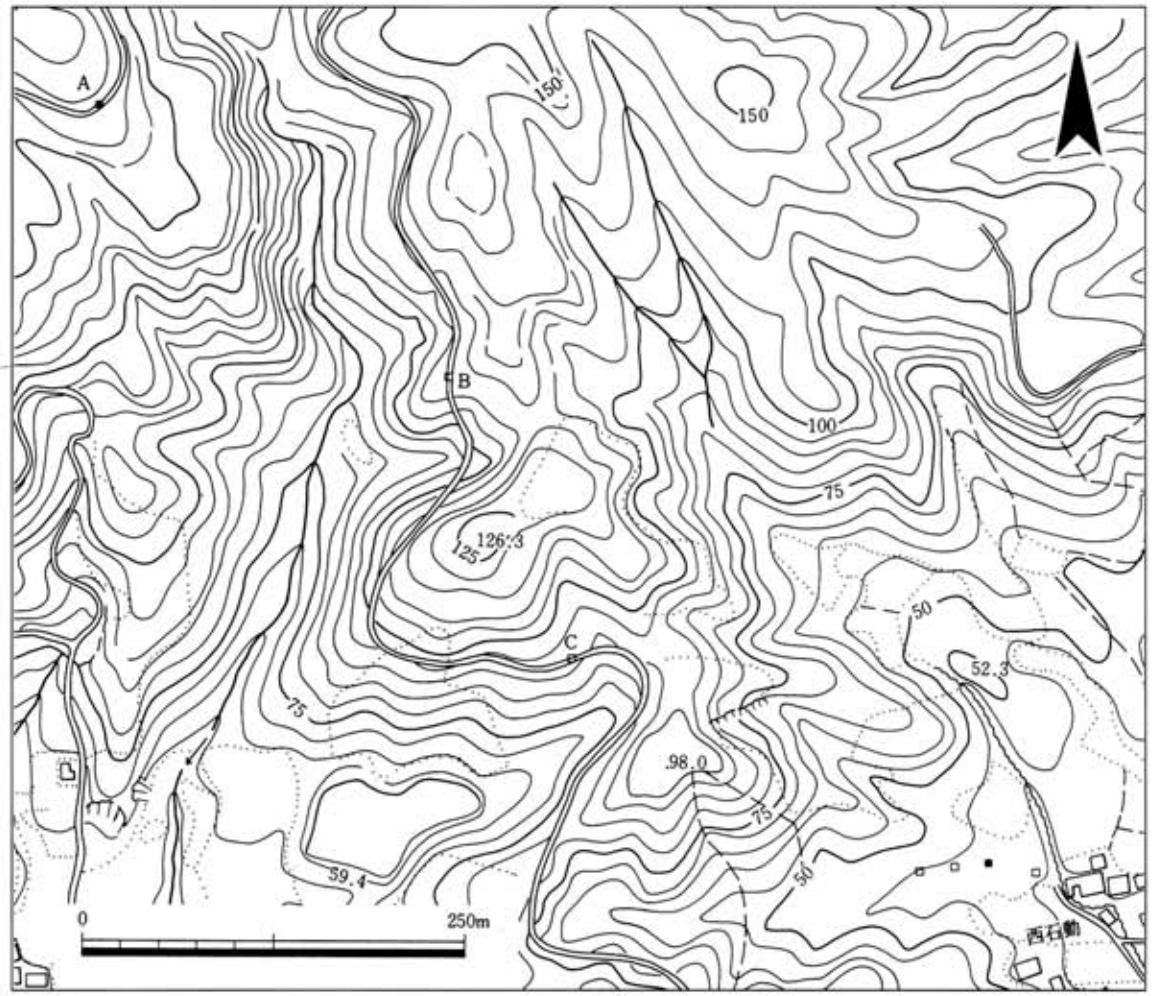
調査は対象地のうち平坦面を有する4地点について実施した。そのうち、当地区を流れる小川に面した畑で、表土下約60cmの所から中世の小穴・性格不明の土壙が検出された。出土遺物は土鍋等である。遺構の上を約20cmの遺物包含層が覆っていた。

広域基幹林道佐賀東部線（第9図）は東脊振村大字石動～三津（みつ）に所在する。昭和59・60年度工事予定地について事前に踏査を行い遺跡の存在が予想される3地点について調査を行った。

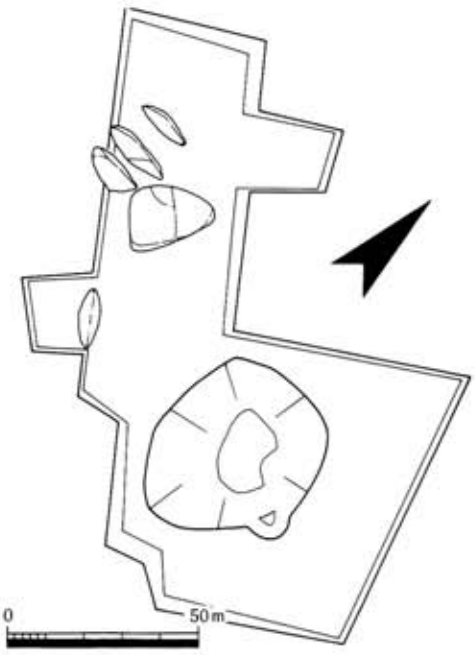
その結果、釈迦岳から南東に延びる尾根上に設けた試掘溝（A地点）より、土壙が一基検出さ



第8図　東脊振村裏田地区試掘溝配置図



第９図　東脊振村西石動農道・広域基幹林道調査地区位置図



左　第10図　広域基幹林道A 地点検出土壙実測図（１/100）

上　図版１　広域基幹林道A 地点検出土壙

れた。(第10図、図版1) 長径2.6m、短径2.2m、深さ0.7mで平面楕円形。埋土は暗褐色植壌土で土師器杯片が出土した。籾岳は、九州探題渋川氏の下向に伴う東肥前の支配権を争う動乱期において、渋川氏を後押しする大内勢が陣を敷いたといわれる(『北肥戦誌』)山で、現在飯盛城跡という名で周知されている。この土壙も、飯盛城との関連が考えられる。

(6) 三田川町(箱川地区)

箱川地区は三田川町大字箱川に所在する。井柳川と田手川に挟まれた標高2.9~3.1mのなだらかな沖積平野上に立地する。調査区内には弥生時代の貝塚として知られる下藤遺跡が存在する。

調査は対象地30haのうち水路予定部分に29の試掘溝を設けて行った。その結果下藤貝塚を中心とした地域で土師器・須恵器の破片が出土したが、遺構は検出されなかった。

(7) 神埼町(田道ヶ里地区・本告牟田地区、第11図)

田道ヶ里地区は神埼町大字田道ヶ里に所在する。田手川と三本松川に挟まれた平坦な沖積平野上に立地する。地区の西方には古代~中世の遺物散布地として知られる本堀朝日遺跡が所在する。又当地区一帯には整然とした条里地割が遺存しており、〝田道ヶ里〟も条里制に起因する地名である。

調査は対象地45haのうち水路予定地について行った。その結果遺構・遺物ともに検出されなかった。

本告牟田地区は神埼町大字本告牟田に所在する。城原川西岸の、国道34号線と千代田・神埼町境に挟まれた、標高約5mの平坦な沖積平野である。この地区を含む周辺地区には、櫛田宮への勅使として京より下向し、そのまま当地を領した本告氏の城館跡といわれる本告牟田城跡のほか、莞牟田・野田等の環濠集落が存在しており、中世を中心とした遺跡の存在が予想された。

調査は対象地115haに約100の試掘溝を設けて行った。その結果、本告牟田の環濠内に設けた試掘溝より、溝跡・土壙・小穴が検出され、中世土師器小皿片が出土した。また莞牟田の環濠内に設けた試掘溝からは溝跡・土壙が検出され、土師小皿・瓦質土器片が出土した。野田集落付近からは、今回は遺構・遺物ともに検出されなかったが、地元の方の話によると、耕作中に土師小皿が出土するとのことで注意を要する。このように本告牟田地区では、本告牟田・莞牟田・野田の環濠集落を中心とした中~近世の遺跡が存在することが予想される。

(8) 千代田町(大石地区・柴尾地区)

大石地区(第12図)は千代田町大字姉・黒井に所在する。城原川西岸の標高約3~4mの平坦な沖積平野部に立地し、北は神埼町本告牟田地区と接する。この地区周辺には弥生時代の集落跡・貝塚として知られている上黒井遺跡・大石遺跡・貴別当神社遺跡等が存在する。大石集落内に残る1m前後の2枚の伏石については、松尾禎作先生により支石墓の可能性が指摘されている(『佐賀県の支石墓』)。また大石・上黒井等の環濠集落が発達している。

調査は対象地80haのうち、削平及び水路予定部分について実施した。その結果、大石集落北

第11図　神埼町本告牟田地区試掘溝配置図

第12図　千代田町大石地区試掘溝配置図

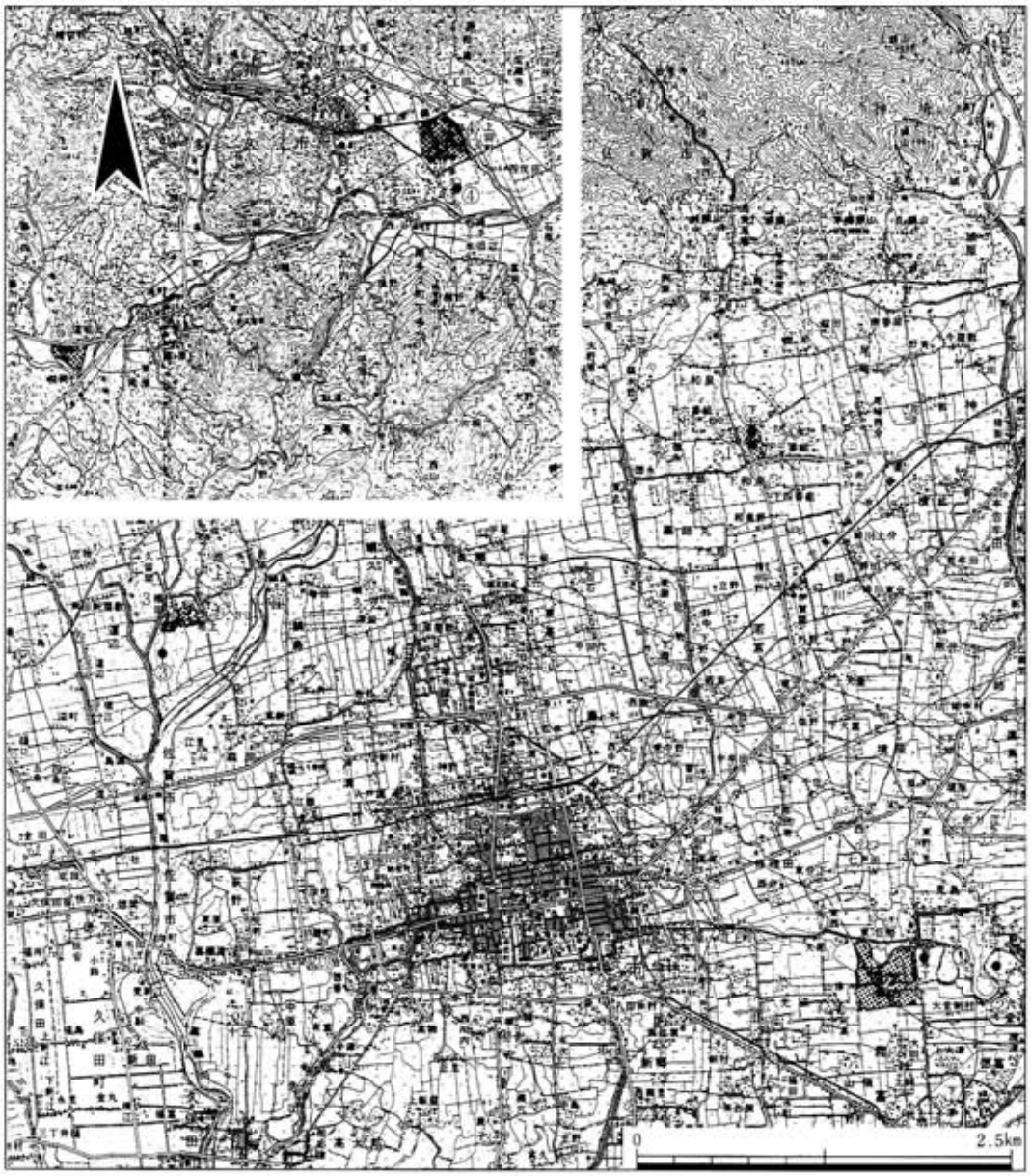
側の前記伏石を含む一帯で弥生時代の小穴・遺物包含層が、また上黒井集落の東側からも表土下約20cmで弥生時代の遺物包含層・貝層が検出された。それぞれの地区で弥生時代中期を主体とする集落跡の存在が予想される。

柴尾地区（第13図）は千代田町大字用作・余り江に所在する。千代田町南西の標高約３ｍの低平な水田部に立地する。地区の南には、昭和57年度に佐賀市教育委員会によって調査され弥生時代後期～中世の集落跡が検出された柴尾橋下流遺跡が所在し、また当地区内にも柴尾遺跡が含まれており、弥生時代～中世の遺跡の存在が予想された。

調査は対象地17haのうち水路予定部分について実施した。その結果、柴尾集落南側に設けた試掘溝より、弥生時代末～古墳時代の遺物包含層及び小穴が検出された。集落跡の存在が予想される。

第13図　千代田町柴尾地区試掘溝配置図

2．佐賀西部地区の調査



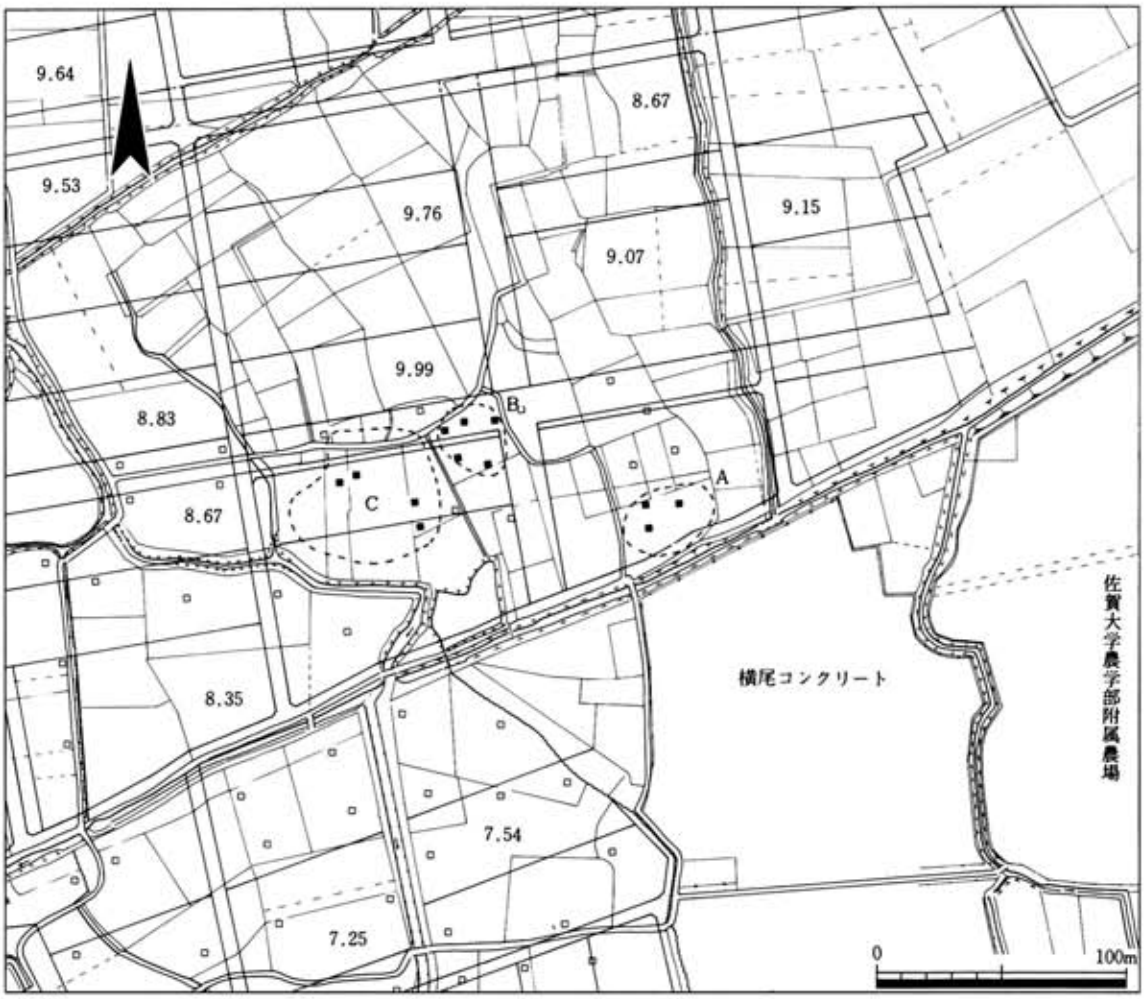
1．佐賀市（久保泉東部地区）
2．諸富町（隈内地区）
3．大和町（川上南部第２地区）
4．多久市（多久東部地区）
5．多久市（宿地区）
① 加与丁野村遺跡
② 村中角遺跡
③ 楢田遺跡
④ 中小路増富遺跡

第14図　佐賀西部地区周辺地形図

(1) 佐賀市（久保泉東部地区、第15図）

久保泉東部地区は、佐賀市久保泉町大字下和泉に所在する。当該地区は県道脊振・佐賀線の西、主要地方道小城・北茂安線の北の標高約６～９ｍの水田部に立地する。地区周辺は北部の脊振山系から流れ出る河川によって形成された合流扇状地にあたり、弥生時代～中世にかけての多くの遺跡が存在する。本地区も泉遺跡・白石原遺跡・下和泉三本栗遺跡・下和泉一本栗遺跡の範囲に当たり、調査前にも弱干の土器の散布が見られた。

調査は対象地10haに140の試掘溝を設けて実施した。その結果、地区北部に設けた７ヶ所の試掘溝より、溝跡６～７条が検出され、土師器小皿・青磁碗が出土した。今回の調査では溝跡しか検出されなかったが、周辺に鎌倉～室町時代の集落跡が存在することが予想される。

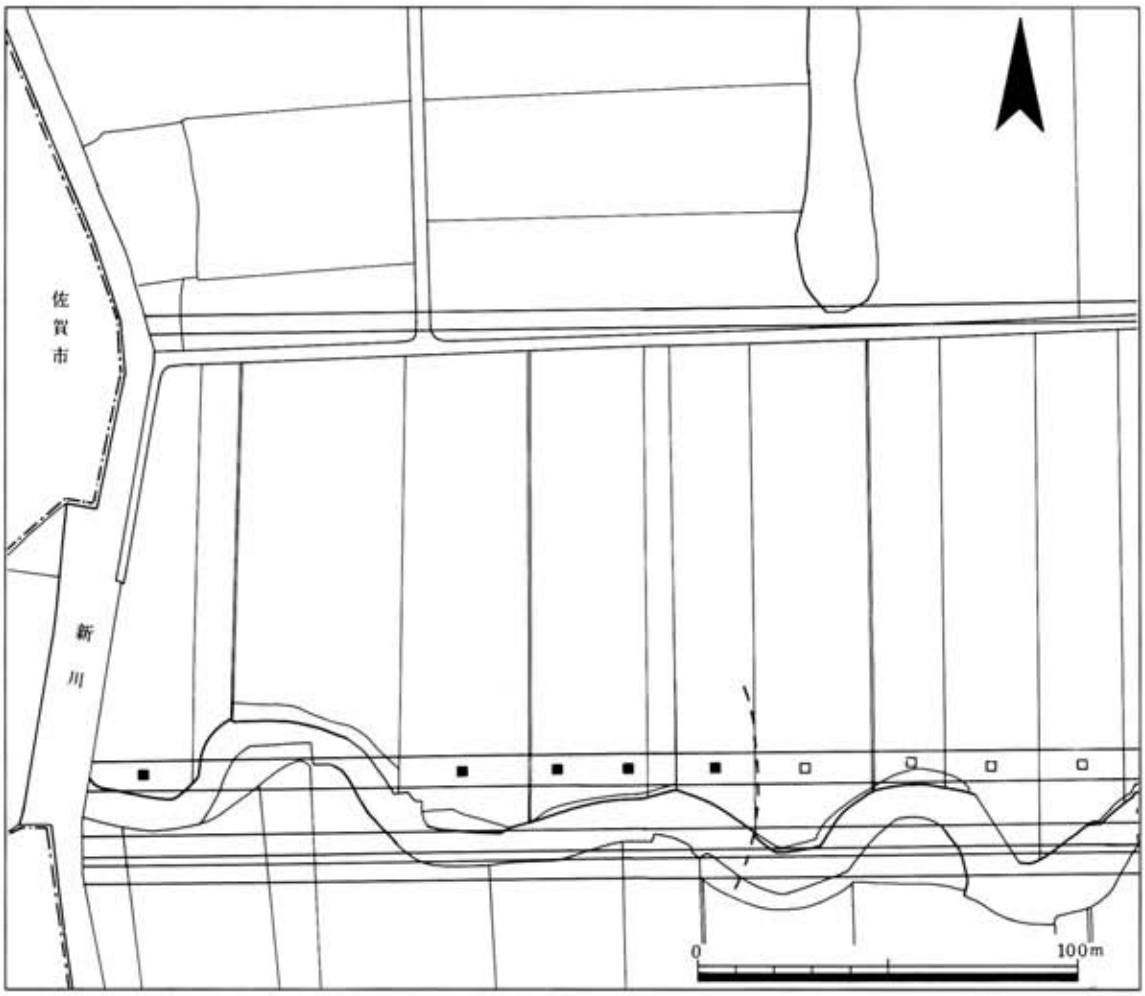


第15図　佐賀市久保泉東部地区試掘溝配置図

(2) 諸富町（陣内地区、第16図）

陣内地区は諸富町大字大堂字陣内分に所在する。佐賀市・諸富町境をなす佐賀江川の南岸、藩政期に開鑿された新川と県道神埼・諸富線に挟まれた標高３ｍ弱の低平な水田部に立地する。地区内には中世の遺物散布地である陣内遺跡が、又地区南部には弥生～古墳時代の遺物散布地である太田本村遺跡や享禄年間（1528～1532）に太田資元が下向してきてそのまま土着したと伝えられる太田城跡が存在する。

調査は対象地約46haのうち水路予定部分に60の試掘溝を設けて行った。その結果地区南西部の周囲よりやや小高い部分から小穴や弥生時代末～中世にかけての遺物包含層が検出された。出土した遺物は弥生時代末の甕・壺・高杯、中世の土師器・瓦器・青磁・白磁等である。水路予定地内に約3,000㎡の遺跡の存在が予想される。



第16図　諸富町陣内地区試掘溝配置図

(3) 大和町（川上南部第２地区、第17図・図版２）

川上南部第２地区は、大和町大字池ノ上字楢田に所在する。東平川と嘉瀬川に挟まれた標高4.5～5mの低地である。地区内には弥生時代～中世の遺物散布地である楢田遺跡・池上三本松遺跡が知られている他、地区北部には道善寺古墳が存在する。弥生時代集落跡として知られている久留間かみ塚遺跡は、東平川を挟んですぐ西側にある。

図版２　川上南部第２地区（北から）
中央が道善寺古墳

調査は対象地10haのうち水路予定地及び微高地部分に93の試掘溝を設けて行った。その結果、道善寺古墳西方の第36試掘溝で井戸跡が検出された他、18の試掘溝で小穴が検出された。又道善寺古墳の周辺に設けた９の試掘溝からは溝跡が検出されたが、古墳の周溝ではないと思われる。遺物は弥生土器甕、鎌倉時代陶磁器等で少量しか出土しなかった。

(4) 多久市（多久東部地区・宿地区）

多久東部地区は、多久市北多久町大字多久原字両ノ原、南多久町大字下多久字中小路・上田町に所在する。今出川と唐津線が交わる地点の南西に広がる標高20～25mの緩かな傾斜地で、地区の東部は今出川により度々冠水を受けたが、市内でも一番の良田になっている。当地区は大正年間に大規模な耕地整理が実施されている。調査対象地の西部には弥生時代の築地遺跡、縄文～古墳時代の中小路遺跡が知られており、また南西丘陵では抉入石斧や石鏃が表採される等、地区内に縄文～弥生時代の遺構の存在が予測された。

調査は対象地26haのうち削平部及び水路予定地に228の試掘溝を設けて実施した。その結果28の試掘溝で縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・白磁・滑石製石鍋等の破片やサヌカイト・黒曜石剝片が出土したが、流れ込みによるものと思われ、遺構は検出できなかった。

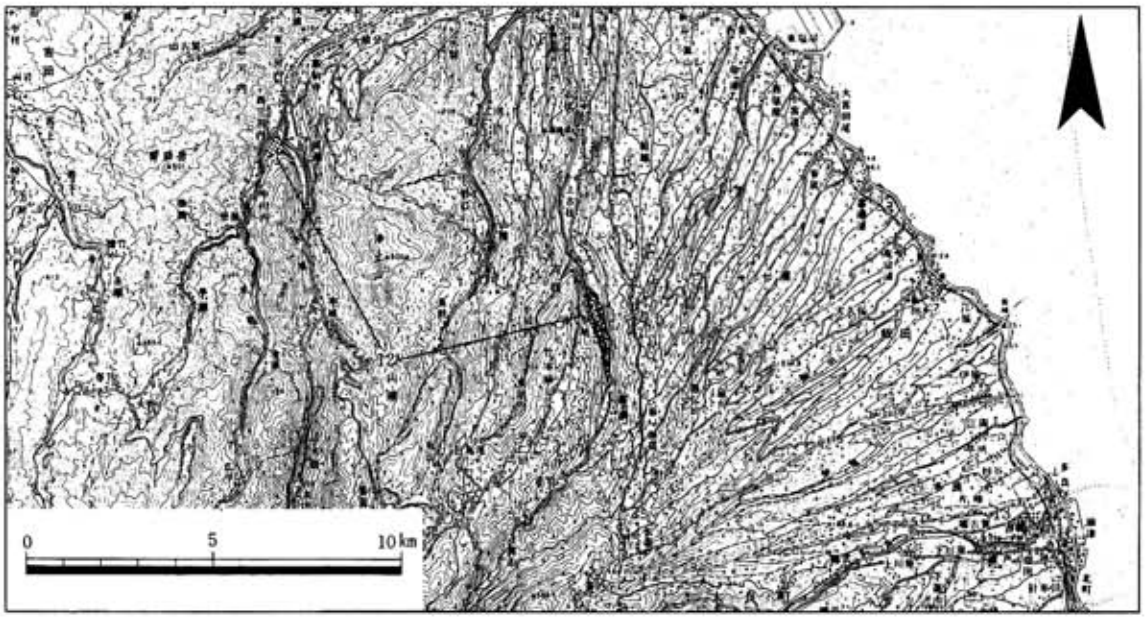
宿地区は、多久市西多久町大字板屋字宿に所在する。牛津川によって作られた谷底平野で向谷川と、馬神峠から北へ伸びる丘陵に挟まれた標高43～51mの水田部に立地する。地区南東の丘陵上には、弥生時代の遺物散布地である吉ノ尾遺跡が知られており、過去に磨製石斧が出土したといわれ、縄文～弥生時代の遺跡の存在が予想された。

調査は、対象地26haのうち削平部及び水路予定部に34の試掘溝を設けて行った。その結果、表土下で砂岩礫が検出され、遺構・遺物は検出されなかった。なお地区の一角に、江戸時代の石祠２基・戦国末～江戸初期の五輪塔・宝篋印塔が放置されていたが、工事地区からは除外される。

第17図　大和町川上南部第２地区試掘溝配置図

3．佐賀南部地区の調査

第18図　佐賀南部地区周辺地形図(1)



1．武雄市（武雄南部地区）
2．武雄市（橘地区）
3．武雄市（川登地区）
4．武雄市（本部地区）
5．北方町（宮裾地区）
6．北方町（大崎地区）
7．白石町（白石西第１期地区）
8．白石町（白石西第２期地区）
9．白石町（白石西第４期地区）
10．有明町（有明第三期地区）
11．有明町（牛間田地区）
12．鹿島市（鹿島西部地区）
13．太良町（多良地区）
14．嬉野町（下野地区）
15．嬉野町（下宿地区）
①　辺田三本松遺跡

第19図　佐賀南部地区周辺地形図（2）

（1）　武雄市（武雄南部地区・橘地区・川登地区・本部地区）

武雄南部地区は、武雄市橘町大字片白に所在する。武雄川と潮見川に挟まれた標高４～5.2mの平坦な水田部に立地する。地区東側の平地には林副遺跡・庄の前遺跡が、南方の花島丘陵には正現寺古墳等の古墳や、島山城跡等が所在する。

調査は対象地15.7haのうち削平部及び水路予定部に33の試掘溝を設けて行った。その結果、弥生土器片少量が出土したが、遺構は検出できなかった。

橘地区も同じく橘町大字片白に所在する。本地区は北と南の２つの地区に分けられるが、いずれも杵島山系西麓の水田部に立地している。

北の地区は釈迦寺集落の南の標高５～９ｍの緩やかな傾斜を持つ水田部である。地区周辺は鳴瀬古墳群の範囲に含まれ、また北側丘陵上には縄文～平安時代の遺物散布地である釈迦寺遺跡が存在する。

調査は対象地3.85haに10の試掘溝を設けて行った。その結果、弥生土器片・土師器皿片が出土したが、遺構は検出されなかった。

南の地区は南片白集落と、潮見川の支流である東川に挟まれた標高４～９ｍの水田部に立地

する。本地区の東側を囲繞する丘陵上には、東福寺・立石・南片白等の古墳群が知られており、また地区東部は縄文～古墳時代の南片白遺跡、地区西部の平地は馬場遺跡の範囲にあたり、それぞれ遺物散布地として知られていた。地区南部の独立丘陵上には、著名なおつぼ山神籠石が存在する。なお当地区を九州横断道予定線が斜めに横切っている。

調査は対象地14.65haのうち、削平部及び水路予定地に59の試掘溝を設けて実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器・陶器等の破片や、サヌカイト・黒曜石が出土したが、遺構は検出されなかった。

川登地区は東西２つの地区に分けられる。

東の地区（宇土手地区）は武雄市東川登町大字袴野に所在する。潮見川と国道34号線に挟まれた標高37.5～75.2m の谷底平野部に立地する。国道を挟んで東側の丘陵には縄文時代の遺物散布地である天竜庵遺跡が存在する。

調査は対象地4.8haのうち削平部及び水路予定地に23の試掘溝を設けて行った。その結果、黒曜石・サヌカイト剝片、土器小片が出土したが流れ込みによるものと思われ、遺構は検出されなかった。

西の地区（高瀬・宇土手地区）は武雄市西川登町大字神六に所在する。潮見川の支流高瀬川によって作られた標高37.5～75.2m の谷水田部に立地する。地区南部の丘陵地帯には縄文時代及び中・近世の遺物散布地である周路遺跡が存在し、その東の溝口遺跡付近からは、昨年の確認調査で押型文土器が出土した。

調査は対象地17.55haのうち削平部及び水路予定地に94の試掘溝を設けて行った。その結果、打製石斧・黒曜石・陶器小片が出土したが遺構は検出されなかった。

本部地区は武雄市若木町大字川古に所在する。川古川及び納所川によって作られた標高47～69m の谷水田部に立地する。周辺には縄文時代の遺物散布地である管ノ谷遺跡や広早田遺跡等が所在する。

調査は対象地8.7haのうち削平部及び水路予定地に計71の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(2) 北方町（大崎地区・宮裾地区）

大崎地区は北方町大字大崎に所在する。六角川水系によって作られた沖積平野で、本地区は久津具集落の立地する独立丘陵の東と南に広がる標高３m 前後の水田部である。この丘陵上には、弥生～古代の遺物散布地である久津具遺跡や清川古墳、中世の久津具城跡があり、これらに関連する遺跡の存在が予想された。

調査は対象地21haのうち削平部分及び水路予定地について行った。その結果、土師器片・黒曜石片が出土したが、遺構は検出されなかった。

宮裾地区は同じく大字大崎に所在する。徳連岳から南に延びる丘陵先端に位置する猪熊山の

東の標高６ｍ程の水田部である。西の丘陵には、朝日ダムによって半壊された城ヶ平城跡や、縄文～古墳時代の遺物散布地である上深町遺跡等が存在する。

調査は対象地12.3haのうち削平部及び水路予定地に44の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(3) 白石町（白石西第１期地区・白石西第２期地区・白石西第４期地区）

白石西第１期地区（第20図）は白石町大字馬洗に所在する。杵島山系から北東に延びる丘陵麓の標高3.3～3.5ｍの水田部に立地する。当地区の範囲には、弥生時代～中世の遺物散布地である馬洗上黒木遺跡・馬洗下黒木遺跡が含まれる。また西の丘陵上には旧石器～室町時代の遺跡が数多く存在する。

調査は対象地22haのうち、削平を受ける微高地及び水路予定地に16の試掘溝を設けて行った。その結果、地区北東部の水路予定部分に設けた試掘溝より古墳～平安時代の遺物包含層・小穴

第20図　白石町白石西第１期地区試掘溝配置図

・土壙等が検出された。土層は概ね15～20cmの暗灰色の耕作土、20～25cmの暗灰色粘質土があり、その下の暗灰色粘質土と灰白色粘質土の混じる層に遺構が掘り込まれていた。水路予定地内に約250㎡の古墳～平安時代の集落跡の存在が予想される。

白石第２期地区は白石町大字今泉に所在する。六角川によって形成された標高約２ｍ前後の低平な平野部に立地する。対象地区内には古代～中世の遺物散布地である今泉遺跡が所在する。また地区周辺には条里地割が見られる。

調査は対象地31haのうち水路予定地に18の試掘溝を設けて実施した。その結果、近世陶磁器片数点が出土したが、遺構は検出できなかった。

白石西第４期地区は昭和60年度工事予定地区の堤地区と、61年度以降工事予定の湯崎地区について調査を行った。

堤地区は白石町大字堤に所在する。杵島山系から北東の妻山神社へ延びる丘陵の更に東へ延びる低丘陵の南部に広がる標高3.2～3.7m の沖積平野上に立地する。対象地の北部には馬洗上黒木遺跡・馬洗下黒木遺跡が、南部には堤遺跡等の弥生～室町時代の遺物散布地が含まれる。南方の独立丘陵には白石五郎通益が文治３年(1187)に築いたと伝えられる隆城跡が存在する。

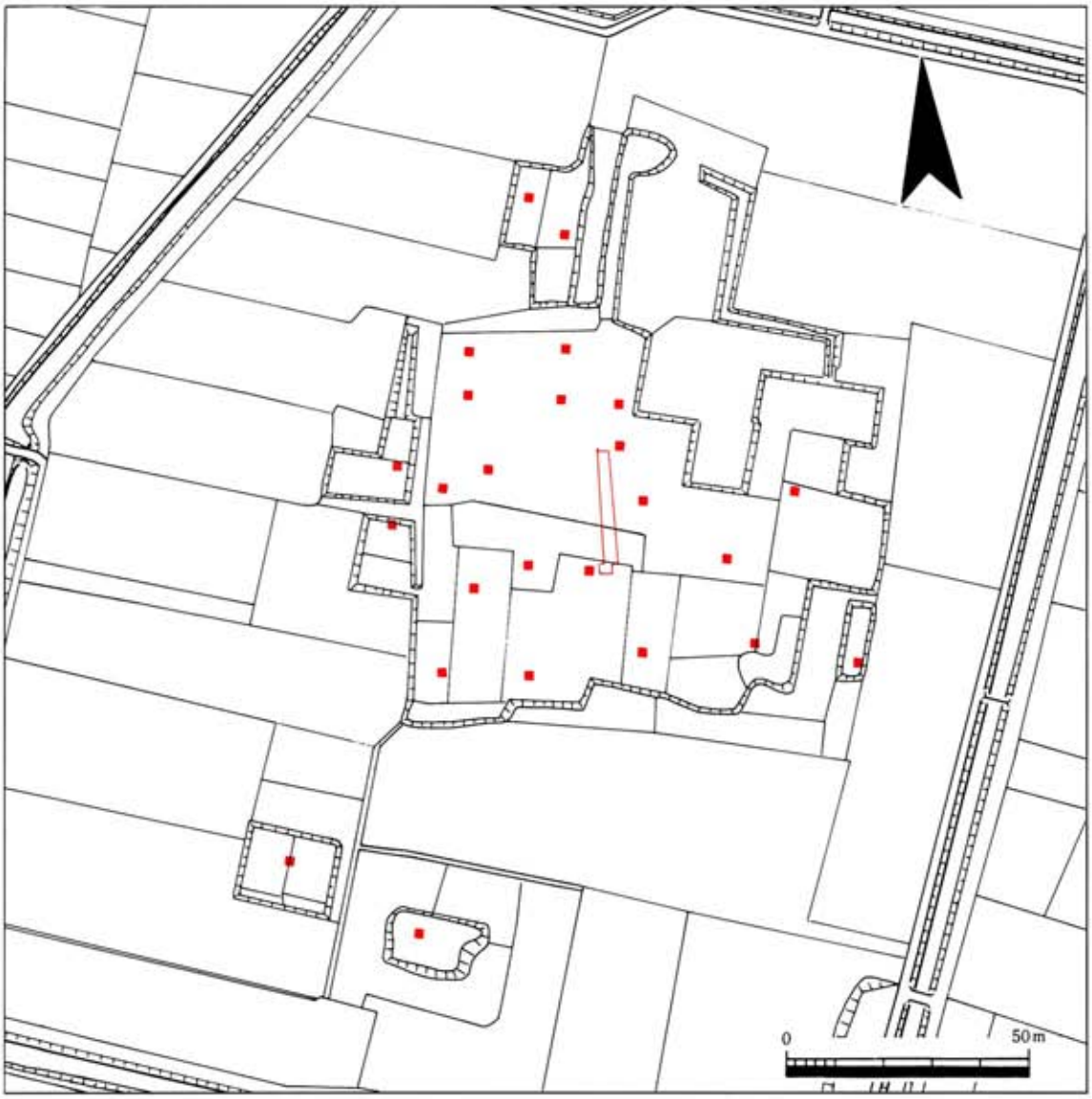
調査は対象地23haのうち、削平部及び水路予定地に、32の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

湯崎地区（第21図）は白石町大字湯崎に所在する。杵島山系東麓の標高3.4ｍ前後の沖積平野上に立地する。今回調査対象地となったのは、当地区のうち周囲の水田面より40～70cm小高い畑地である。その畑地の遺存状況が形状の上で城館跡の存在を考えさせるものであり、又畑地では古墳時代の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・瓦器、近世陶磁器、砥石等がかなり表採されるため、大規模な集落跡・城館の存在が予想されたのである。当地区は湯崎東遺跡の範囲にあたり、昭和54年に当地区東方で白石導水事業に伴い緊急発掘調査が実施されたことがある。西方の丘陵地域には湯崎古墳群をはじめ、弥生時代～中世の遺跡が数多く存在する。当地区は通称「じっちょーばたけ」と呼ばれているが「十町（丁）畠」の謂であろう。又昔、寺があったと言われており、現在地区南東に五輪塔等の石造物が寄せられている。

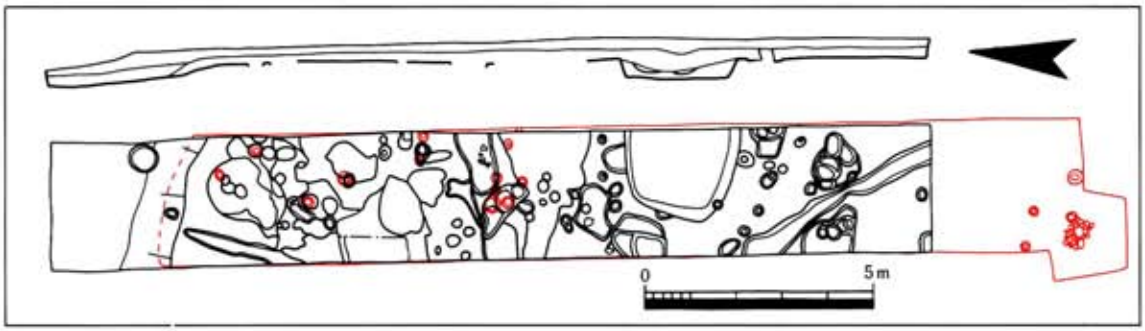
調査は地区全域に25の試掘溝を設けて行った（第１～25試掘溝）。その結果18ヶ所の試掘溝で土壙・小穴・溝跡が検出され、３ヶ所の試掘溝では遺構面まで達しなかった。しかしすべての試掘溝で弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器等が出土した。土層は概ね30～50cmの暗褐色耕作土（Ⅰ層）、20～30cmの黒灰色粘質土（Ⅱ層)、以下は遺構面である黒灰色粘質土と灰白色粘質土が混じった層（Ⅲ層）である。遺構面は南にやや低くなっている。

その後本遺跡の重要性に鑑み、確認調査の結果の検討を行い、遺跡の保護の立場から更に詳しい調査を実施することにした。

調査は地区中央に幅３ｍ、長さ24m の試掘溝を設けて行った。その結果Ⅱ層上面からも粗ら



第21図　白石町白石西第４（湯崎）地区試掘溝配置図



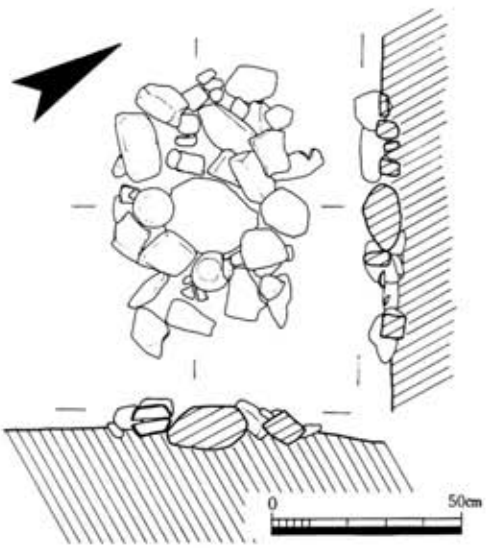
第22図　湯崎地区確認調査遺構配置図　（赤は第Ⅱ層上面検出遺構）

ではあるが遺構が検出できた。

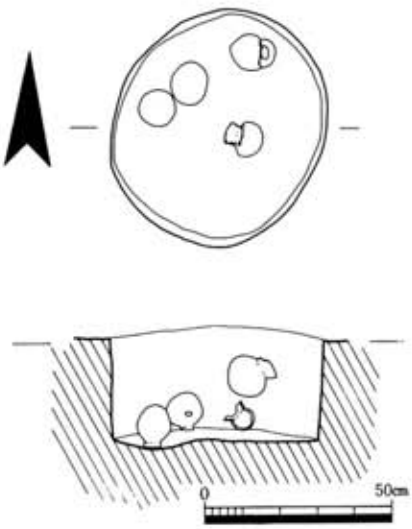
Ⅱ層上面の遺構は集石遺構１及び小穴である。SG001集石遺構（第23図　図版３－２）は大小50個の石を集め、２個の土師器杯を接口したものを遺構の南東と南西部分に配している（第25図17はそのうち南西上のもの)。下部構造は検出できず、又２組の杯の内部からも何も検出されなかった。石や杯はほとんど攪乱を受けていないと思われ、少なくともこの一角は当時の生活面から削平をほとんど受けていないと思われる。小穴からは土師器杯・瓦器椀等のほか縁釉陶器片が出土した。これらのことからⅡ層上面は平安～鎌倉時代の遺構面であると考えられる。

Ⅲ層上面で検出された遺構は土壙10基・溝跡３条・小穴等である。SK002土壙（第24図　図版３－３）は径0.6m×0.5m、深さ0.3mの平面円形のもので、内部より須恵器甕１、土師器小壺３の一括遺物を得た(第25図６～９)。Ⅲ層上面で検出された遺構のうち埋土が黒色粘質土のものからは、平安～鎌倉時代の土師器・白磁（第25図18）等が出土したが、これらはⅡ層上面から掘り込まれたものであろう。以上のこと及び出土した土器からⅢ層上面の遺構は弥生時代後期～古墳時代のものであろうと考えられる。なお遺構については確認のため一部のものを掘り下げたが、他はそのまま埋め戻した。

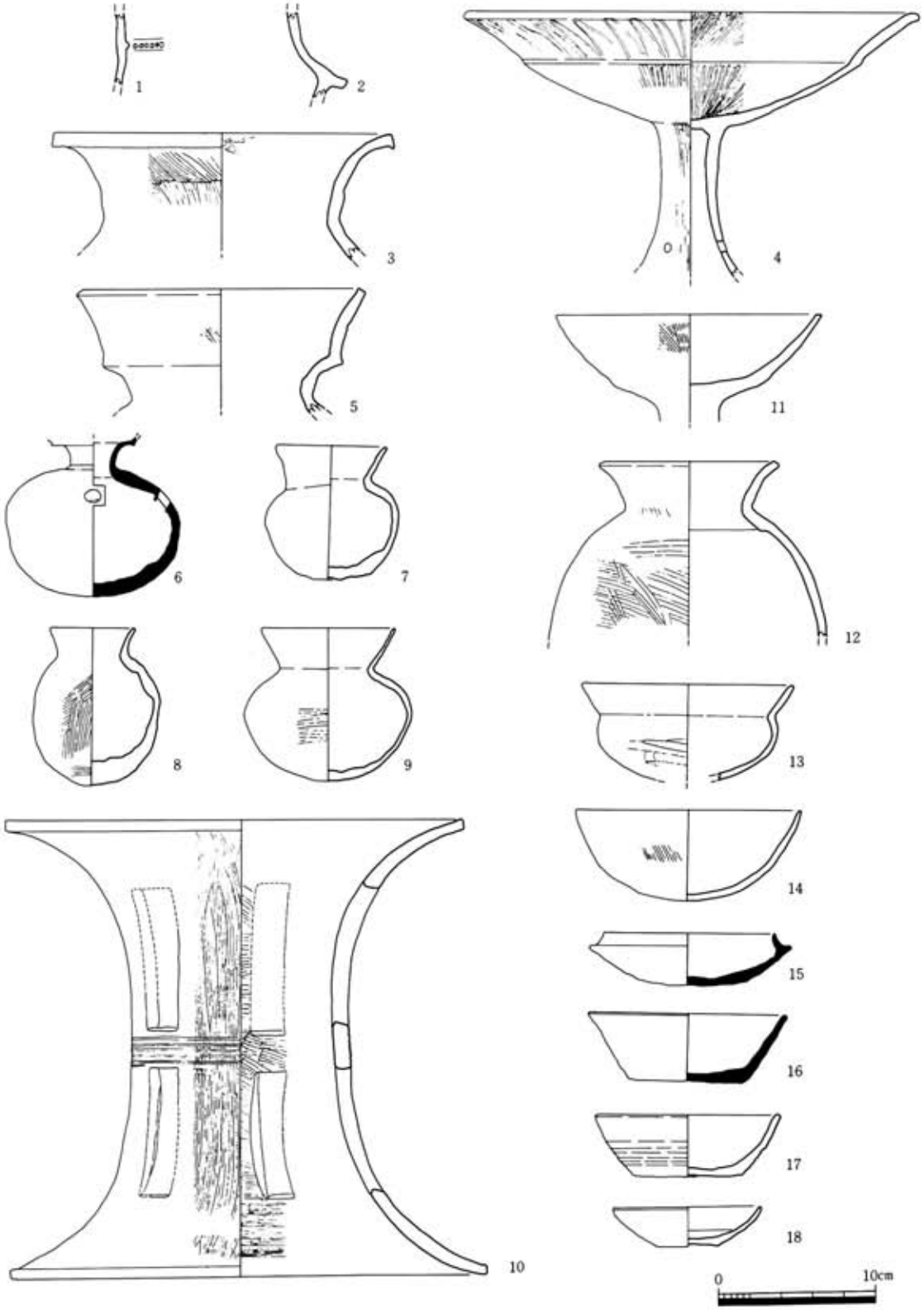
前後の確認調査で出土した土器（第25図）を概観すると、１甕・２筒形器台は弥生時代中期頃のもので磨耗が激しく流れ込みによる可能性もある。３は後期壺・４は古墳時代初期土師器高杯、５二重口縁壺であるが、これらの時期に属する遺物は比較的少ない。この頃のものとして鉄製手鎌も出土した。６～９はSK002土壙出土のもので、このうち６の甕はよくしまる頸部の中位より強く外反し、頸部と口縁部の境には鋭い突帯を有する。体部は偏球形で、須恵器の編年上最も初期の段階に位置付けられるものである。10は透し付器台で、これは透しを５方に



第23図　SG001集石遺構実測図



第24図　SK002土壙実測図



第25図　白石町白石西第４（湯崎）地区確認調査出土土器実測図

有するが4方のものもある。11高杯、12甕、13・14杯、15は須恵器杯身である。これら5～6世紀の時期のものが量的に最も多い。16須恵器杯、17土師器杯、18輸入白磁皿である。

以上のことから、本地区は古墳時代前半を主とする弥生～鎌倉時代の集落跡であることが確認された。遺跡は更に微高地の周辺部まで広がるものと考える。又杵島平野では発掘調査の事例の少なさも一因であるが、標高3mという低平地で弥生時代に遡る集落跡が確認されたのは始めてのことで、手鎌等の出土から稲作が行われていた事が充分考えられ、今後のこの地域の開発を考える上で非常に重要な資料となろう。

図版3

1．湯崎地区試掘溝全景（南から）
2．ＳＧ001集石遺構
3．ＳＫ002土壙
4．第25図6
5．同　7
6．同　4
7．同　10

(4) 有明町（有明第３期地区）

有明第３期地区は有明町大字辺田に所在する。杵島山系東麓の標高約２ｍの低平な水田部に立地する。当地区内には中央に竜子田遺跡（中世）、南東部に高町遺跡（古代・中世）、南西部の辺田五本松遺跡（弥生時代～中世）のそれぞれ遺物散布地として知られていた。又当地区には六ケ里という地名が遺存しており、正応５(1292)年８月16日付河上宮造営用途支配惣田数注文に見える「六筒里保二十丁」に相当する地区と考えられた。

調査は対象地34haに57の試掘溝を設けて行った。その結果、明確な遺構・遺物は検出されなかった。

(5) 鹿島市（鹿島西部地区）

鹿島西部地区は鹿島市大字三河内・音成に所在する。本地区は更に西と東の地区に分けられる。いずれも多良山系の北部を刻む谷部に立地する。

西の三河内地区は、中川と古庭川の合流地の南側に位置し、両河川により発達した河岸段丘上に立地する。調査区内には縄文時代・中世の遺物散布地である山口遺跡、中世の遺物散布地である湯谷遺跡が周知されている。

東の音成地区は祐徳稲荷神社の南3.5km、浜川沿の標高112～138ｍの水田部に立地する。調査区の西1.5kmの丘陵上には縄文時代の遺物散布地である平仁田遺跡が知られていた。

調査は三河内地区70、音成地区に23の試掘溝を設けて行った。その結果三河内地区で黒曜石片が出土したが流れ込みによるものと思われ、遺構は検出されなかった。

(6) 嬉野町（下野地区・下宿地区）

下野地区は嬉野町大字下野に所在する。塩田川と吉田川の合流地点南西部の標高35～39ｍの水田部である。地区北西の丘陵上には中世の岩屋城跡が知られているが、その他には付近に遺跡は知られていない。

調査は対象地6.4haに38の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

下宿地区は嬉野町大字下宿に所在する。塩田川の支流下宿川の作る谷水田部である。地区南東の谷間には内野山窯が幾つか知られている。

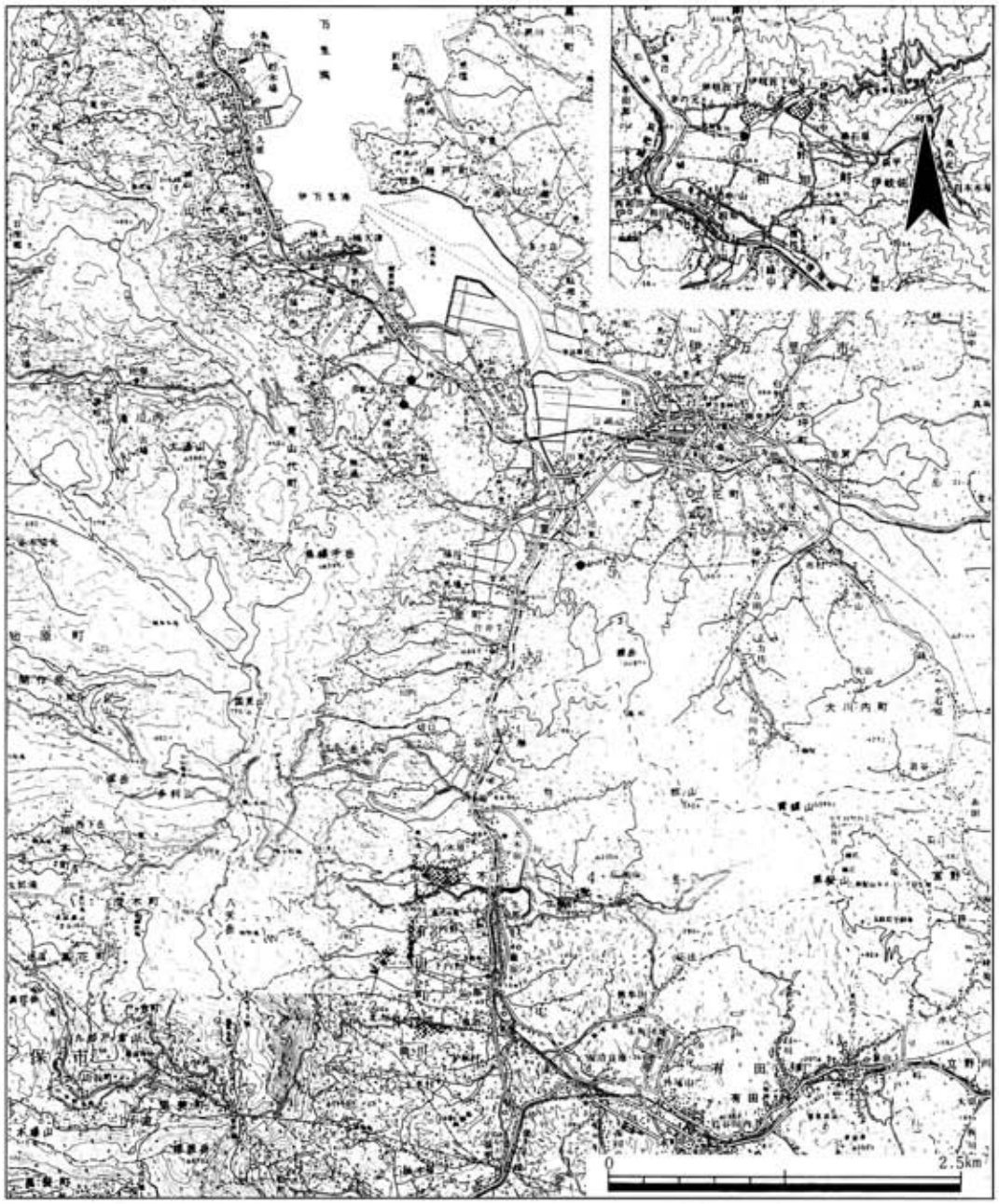
調査は対象地6.4haに10の試掘溝を設けて行った。その結果遺構・遺物は検出されなかった。

(7) 太良町（多良地区）

多良地区は太良町大字多良に所在する。多良山系西方に開く谷底平野に立地する。この谷を囲む南北の丘陵上には縄文時代の遺物散布地である多良峰・喜三郎・下打越等の遺跡が知られていた。

調査は対象地15haに47の試掘溝を設けて行った。その結果遺構・遺物は検出されなかった。

4．佐賀北部地区の調査



1．西有田町（大山地区）
2．西有田町（曲川地区）
3．西有田町（切楠農道）
4．西有田町（黒岩地区）
5．伊万里市（腰岳農道）
6．相知町（伊岐佐地区）
① 天神搦遺跡
② 浦川内東方遺跡
③ 鈴桶遺跡
④ 伊岐佐伊良尾遺跡

第26図　佐賀北部地区周辺地形図

(1) 伊万里市（腰岳農道）

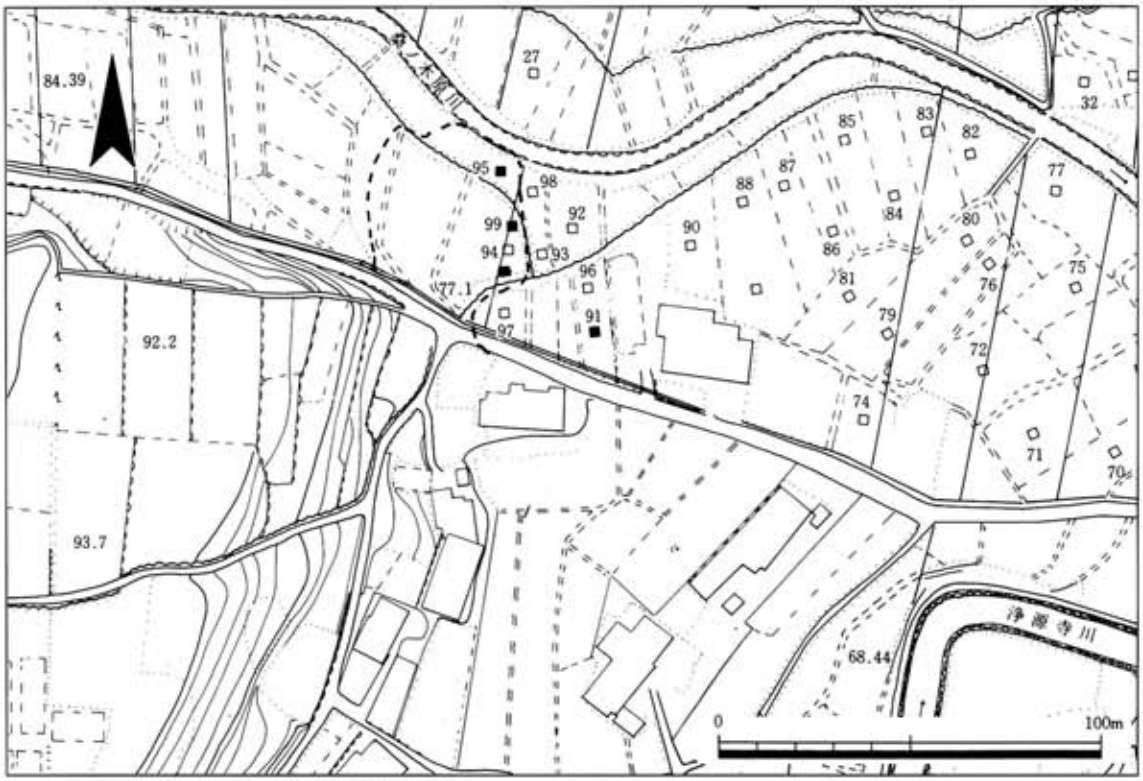
腰岳地区は、伊万里市立花町に所在する。当地区は昭和59年度に伊万里市教育委員会によって発掘調査が実施された鈴桶遺跡の所在する丘陵の、谷を挟んですぐ東の丘陵上に立地する。

調査は、腰岳農免道路計画予定地770ｍのうち、遺跡の立地が考えられる丘陵上について実施した。その結果、丘陵上の平坦部に設けた試掘溝より、多量の黒曜石石刃・石核・剥片が検出された。このことから、縄文時代の石器製作遺跡が存在するものと考えられる。

(2) 西有田町（大山地区・曲川地区・黒岩地区・切楠農道）

大山地区（第27図）は西有田町大字大木に所在する。当地区は有田川の支流である浄源寺川北側の標高約60～80ｍのなだらかな傾斜を持つ水田部に立地する。調査対象地周辺は遺跡の密集した地域で、特に縄文時代の遺物散布地が多い。対象地北側の丘陵上には上原遺跡、南側には山本遺跡・矢杖遺跡・千歳山遺跡等が存在する。また地区西辺には著名な坂の下遺跡が一部含まれる。坂の下遺跡は昭和42・45・49年に県教育委員会と県立博物館により３次にわたって調査が行われ、貯蔵穴21ケ所が検出され、阿高系土器・各種石器・木の実等が出土しており、町の史跡に指定されている。

調査は対象地23haに99の試掘溝を設けて行った。特に坂の下遺跡周辺については遺跡の範囲



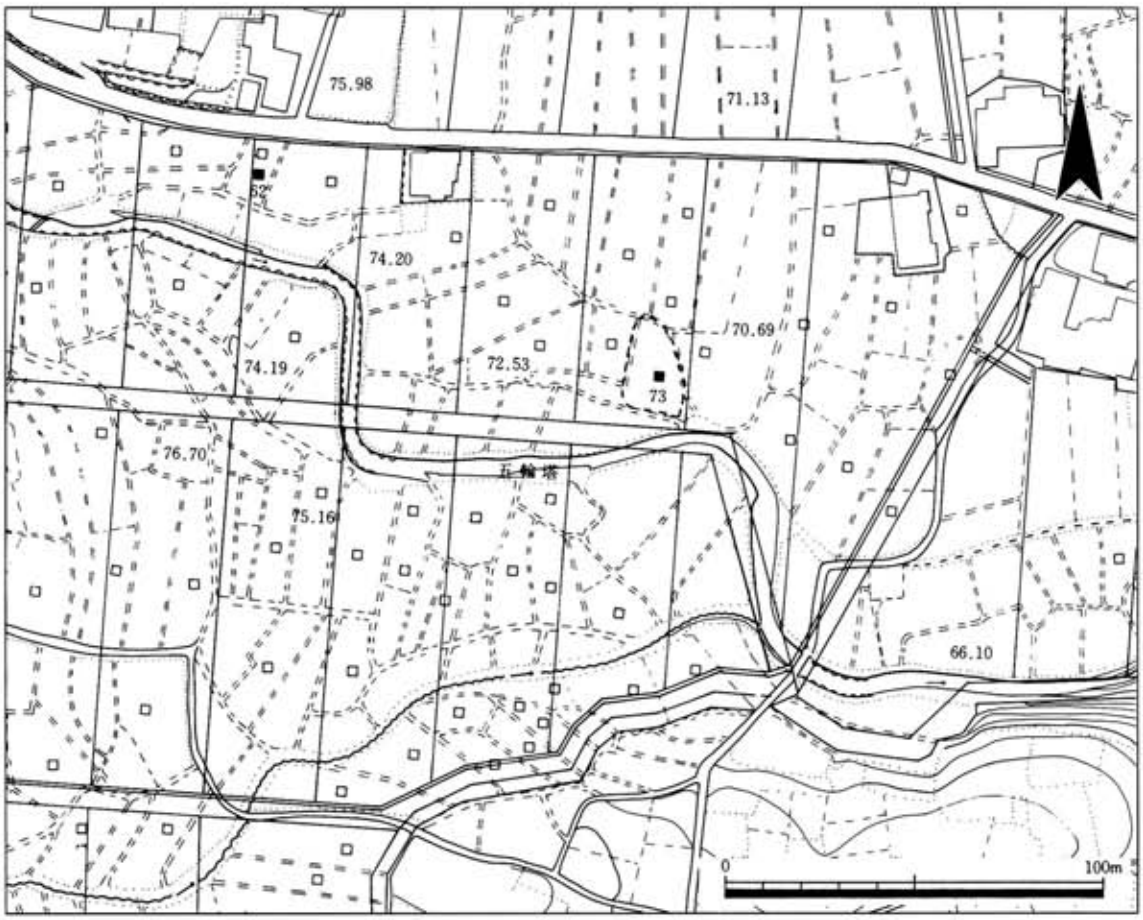
第27図　西有田町大山地区試掘溝配置図

を確認するため詳細に調査を行った。その結果、史跡指定地区の北と東側に設けた４つの試掘溝（第91・94・95・99試掘溝）より小穴・遺物包含層が検出され、阿高系の土器、石鏃、黒曜石片が出土した。なお第91試掘溝で検出された遺物包含層に含まれる遺物は細片が多く又磨滅しており２次堆積の可能性がある。その他地区東側には石塔２基が残っているが、工事前に移設し下部を調査する必要があろう。

曲川地区は西有田町大字曲川に所在する。国見山系東麓を刻む有田川の支流が作る谷水田部に立地する。曲川地区は南北２つの地区に分けられる。

北の上内野地区は蔵宿川によって作られた標高110～150m の谷水田に立地する。南のゆるやかな丘陵上には縄文時代の遺物散布地である神ノ前遺跡・中通遺跡が知られていた。

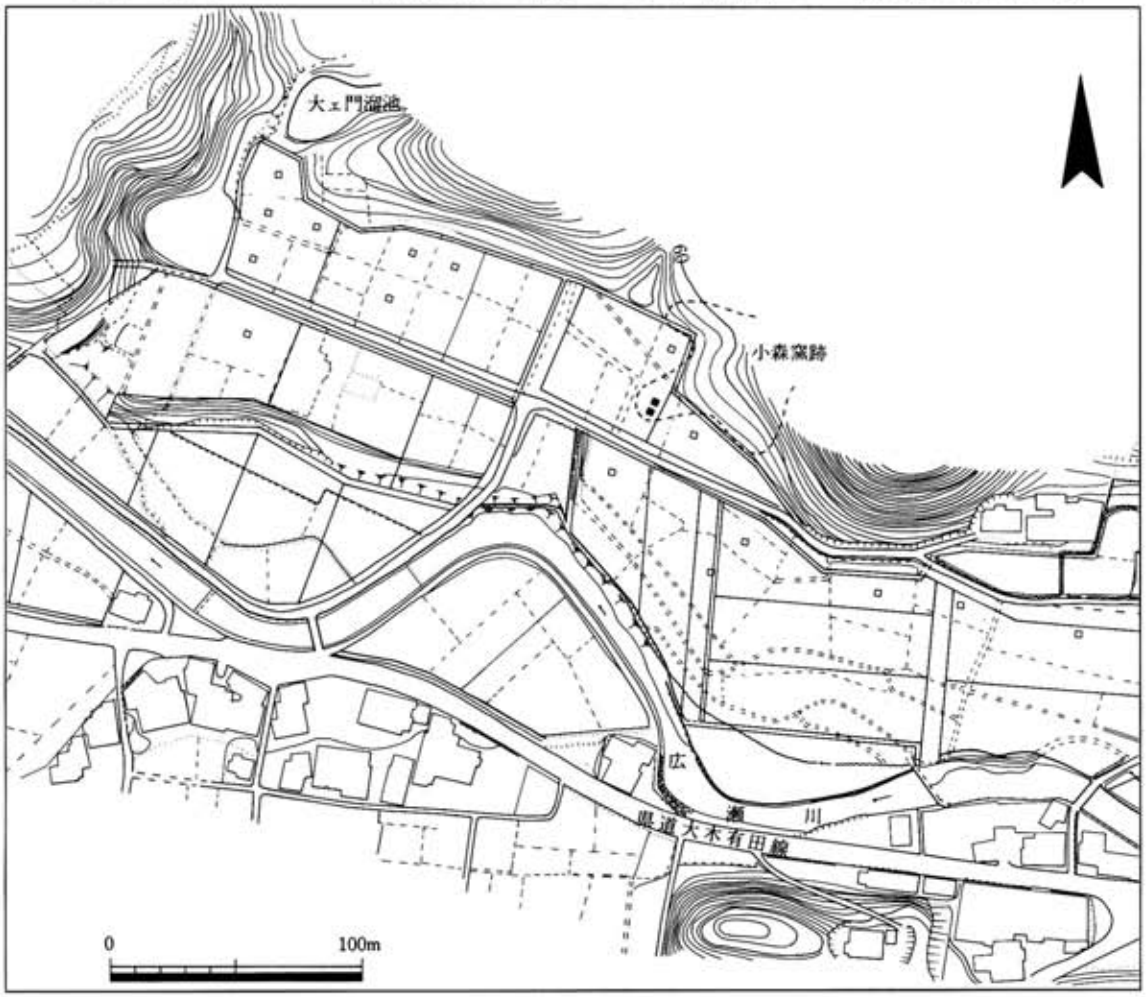
調査は対象地10haに57の試掘溝を設けて行なった。その結果黒曜石片数点が出土したが、遺構は検出されなかった。



第28図　西有田町曲川地区試掘溝配置図

南の北ノ川内地区（第28図）は北川内川によって作られた標高65～80mの水田部に立地する。地区の南側に接する丘陵上に縄文時代の遺物散布地である前原遺跡が存在するのを始め、付近にはいくつかの遺跡が知られている。

調査は対象地11haに111の試掘溝を設けて行なった。その結果第62・73試掘溝で不定形の落



第29図　西有田町黒岩地区試掘溝配置図

第30図　黒岩地区小森窯跡表採陶器実測図

ち込み、小穴が検出され、その上面に縄文土器を含む遺物包含層が検出された。その他第55試掘溝西側の畔に五輪塔５基が立っており、工事着手前に移転する必要がある。

黒岩地区（第29図）は西有田町大字大木に所在する。有田川に東から流れ込む広瀬川によって開削された河岸段丘上に立地する。この広瀬川を上流へ１km程上ると、風光明媚な竜門峡がある。竜門ダム北西部には陶石を採掘した跡があり、谷のそちこちに窯跡が残っている。今回調査対象となった地区の北側丘陵斜面には小森窯跡が存在した。小森窯跡は唐津焼窯で初期の段階で廃絶したものと思われ、型式・器種等を調べる上で重要な窯跡である。踏査の結果も多くの陶片（第30図）、窯道具の散布が見られた。

調査は対象地6.4haに22の試掘溝を設けて行なった。その結果小森窯跡南側の水田部に設けた試掘溝より浅い皿状の落ち込みが検出された。埋土は炭混じりの黒色土で、中から遺物は検出されなかった。周辺に設けた試掘溝からは遺構は検出されなかったが、唐津焼陶片が出土している。この遺構の性格は不明であるが、窯跡との関連も考えられる。

（この項については九州陶磁文化館大橋氏に負う所が大きい。記して御礼申し上げます。）

切楠農道は西有田町大字曲川・大木に所在する。国見山系西麓に南北に計画された農道である。国見山系西麓は有田川の支流によって作られた多くの谷が貫入し、それぞれ水田が営まれている。それらの相互の往来の便のためこの農道は計画されたため、当然いくつかの丘陵を横切ることになり、これらの丘陵上に立地する遺跡の有無を確かめるため調査を行なった。

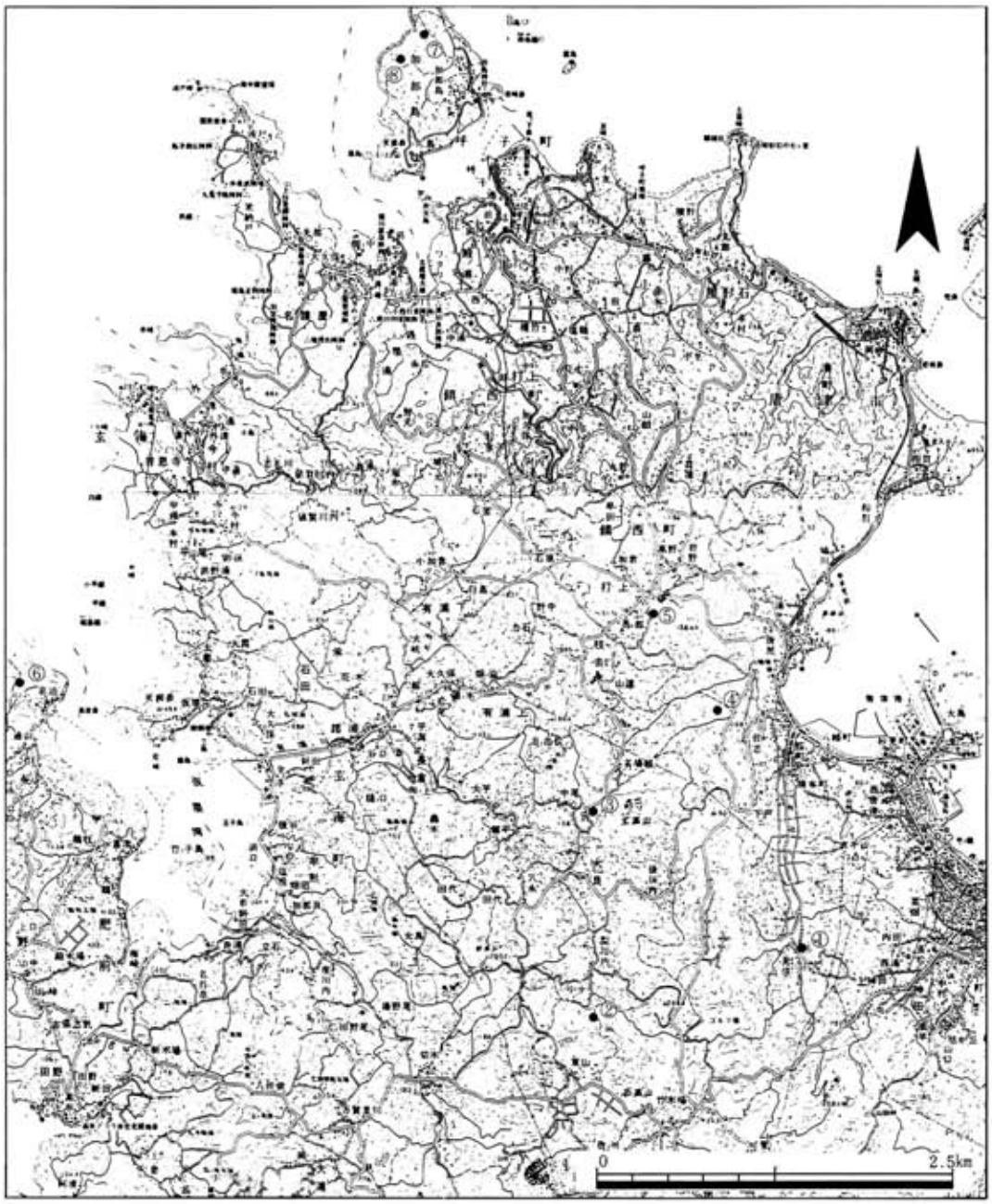
調査は昭和60年度工事予定地区の切楠地区705m、切楠２期地区910mについて遺跡の立地が考えられる丘陵尾根地等について行なった。その結果、各々の地区で少量の黒曜石片の散布が見られたが、遺構は検出されなかった。

(3) 相知町（伊岐佐地区）

伊岐佐地区は相知町大字伊岐佐に所在する。伊岐佐川によって作られた谷平野の谷頭扇状地と、上・中低位河岸段丘上の標高11～39mの水田部に立地する。数年前まではこの平野付近では北部の丘陵斜面に存在するいくつかの遺跡以外は知られていなかったが、昭和58年度の伊岐佐中原遺跡（縄文～弥生時代・中世の墳墓・集落跡）、昭和59年度の伊岐佐伊良尾遺跡（奈良～鎌倉時代集落跡・小鍛冶遺構　本書81頁）の調査を経て、当地区周辺にも縄文時代以来人々の生活が営まれていたことが明らかになりつつある。

調査は対象地14.3haに136の試掘溝を設けて行なった。その結果、小数の小穴が検出され縄文晩期土器・弥生中期土器・土師器・黒曜石等が出土したが、遺跡としての密度と広がりは認められなかった。

5．佐賀上場地区の調査



1．唐津市・肥前町（赤坂ダム）
2．鎮西町（打上地区）
① 見借遺跡
② 小十遺跡
③ 大良中尾遺跡
④ 笹ノ尾遺跡
⑤ 馬部遺跡
⑥ 池ノ田Ⅰ遺跡
⑦ 御手洗古墳
⑧ 鬼ノ口古墳

第31図　佐賀上場地区周辺地形図

(1) 唐津市・肥前町（赤坂ダム）

赤坂ダムは、唐津市竹木場、肥前町大字赤坂に股がるダム建設工事に伴い確認調査を実施した。調査対象地は上場台地南部赤坂と唐ノ川西集落の中間地点の小盆状の谷部に立地する。地区北方や東側の丘陵上にはいくつかの旧石器～縄文時代の遺物散布地（唐ノ川一ノ板遺跡・先部遺跡群等）が知られていた。

調査は工事予定地35haのうち遺跡の立地が考えられる15haの部分について、3×3mの試掘溝を20～30m間隔に設けて行なった。その結果2ケ所の試掘溝で少量の黒曜石が出土したが、遺跡としての広がりは認められず、遺構も検出されなかった。

(2) 鎮西町（馬部地区）

馬部地区は、唐津市枝去木の馬部と鎮西町加倉に股がる農道工事に伴い、遺跡の存在が考えられる200mの部分について調査を行なった。当地区は加倉集落東部の上場広域農道に面した地区で、標高約130mの水田部に立地する。周辺には旧石器～縄文時代の遺物散布地が密集している。地区北部の丘陵上には古川遺跡・轡原遺跡・高野遺跡群等が立地しており、地区内にも旧石器時代の遺物が散布する原遺跡として周知されている地点が含まれている。

調査は対象地に20m間隔で試掘溝を設けて行った。その結果、1ヶ所小さな遺物の集中部分があった。出土した遺物は旧石器時代のナイフ型石器、細石刃等の石器、縄文時代前期土器・石鏃等である。この遺物集中は確認調査の試掘溝の範囲より広がるものではなかったため、その時点で記録したので、本調査の必要はない。

6．筑後川下流用水事業に係る調査

筑後川下流用水事業に伴う埋蔵文化財確認調査は、佐賀東部導水路の神埼町馬郡地区、大詫間幹線水路の神埼町本告牟田地区・千代田町大石地区・諸富町大堂地区について実施した。

(1) 佐賀東部導水路

馬郡地区（第33図）は神埼町大字鶴に所在する。吉野ヶ里丘陵の西部、馬郡集落の南の標高約7.5mの水田部に立地する。調査対象地は、弥生時代～中世の遺物散布地である枝町遺跡として知られていた。昭和55年に神埼町教委により地区東側の調査が行われ弥生時代～中世の集落跡・墳墓が検出されており、本地区でも遺跡の存在が考えられた。

調査の結果、弥生時代～中世の遺物包含層・土壙・小穴等が検出され、弥生土器・土師器等の遺物が出土した。この地区にも集落跡が広がっているものと思われる。

右　第32図　筑後川下流用水事業に係る文化財確認調査地区位置図

(2) 大詫間幹線水路

本告牟田地区は神埼町大字本告牟田に所在する。水路は野田集落の東に接する地区に南北に計画された。野田集落は文献史料にこそ乏しいが、中世に遡る可能性を十分に持つ環濠集落で、地元の人の話によると、島状地開墾の際多くの土師器片が出土したという。中世集落跡・城館跡の存在が予想された。

調査は、対象地に17の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

大石地区は、千代田町大字黒井に所在する。上黒井集落の西に南北に計画された水路である。上黒井集落も野田集落と同じく、中世に遡ると考えられる環濠集落である。

調査は、対象地に13の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

大堂地区は、諸富町大字大堂に所在する。北の佐賀江川を渡り、県道神埼・諸富線の西に並行して南下する水路である。対象地区中央西側の陣ノ内集落付近は、中世館跡として知られていた。

調査は、対象地に約20の試掘溝を設けて行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

第33図　神埼町馬郡地区試掘溝配置図

Ⅳ．埋没条里確認調査

1．はじめに

昭和58年度に引き続き埋没条里の確認調査を実施した。調査に至る経過及び各平野部の地理的歴史的環境については前編[注1]で概要を述べており、又詳細については別稿を考えているので、ここでは各地区関連の環境を概観し、次いで調査結果を述べる。

調査対象地は前回に引き続き佐賀平野のうち比較的良好な状態で条里地割の遺存している神埼郡神埼町・三田川町、杵島郡白石町・有明町の当該年度工事地区について実施した。計画立案、調査及び結果の報告については佐賀大学教育学部日野尚志先生に必要な助言等をいただいた。ここに厚く御礼申し上げます。

2．調査の内容

(1) 神埼町（第35図）

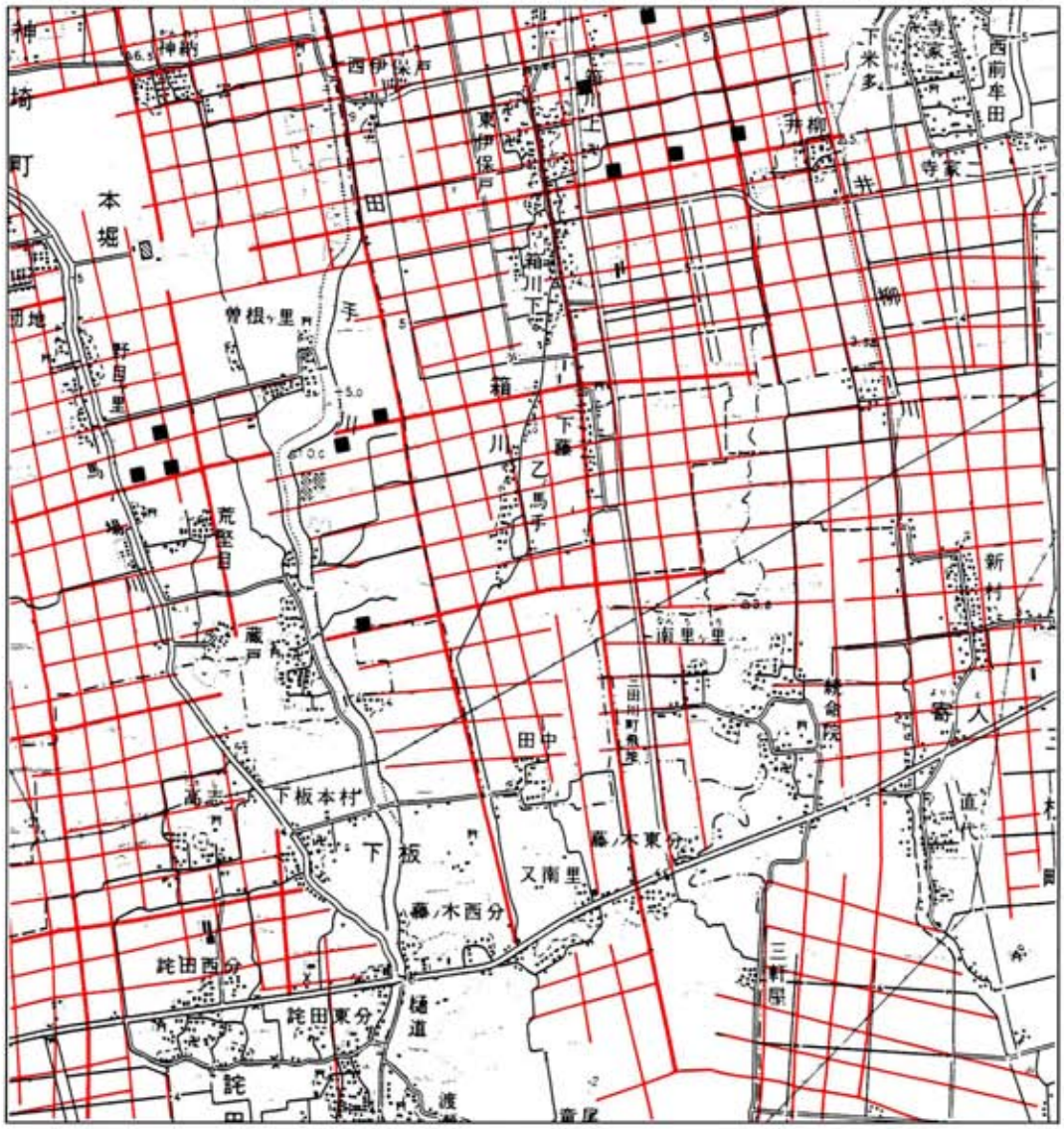
調査対象地は神埼町大字本堀に所在する。神埼町の南東部、千代田町・三田川町と接する一帯の120haが圃場整備事業の対象となったため、調査を実施した。調査は田手川右岸に第1～3試掘溝、左岸に第4～6試掘溝を設定して行った。第1～3試掘溝は、田手川と馬場川に挟まれた標高3.2m[注2]の水田部に立地する。田手川によって形成された自然提防上にあたる。

調査地点の東には曽根ヶ里、西に野目ヶ里という佐賀平野の条里に特有な固有里名を持つ集落が存在する。曽根ヶ里については、『北肥戦史巻18』に龍造寺隆信が犬塚長門守鎮直の一子百十丸に知行地を宛行った書状が転記されているがその中に「倉戸郷の内」として「曽我部ヶ里」という地名が記されている。この曽我部ヶ里が現在の曽根ヶ里へ変化したものと思われる。すでに『宝暦(1751～64)郷村帳』等には曽根ヶ里と見える。野目ヶ里は正保4(1647)年の絵図に初見する地名である。曽根ヶ里から一つとんで南には下板本村集落が所在する里があるが、ここは古文書に見える下板春里に比定されている[注3]。下板春里は建武2(1335)年6月付東妙・妙法両寺寺領坪付注文写（東妙寺文書）の中に倉戸郷として見える。その西の里は乙板春里に比定されている。この里の23坪、26坪[注4]に相当する部分に高志神社が所在する。高志神社は旧郷社で、又「当御庄鎮守高志、櫛田両社」といわれるように櫛田宮と並ぶ神埼荘の鎮守であった。寛元2(1244)年3月26日の遠真施行状に本堀執行氏を高志櫛田両宮の大宮司職に任ずる旨の記録がある。このように倉戸郷は馬場川と田手川に挟まれた地区を中心に付近一帯を指すと思われる。他に倉戸郷として見える里として「戊草津里」がある（建武2年6月付東妙・妙法両寺寺領坪付注文写)。港に関連のある里名だとすると田手川沿いに比定されるであろう。曽根ヶ里・下板春里・(戊草津里）は6条、野目ヶ里・乙板春里は7条にあたる。

以上のように調査地点付近には「倉戸・蔵戸」＝「蔵部」、「下板春里・乙板春里」＝「春米部」、「曽根ヶ里」＝「曽我氏」等の氏族、部民集団の居住を考えさせる地名が残っており、

又高志神社や津の存在等神埼庄域における位置付けを考える上で興味ある地域である。

当調査と前後して神埼町教育委員会により荒堅目遺跡の調査が行われた。(注5) 農業基盤整備事業に伴い、6条と7条を画する里界復原線上に幹線排水路が計画され、そのうち荒堅目集落に東接する部分で遺構、遺物が検出されたため調査を実施したものである。その結果、弥生時代～鎌倉時代の集落（？）跡が検出された（本書63頁参照)。そのうち南北、東西方向の溝跡がいくつか検出されている。県内初の木簡の出土で注目された南北の溝跡は調査区内で約20数m のものであるが、この溝跡に並行して柵列と思われる遺構が12列検出されている。平安時代初頭に比定される。この遺跡では緑釉陶器や木簡、銅銙帯、人面形石製品等の注目される遺物が出土



第34図　神埼町三田川町試掘溝位置図（1：25,000）

しており、倉戸郷の性格等を考え合わせた上で、検討していく必要があろう。

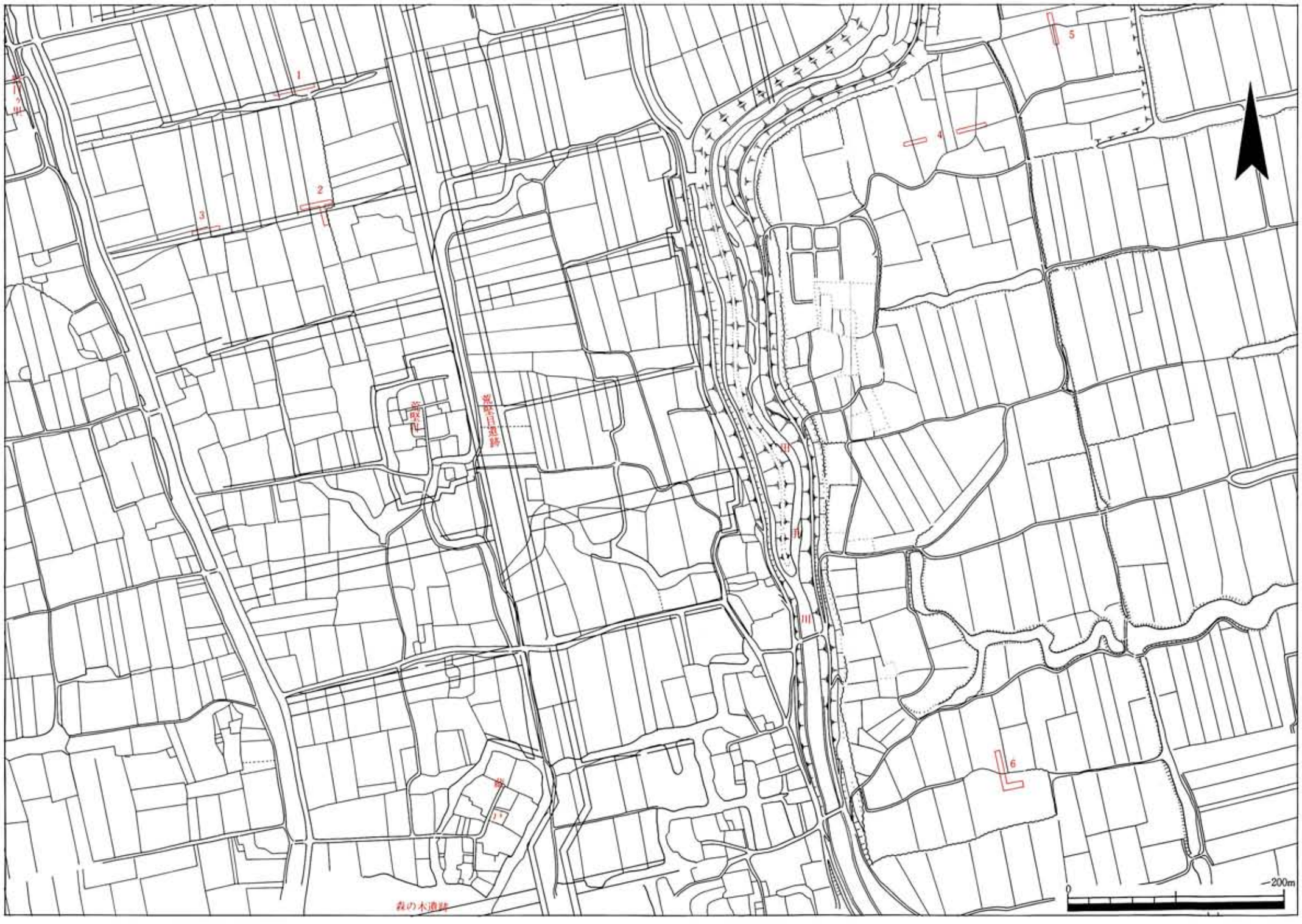
荒堅目遺跡の南西では同年度の終わり頃に神埼・千代田両教育委員会によって森の木遺跡の調査が行われた（本書65頁）。本調査区は野目ヶ里と乙板春里の間に存在する里の26坪と35坪境と推定される部分に東西に設けられたものである。調査の結果、弥生時代～中世の遺構が検出されたが、そのうち調査区西側には生活遺構はほとんど検出されず、東西、南北の方向性を持つもの、南北より東へ傾くもの等計5条の溝跡が検出されている。現在整理中で明確な時期は不明だが、中世～近世期のものであるとのことである。これらの溝跡は碁盤目状に直交するものではなく、鍵状に屈折したり、並行方向に数m ずれた状態で検出されている。いずれも幅40～100cm、深さ10～50cm程度のものである。

今回調査対象となった馬場川と田手川に挟まれた地区では、現在の地割をもとに里坪界線を復原しようとする場合、明確に地図上に線引できない地区が多く分布している。そのことを考慮した上で、荒堅目集落の北方、野目ヶ里・曽根ヶ里両集落の中間付近に試掘溝を設定して行った。その結果明確な遺構は検出されなかった。土層よりこの地点が沼状地（後背湿地）ないし河川による氾濫を受けたことが考えられる。荒堅目遺跡の調査によると、遺構の所在する部分はやや微高地になっており、遺跡の北側は低くなっている。その低地部分は当試掘溝部分まで続いているものと思われる。この低地部分は荒堅目遺跡の調査結果等から中世期頃までのものと思われる。

第4～6試掘溝は田手川東岸の標高約3.5m の水田部に立地する。地区東側を三田川町との町境が南北に走るが、この線は復原里界線の5条と6条の境となり、又倉戸郷と中郷の境に比定される。田手川は曽根ヶ里集落北東付近まで、この復原里界線に沿って南下してくるが、そこからやや西へ流れが変わり、一度西へ大きく屈曲した後再び南下する。この川の流れにより、倉戸郷の6条にあたる里は東西に2分される形となる。この川に沿った東岸部分でやや条里地割の不明瞭な部分がある。これらのことから、田手川のこの付近の流れが条里施行時期のものであるかどうか調べる必要があると思われた。

調査の結果、第4試掘溝で粘質土と砂質土が混じった層、第5試掘溝で砂層が10～20cmの厚さで堆積していた。これは田手川の氾濫によるものと思われるが、その直下から砂質土をほとんど含まず、よくしまった強粘質の層が出てくる。いずれも遺物が出土しなかったため時期については不明である。第6試掘溝ではⅢ層の灰黒色粘質土から土師器甕・椀・内面黒色の椀、須恵器甕等の破片が出土した。この層は試掘溝全体に広がる。平安時代より後には下らない時期の遺物包含層であろう。Ⅱ層からは染付磁器等が出土しており、近世期の堆積であろうと思われる。

以上のことから、平安時代以降田手川の流路は当地区付近では大きくは変化していないという仮説が立てられ、今後の調査の目安としたい。



第35図　埋没条里確認調査 神埼地区試掘溝配置図

第36図　埋没条里確認調査 三田川地区試掘溝配置図

(2) 三田川町（第36図）

調査対象地は三田川町大字箱川に所在する。田手川と井柳川に挟まれた標高約4mの水田部に立地する。箱川上集落の東の地区約20haが圃場整備対象地区となったため調査を行った。

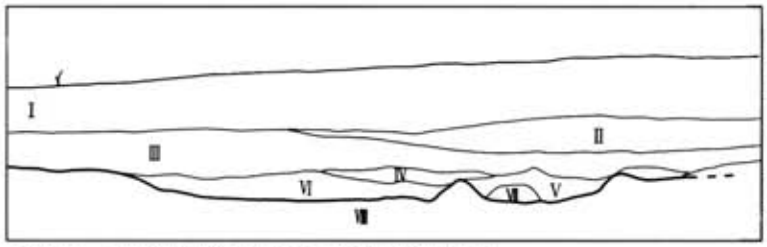
当地区は条里復原図上の橋爪ヶ里に比定されている。これは江戸後期に作られたと思われる『神埼郡中郷橋爪ヶ里図』に1～36の坪名を付した当地区の絵図が残っていることによる。当地区周辺には同じく江戸後期の『神埼郡東郷図』によって、整然とした坪割が行われていたことがわかる。地区の南側の里は『正保四年肥前一国絵図』や『天保郷帳』等に見える上藤ヶ里に推定されている。東側は東半分が欠けた里を隔てて三根郡と接するものと思われる。

調査は対象地のうち坪界復原線上に10ヶ所の試掘溝を設けて行った。里界線についてはその部分が溝渠や、工事対象地外にかかったため1ヶ所しか調査できなかった。調査の結果、4条の溝跡及び畦が検出された。

1号溝跡は第1試掘溝より検出された。第1試掘溝は17～20坪界上に南北に設けた試掘溝で、1号溝跡は現在の畦畔の南約4m付近を東西に走っている。幅2.5mの部分に少なくとも2次溝跡として使用されたと思われ、中央及び北側に畦畔が見られる（第37図）。深さ10cm程度で浅い。遺物は検出されず時期は不明である。

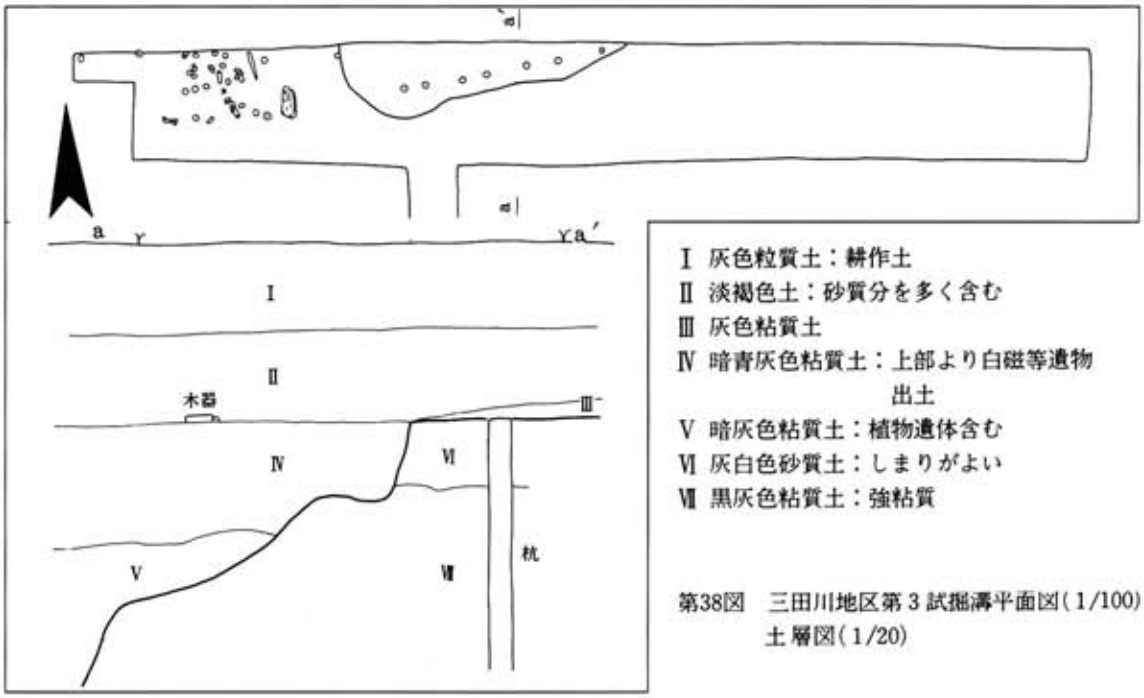
2号溝跡は第3試掘溝で検出された（第38図）。第3試掘溝は1－2坪境に東西に設定したものである。地山は調査区内でわずかに検出されたのみで、落ち込みは東西から南へ大きく蛇行している。落ち込み部に沿った地山部に径約10cmの杭列が見られた。又調査区西側には乱立した杭群が検出された。これらは落ち込み部がある程度埋没した時期のものであろう。遺物は落ち込み部の上部付近で近世陶器、中位付近で中世白磁片が出土したがいずれも破片で時期は決し難い。落ち込み部上面で、径5cm、長さ28cm程の片方に節を残した竹筒に先端を尖らせた木棒を差し込んだ用途不明の木器2点が出土した。地山部に打ち込んだ木杭のうち1点を資料として取り上げたが、地中部1m強のものである。調査区西側に乱立する杭は長さ20～40cmのものであった。溝跡として報告したが、沼状地への落ち込み、あるいはいわゆる廃絶されたクリークの可能性が考えられる。

3号溝跡（第39図）は第4試掘溝から検出された。第4試掘溝は、1・2－11・12坪界線上及び現況畦畔に沿って東西に設定した。3号溝跡は、現況畦畔に沿って検出された。幅1～1.5m、



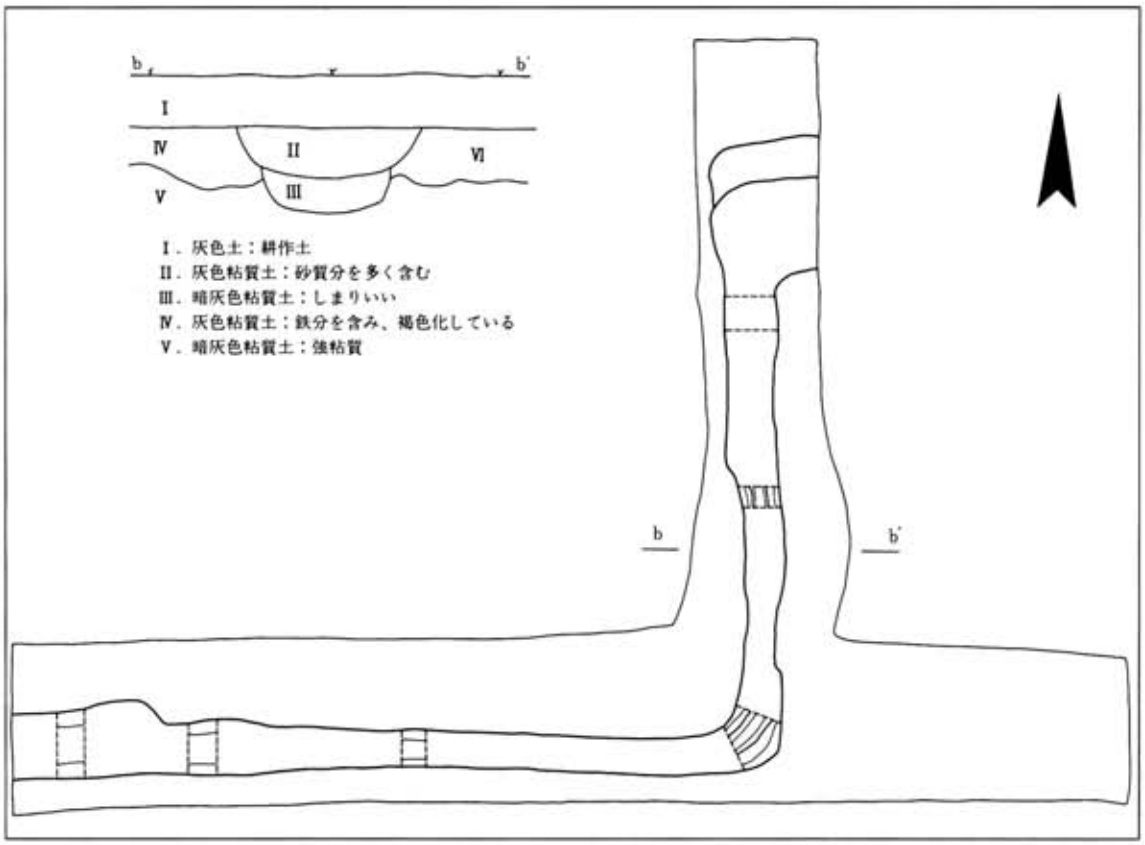
I 暗褐色土：耕作土
II 灰褐色土：砂を多く含む粘質土
III 灰褐色土：砂粒少い、粘質土
IV 灰白色砂質土：鉄分を含み、やや褐色
V 灰褐色土：砂粒をやや含む粘質土
VI 灰白色砂質土：IVより鉄分少い
VII 灰白色砂質土：IVとほぼ同じ
VIII 灰色粘質土：強い粘性を持つ

第37図　三田川地区第1試掘溝検出溝跡土層図



I 灰色粒質土：耕作土
II 淡褐色土：砂質分を多く含む
III 灰色粘質土
IV 暗青灰色粘質土：上部より白磁等遺物出土
V 暗灰色粘質土：植物遺体含む
VI 灰白色砂質土：しまりがよい
VII 黒灰色粘質土：強粘質

第38図　三田川地区第３試掘溝平面図（1/100）
土層図（1/20）



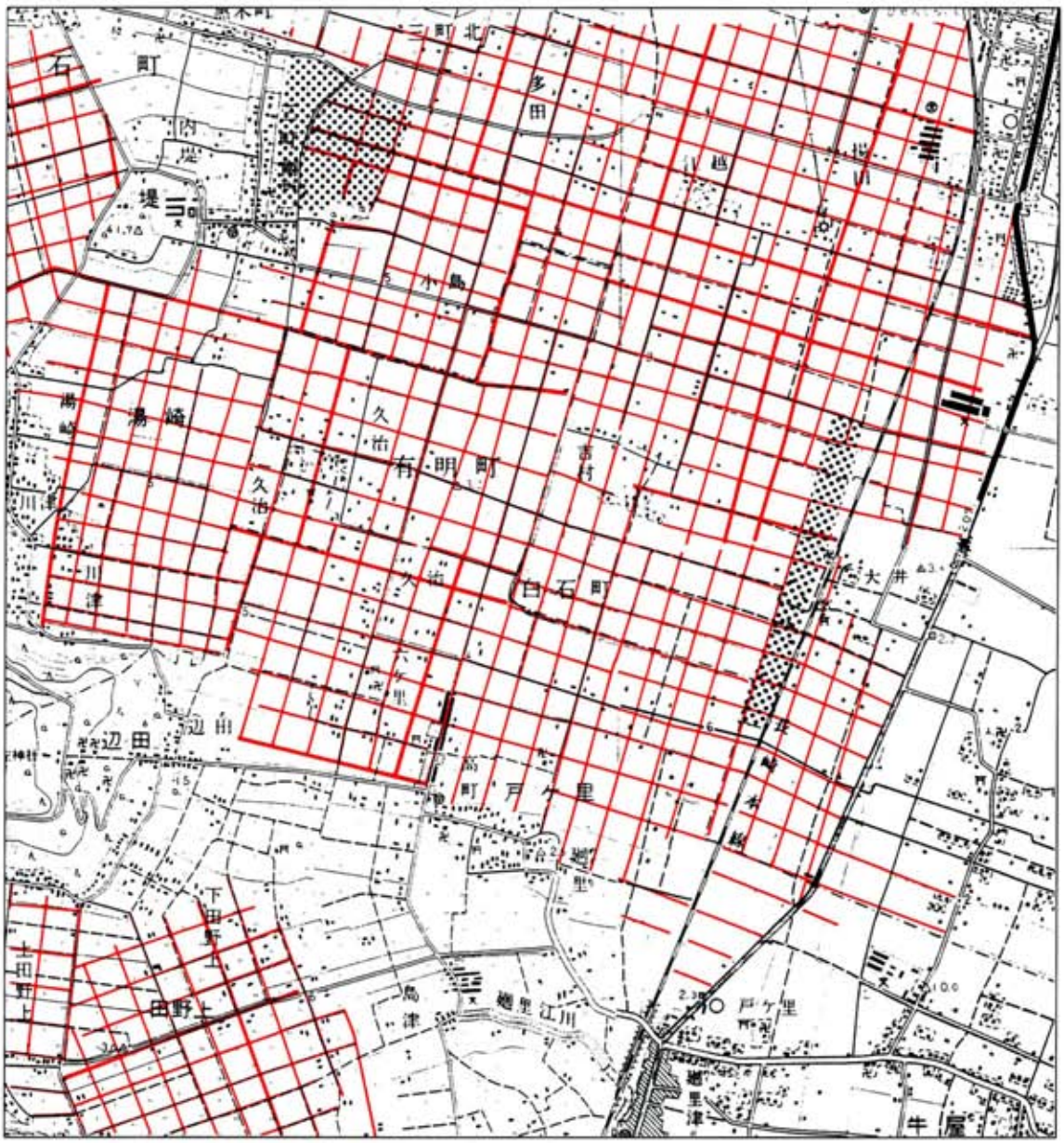
第39図　三田川地区第４試掘溝平面図（1 / 100）土層図（1 /20）

深さ0.2～0.3mで、2次にわたって使用されたものと思われる。遺物は土師器、陶磁器が出土したが、近世期より遡るものではない。

その他第9試掘溝で里界線に沿って溝跡が検出されたが、最近のものであろう。

(3) 白石町（第40・第41図）

白石町については東と西の地区、それぞれ白石西第3地区、白石西第4地区について調査を行った。



第40図　白石町有明町調査対象地区位置図（1/25,000）

第41図　埋没条里確認調査白石西第３地区
試掘溝配置図

白石西第３地区は白石町大字廿治（はたち）に所在する。国鉄長崎本線の西に接する標高約1.5ｍの水田部に立地する。幅１町、長さ９町の南北に長い地区が圃場整備の対象となったため主に東西の坪界線について調査した。その結果３条の溝跡及び土壙１基等が検出された。基本層位は表土下約15～20cmで潟土状の灰色粘質土という土層で一定している。

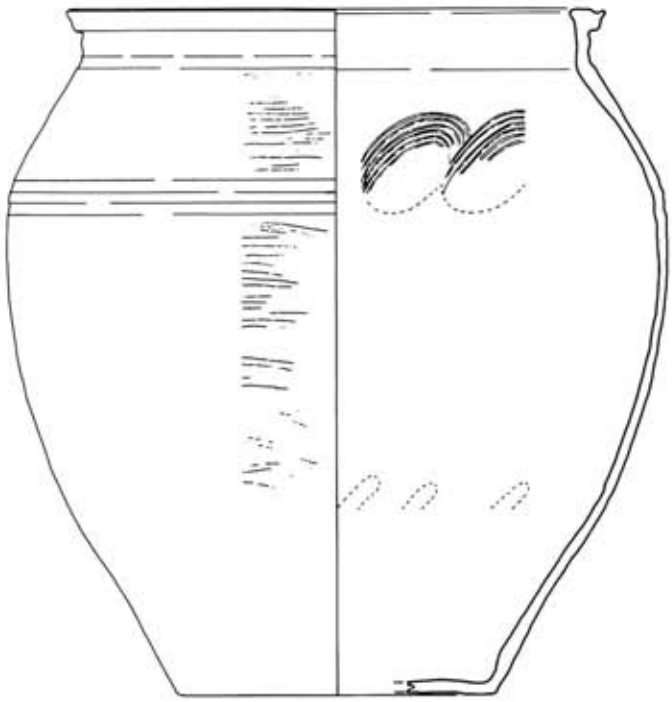
第３試掘溝（第43図）ではＡ・Ｂ２つの溝跡及び小穴１が検出された。Ａ溝は調査区北端にかかるため規模は不明であるが、少なくとも幅４ｍを有する。Ｂ溝は調査区内でＡ溝東端からやや西へ傾きながら南下し、すぐに西へ屈曲するものと思われる。両岸が検出された地点での規模は幅1.2m、深さは地山より0.8mである。Ａ溝からは瓦器椀・中国青磁碗・古唐津碗等、Ｂ溝からは羽釜・古唐津甕・唐津焼片口・摺鉢等が出土した。Ｂ溝は最下部より出土した遺物より中世末～近世初頭を中心に使用された溝で、その後徐々に埋没したものと考えられ、Ａ溝もほぼ同時期に位置付けられる。第42図はＢ溝下部で出土した初期の古唐津甕である。体部上～中部と下部は実際には接合せず、図上で復原した。口径28.5cm、推定器高37cm。体部上位に高麗の影響を受けた退化した突帯状の横線を有する。外面は並行タタキ、内面は同心円文タタキ後スリケシ。底部付近と口縁部上面を除いて灰緑色の薄い釉がかかる。表面に胎土の鉄分が点々と吹き出し、暗赤色に発色している。口縁部上面に釉がかかっていないことから倒立位で焼成したものであろう。底部外面には自然釉が疎らにかかり、貝高台の痕が見られる。

第５試掘溝では、溝跡１・土壙１が検出された。溝跡は試掘溝内を東西に走るもので幅1.8ｍ、深さ0.3m。埋土より多数の土師器片、陶器片が出土

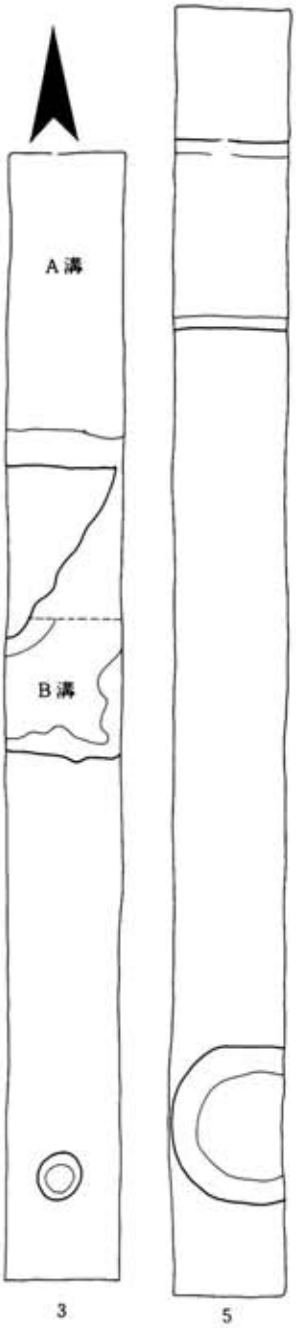
した。陶器のうち1点は東播系の粉鉢と思われる。時期の比定は困難であるが、遺物より鎌倉～南北朝の時期を与えておこう。土壙は径1.8m、深さ0.4m。埋土より磨耗した土師器片が出土したが、時期は不明である。

当地区は1町幅の南北に細長い地区であるが、当地区の西までの地割と比較してみると、道路や畦畔がややずれている。今回の調査では、当地区まで延長した里界復原線上に2ヶ所の溝跡が検出された。地元の人達によると白石平野では水稲に必要な水を自由に引くために、他の水田より地盤を掘り下げて低くしていったという。このため比較的浅い遺構は削られてしまった可能性がある。前回と今回の調査結果から、この地区では遅くとも鎌倉時代前期には人々の生活が始まり、その中で条里的地割が行われるようになったのではないか。そして今回の調査地区に限っていえば、中世末～近世前期を経て、現在の地割へと変化していったことが窺える。

白石西第4地区は白石町大字堤に所在する。杵島山系東麓に



第42図　第3試掘溝B溝跡出土陶器（1/4）



第43図　第3・第5試掘溝
遺構配置図（1/80）

第44図　埋没条里確認調査白石西第４地区試掘溝配置図

広がる水田部に立地する。三町南集落の東、小島城跡の北の25　が工事対象地区となり、計19の試掘溝を設けて実施した。

小島城の北には1町弱幅の東西に長い余剰帯的な地割があるが、このうち小島城北部分を北里、北西部分は西里と呼ばれている。これより西の一帯は明確な条里的地割が遺存していない。

調査の結果、基本土層は第3地区と同じく耕作土下で灰白色粘質土となるが、一部地区でこの2つの層の間に暗灰色粘質土が堆積しているのがみられた。

当初、現在の畦畔をもとに復原した里坪界線上に第1～8の試掘溝を設定した。その結果、第1及び第5試掘溝で一連のものと思われる溝跡が検出された。幅は第1試掘溝で4m、第5試掘溝で2m、深さはいずれも0.4mである。埋土は暗灰色粘質土で遺物は検出されなかった。

以上の結果から次の問題点が出された。

○　現在の地割から復原した当地区の条里的地割は南北の線の傾きが15～18°であるのに対し、第1・第5試掘溝より検出された溝跡に直交する線は計算上座標北より西へ16°程度傾いた線が推定される。

○　現在の地割上で復原した線上に設けた他の試掘溝からは埋没した溝跡・畦畔等が検出されない。

○　地区南西部の船野・法蔵寺集落一帯には、今回検出された溝跡と同程度の傾きを有する条里的地割が存在した。(注6)

以上のことから当地区付近では現在の地割が行われる以前に、西へ傾いた地割が存在していたのではないかという仮説が立てられた。そこで作物による制約があったが、検出された溝跡を中心にして、その延長上及び1町前後並行移動させた位置に9～20の試掘溝を設定した。

その結果、第1・第5試掘溝で検出された溝跡の線上に設けた第13・14・15試掘溝より一連の溝跡が検出されたが、東部の第17・18試掘溝からは検出されなかった。又この線を北へ1町前後並行移動させた仮定線上に設けた第16試掘溝より幅2.7mの溝跡(埋土は同じく暗灰色粘質土）が検出されたが、第19試掘溝では検出されなかった。南へ1町並行移動させた仮定線上には第9・10・11・12試掘溝を設けた。第9試掘溝では、多くの遺構が切り合って検出され、当調査と関連のある溝跡を同定することはできなかった。集落跡の存在が予想される。第11・12試掘溝で検出された溝跡はほぼ座標北を指しており、遺物は検出されなかったが砂質の埋土に混じる植物遺体より比較的最近の暗渠排水路に類するものであろう。第10試掘溝では遺構は検出されなかった。更に南の仮定線上に設けた第20試掘溝の地点は、その東と南に流れる溝渠を掘り下げた土で溝渠の一部を埋めたものと思われ、暗青灰色の泥土が検出された。

以上の結果からこの地区に現況地割が行われる以前に西に傾いた条里的地割が行われていたと判断するのは聊か早計ではあるが、問題提起にはなり得たと思う。今後の調査の積み重ねの中で、実態を明らかにしていきたい。

(4) 有明町（第40図・第45図）

調査対象地は、有明町大字田野上・辺田に所在する。白石平野南部、杵島山系南西部に広がる標高2.5m前後の低平な水田部に立地する。調査対象地の西部に突出する稲佐山丘陵付近には弥生時代～中世にかけての遺跡が密集している。地区の北方には、正応5(1292)年河上宮造営用途支配惣田数注文に公田分として見える「六箇里保二十丁」に関係が深いと考えられる六ヶ里という集落が存在する。今回調査対象となった地区は、地区以北の東へ傾いた条里と地区以南の西へ傾いた条里の中間地点にあって、条里的地割が不分明な地区である。調査は対象地区を、地割の傾きで大きく3つの地区に分け、その接点を試掘するという方法で行った。基本土層は白石町と同じく、耕作土下10～15cmで灰白色粘質土である。

調査は第1～9の試掘溝を設けて行ったが、明確な溝跡が検出されたのは第2試掘溝のみであった。この溝跡は幅2.3m、地山からの深さ0.3mのもので、現在の畦畔より6～7m北の地点を東西方向に走っていた。埋土から土師器小片2点が出土しただけで時期は不明である。

注1　『農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書3』佐賀県教育委員会　1985

注2　圃場整備事業に先立ち農林部で測量した1/1,000地図による。以下同じ。
国土地理院発行の地図は長期的にみて標高の変化が少ないと思われる道路・橋梁等田面よりやや高い部分を測点としているため、農林部で田面を基準にして測量したものより標高をやや高く表示する傾向がある。例えば同地点は国土地理院発行の1/25,000地図によると標高5m強を示し、農林部のものと2m程度の差が生じることになる。我々の行う調査ではむしろ田面の標高が重要になるため、後者を利用することにした。これに従えば過去の条里に関する記述の中でその施行範囲を標高をもって示すものがいくつか見られるが、その数字は読みかえられる必要があろう。ただし、この方法を用いるには、現在までの標高の変化（人為的・地学的）を考慮しておく必要がある。

注3　本稿で使用する里名の比定については日野尚志「固有里名の現在地への比定について――肥前国神埼郡の場合――」（『地域――その文化と自然』1982）による所が大きい。

注4　乙板春里26坪は、南権平氏所蔵文書正応2(1333)年3月12日付蒙古合戦勲功賞配分状によると肥後大野田嶋十郎幸隆に配分された田地の中に「廿六坪一町三丈内八段西依」と見えることから、検討を要する。

注5　八尋実『荒堅目遺跡』神埼町教育委員会　1985

注6　ここで注意しておかなければならないのは『北肥戦史巻之21』に「（前略）平井が居城高岳（隆城）と申すは、……西は百町牟田とて、深泥限を知らず、」また「西の方の百町牟田を桶に乗りて打越え、」とあることから、かなり広い湿地帯が存在したことが考えられる。

第45図　埋没条里確認調査有明地区試掘溝配置図

Ⅴ．旧地籍図の管理保存状況調査

地理学・歴史学等の学問上における地籍図の有用性はいうまでもない。特に明治６年の地租改正以降全国的に作成された地籍図は、大正・昭和以後の開発が行われる前の古い地割・地目等が記載されているということで、その測量方法上の誤差の大きさを勘案してみても、取る所は非常に大きいものである。

佐賀県では明治20年代を前後して全市町村で地籍図が作成された。しかし現在、昭和26年の国土調査法に基き新しい地籍図が作成されつつある。新しい地籍図の完成によって旧地籍図は用をなさなくなると考える人々が依然多いことは悲しむべきことである。全国的にも廃棄処分に付された地籍図が多いことを聞くにつれその感を大きくする。

そこで、地籍図の有用性を周知させ、旧地籍図の保存・管理状況を把握するため調査を実施した。その結果は第３表の通りである。

佐賀県においては明治20年代を中心に地籍図が作成されている。地籍図を作成するための野取図（野取帳）が残存している市町村もある（本調査の対象外であったため備考欄に明記する以外にも保存してある市町村はあると思われる)。ほとんどが600分の１のものである。旧地籍図を全冊保存してある市町村は半分以上を占めるが、その半面全部ないし大部分を紛失した市町村が４市町ある。

現在ほとんどの市町村では使用中であるが、今後新地籍図の整備に伴って、破損・紛失するものの増加が予想される。それを防ぐためには、管理保存状態に不備のあるものについては適切な措置を講じ、将来的には文化財担当部局へ旧地籍図の移管を行って、保存していくようにしたい。本調査段階でも旧地籍図を「永久保存文書にしている」ないし「永久保存文書にしたい」とする市町村は多い。そうでない市町村についても保存のための指導を行いたい。

今回の調査が、旧地籍図の再認識への一石となればと考えている。

（なお調査にあたっては、桑原公徳著『地籍図』学生社　同氏「地籍図の保存問題」(『条里制の諸問題Ⅰ』所収）奈良国立文化財研究所　1982　等を参考にさせていただいた。ここに記して感謝申し上げます。）

注　今回の調査は市町村が管括するものについてのものである。その他に国・各県法務局（及びその支局）に備えつけてあり、また各市町村の大字毎等の公民館等に残っているところもある。

表3　旧地籍図管理・保存状況調査

昭和59年8月1日現在

市町村名	作成時期	縮尺	小字数(約)	地籍図数(約)	保管課名	紛失		保存状況			対処		取扱い	備考
						有無	程度	事項	原簿	理由	修理	管理		
佐賀市	イ	?	?	?	資産税課	有	ロ	イ	ロ	ホ	ニ	ハ	ヘ	
唐津市	?	?	1,085	?	税務課	有	ニ	ロ	ロ	イ	ハ	イ	ロ	
鳥栖市	ロ	1/600	532	500	税務課	有	ニ	イ	ロ	イ	イ、ロ	ロ	ホ	
多久市	ロ、ハ	1/600	768	555	税務課	無	—	イ	—	—	—	イ	イ	
伊万里市	ロ	1/600	2,100	2,100	税務課	無	—	イ	ロ	イ	ロ、ハ	イ	ロ	
武雄市	ロ	?	904	654	社会教育課	無	—	イ	イ	ホ	ニ	ロ	イ	
鹿島市	ロ	?	870	800	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	ロ	ロ	ホ	
諸富町	ロ	1/600	13	128	税務課	有	ニ	イ	イ、ロ	イ	ロ、ハ、ニ	ロ	ハ	
川副町	ロ	1/600	1,206	355	税務課	有	ニ	ロ	ハ	イ、ロ	ニ	ハ	イ	
東与賀町	ロ	1/600	144	144	建設課	無	—	イ	イ	—	—	—	ロ	
久保田町	ロ	?	113	69	土地改良課	有	ニ	イ	ロ	イ	ニ	—	イ	
大和町	ロ	1/600	156	127	税務課	有	ハ	イ	ロ	ホ	イ	イ	イ	川上地区のみ残存
富士町	イ	1/600	285	1,065	税務課	無	—	ロ	イ	イ	イ、ハ		ハ	S34複製、マイクロフィルム
神埼町	イ、ロ	1/600	305	240	税務課	無	—	イ	イ	—	—	—	ロ	
千代田町	ロ	1/600	220	220	税務課	無	—	イ	イ	—	—	—	イ	
三田川町	ロ	1/600	78	74	税務課	有	ニ	ロ	ロ	イ	イ	ロ	ハ	
東脊振村	イ	1/600	70	110	税務課	無	—	イ	ロ	イ	ロ	ロ	ロ	
脊振村	ロ	1/600	130	260	総務課	無	—	ロ	ロ	イ	ロ	イ	ホ	
三瀬村	ロ	1/600	87	63	総務課	無	—	ロ	ロ	イ	イ、ロ	—	ロ	
基山町	ロ	?	54	54	税務課	無	—	イ	イ	イ	イ	イ、ロ	ロ	
中原町	ロ	1/600	85	85	税務課	無	—	ロ	ハ	イ	ロ	ロ	ロ、ハ	
北茂安町	ロ	1/600	91	91	税務課	無	—	イ	イ	イ	ロ	ロ	ロ	
三根町	ロ	1/600	147	41	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	ロ	イ	ホ	
上峰村	イ	1/600	92	82	教育委員会	有	ニ	イ	ロ	イ	ニ	イ	イ	M20調整
小城町	ロ	?	376	180	税務課	有	ニ	ロ	ロ	イ	イ	イ	イ、ハ	
三日月町	ロ	1/600	1,037	87	農業委員会	無	—	ロ	ロ	イ	ニ	イ	ロ	
牛津町	ロ	1/600	21	39	企画鉱害課	有	ニ	イ	イ	—	イ	イ	ロ	
芦刈町	ロ	?	177	168	税務課	無	—	イ	ロ	イ	イ	ロ	イ	
浜玉町	ロ	1/600	376	376	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	ハ	イ	ロ	野取図有り
七山村	ロ	1/600	260	8	総務課	有	ニ	ロ	ハ	ニ、ホ	ニ	ロ	ロ	
厳木町	ロ	1/600	185	130	税務課	無	—	イ	イ	—	—	イ	ロ	
相知町	ロ	1/600	373	400	税務課	無	—	イ	イ	イ-ニ	イ、ロ	ロ	ハ	
北波多村	—	1/600	204	204		有	イ							S40焼失、S43複製
肥前町	ロ	1/600	487	487	税務課	無	—	イ	ロ	ロ、ニ、ホ	ニ	ハ	イ	
玄海町	イ、ロ	1/600	270	270	税務課	有	ニ	イ	イ	—	—	イ	ハ	紛失は1部
鎮西町	ロ	1/600	195	195	税務課	有	ニ	イ	ロ	イ	ロ	ロ	ロ	
呼子町	ロ	1/600	38	47	税務課	有	ニ	イ	ロ	ホ	ニ	ハ	ホ	
有田町	イ	?	115	123	税務課	無	—	イ	ロ	イ	イ、ロ	—	イ	
西有田町	ロ	?	197	210	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	ニ	ニ	ハ	
山内町	ロ	1/3,000	333	276	税務課	有	ニ	イ	イ	イ	ロ	ニ	ロ	
北方町	ロ	1/600	295	185	町民課	無	—	ロ	ロ	イ	ロ	ロ	ハ	
大町町	ロ	1/600	68	72	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	イ、ハ	イ	ハ	
江北町	ロ	1/600	125	69	町民課	有	ハ	ロ	ロ	ホ	ニ	ロ	ハ	
白石町						有	イ							
福富町						有	イ							S4複製、野取帳有
有明町	ロ	1/600	148	114	住民課	有	ニ	ロ	ロ	イ	ニ	ハ	ホ	
太良町	イ	1/600	279	265	税務課	無	—	イ	ロ	イ	イ、ロ	イ	ロ	
塩田町	ロ	1/600	364	337	町民課	無	—	イ	ロ	イ	ロ	ハ	ロ	
嬉野町	ロ	?	500	486	税務課	無	—	ロ	ロ	イ	イ	ハ	イ	

（凡例）

作成時期　イ、明治20年以前　ロ、明治21～30年　ハ、明治31年～末年

紛失の程度　イ、全部紛失　ロ、大部分紛失　ハ、半分程度紛失　ニ、一部紛失

保存状況

・事項　イ、記載事項ほぼ明瞭　ロ、わかりにくい所あり　ハ、ほとんど不明瞭

・原簿　イ、ほぼ原形　ロ、やや破れている　ハ、破れがひどい

・破損理由　イ、多使用　ロ、湿気　ハ、日焼け　ニ、虫喰い　ホ、管理不充分

対処方法

・修理　イ、テープで補修　ロ、和紙等を貼り上に明示　ハ、複製　ニ、修理せず

・管理　イ、破損しない入れ物へ移動　ロ、別の場所・部屋へ移動　ハ、対処していない　ニ、その他

今後の取扱い　イ、永久保存文書にしたい　ロ、永久保存文書にしている　ハ、自市町村の施設で保存したい　ニ、適切な施設等に保存を委託したい　ホ、対処法は考えていない　ヘ、破棄したい

Ⅵ．昭和59年度農業基盤整備事業に係る発掘調査の概要

1．一の坪遺跡（略号：ＩＮＴ）

遺跡の所在地

鳥栖市山浦町一の坪

調査主体者

鳥栖市教育委員会

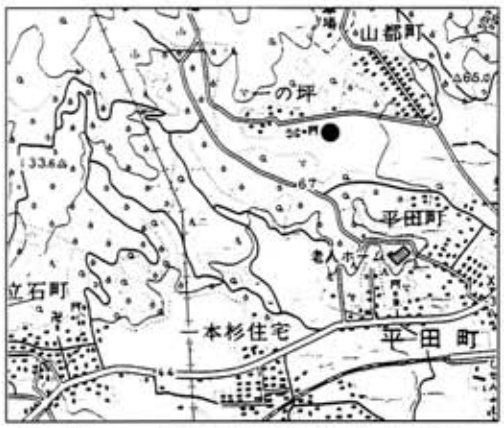
調査期間

昭和59年７月～９月

調査面積

400㎡

遺跡の概要



第46図　一ノ坪遺跡周辺地形図（1/25,000）

一の坪遺跡は、(注)九千部山南方の支峰雲野尾峠（400.1m）から南東に派生する標高約200mの丘陵に貫入する小谷の奥部に位置する。沼川と安良川のそれぞれの支流によって開削された谷水田部上に立地する。今回調査の対象となったのはそのうち安良川の支流沿いの標高約58mの地点である。地区周辺には、北の一の坪集落一帯の一の坪古墳群、南東の平田原付近の仿製鏡・勾玉や種々鉄製品の出土で知られる薄尾古墳群等が知られている。遺跡名の「一の坪（市）ノ坪）」という名称は条里制に起因すると思われるが、付近に明確な条里地割は認められない。

調査の結果、方形竪穴１基・長方形土壙１基・小穴多数が検出された。方形竪穴は調査区南側に位置するもので、一部調査区外にかかるため全容は知り得ないが、内部より土師器小皿・鞴の羽口・スラッグ等が出土した。周囲からも炉壁と思われるものや、スラッグが出土していることから、付近に鍛冶工房のあったことが推測され、それと関連のある竪穴ではないかと思われる。長方形土壙は地区中央に位置するもので、完形の土師器杯が出土したため土壙墓の可能性も考えられるが断定はできない。その他多くの小穴群が検出されたが、掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

出土した遺物は平安～鎌倉時代の土師器小皿・杯・甕・石鍋、土鍋、輸入陶磁器を中心に奈良期のものと思われる須恵器杯・室町時代土鍋・近世陶器等が出土した。

以上のことから一の坪遺跡は平安時代末期～鎌倉時代前期に主に営まれた遺跡で、小鍛治も行なわれていた集落関連遺跡であること等が判明した。今後条里制や中世村落（山浦氏との関係）を考えていかなければならないが、そのための糸口となる資料が得られたことは有意義であった。

注　石橋新次『鳥栖市団体営圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』（鳥栖市文化財調査報告書第24集）鳥栖市教育委員会　1985

2．中津隈四本松遺跡（略号：ＮＴＧ）

遺跡の所在地

三養基郡北茂安町大字中津隈

調査主体者

北茂安町教育委員会

調査期間

昭和59年８月～10月

調査面積

5,000㎡

遺跡の概要

第47図　中津隈四本松遺跡周辺地形図（1/25,000）

中津隈遺跡は北茂安町の西部、脊振山から派生する標高５～６ｍの低位段丘上に立地する。遺跡は干飯集落から南側の水田部にかけて広がるが、遺跡の南西端と南端を圃場整備事業に伴う支線用排水路によって掘削されるため、この部分について発掘調査を行った。

遺跡西端の１区からは、溝跡１条・土壙８基・柱穴が検出されたが、上面は削平を受けており遺構の残存状態は良くない。遺物は鎌倉時代の土師器小皿・杯・須恵器大甕片が出土しているが、いずれも小片である。

遺跡南端の２区からは、溝跡３条・住居跡７棟・方形周溝２基・井戸跡５基の他土壙・多くの柱穴が検出された。

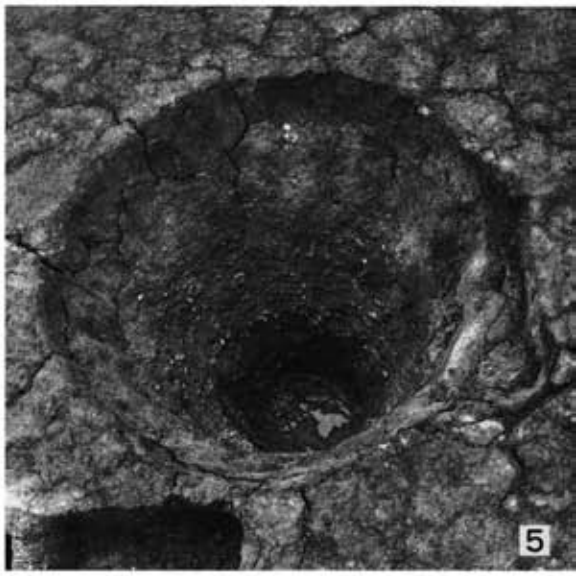
溝跡のうちSD 201溝跡は調査区の北東から南西へ遺跡を区画するように斜行している。幅４～５ｍ、深さ0.7m、長さ60m を検出した。

住居跡は方形のもの３棟、隅丸方形のもの４棟で、この内規模の大きいSB 205住居跡は4.95 m ×5.05m の方形で、主柱４本を配列している。又SB 206住居跡は一辺 4.4m の隅丸方形で、４本の主柱と中央に土壙を１ケ所設けている。内部より弥生時代後期～古墳時代前期の甕・鉢・高杯が出土した。

方形周溝のうちSD 202周溝は3.7×4.0m の隅丸方形で幅0.5m、深さ0.2m である。

井戸跡は、SD 201溝跡北側から３基、溝跡に沿って２基検出した。平面形が円形の単掘りのもので、最も大きいSE 201井戸跡が直径1.45×1.55ｍ、深さ1.1ｍ、小さいSE 204井戸跡が直径0.75×0.75m である。内部より平安時代中期の土師器杯、黒色土器椀が出土した。又SE 201井戸跡の近くから石帯が１点出土した。

このように中津隈遺跡は弥生時代後記～鎌倉時代の集落跡であるが、遺跡を区画する大溝は当時の集落形態を知る上で良好な資料であり、又石帯は県下で５例目の出土で注目される。



1．中津隈四本松遺跡全景（東から）
2．ＳＢ205住居跡（西から）
3．ＳＢ202住居跡（南から）
4．ＳＢ203～205住居跡（北から）
5．ＳＥ202井戸跡（東から）

3．本分三本柳遺跡（略号：HBS）

遺跡の所在地

三養基郡三根町大字西島

調査主体者

三根町教育委員会

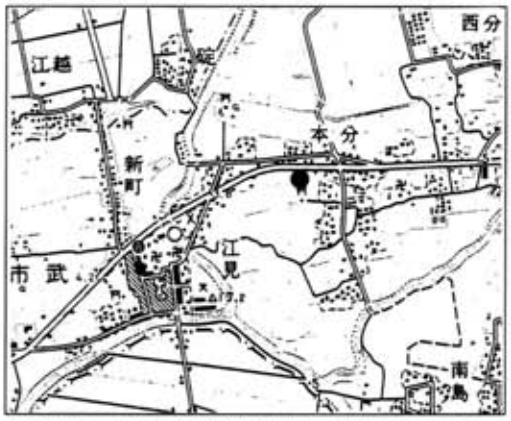
調査期間

昭和59年10月、12月～昭和60年１月

調査面積

1,000㎡

遺跡の概要



第48図　本分三本柳遺跡周辺地形図（1/25,000）

本分三本柳遺跡は三根町の中部、標高３～４ｍの低平な沖積平野に立地する。遺跡は本分集落内の東西500m、南北400mの広範囲に広がる遺跡で、この中に本分貝塚(注)、高屋敷貝塚、かけ塚貝塚などカキを主とする弥生時代中期の貝塚が分布している。本分三本柳遺跡は本分遺跡の西端に位置しており、ここに圃場整備事業に伴い小排水路が掘削されることとなり、この部分の10×100mの1,000㎡について発掘調査を行った。

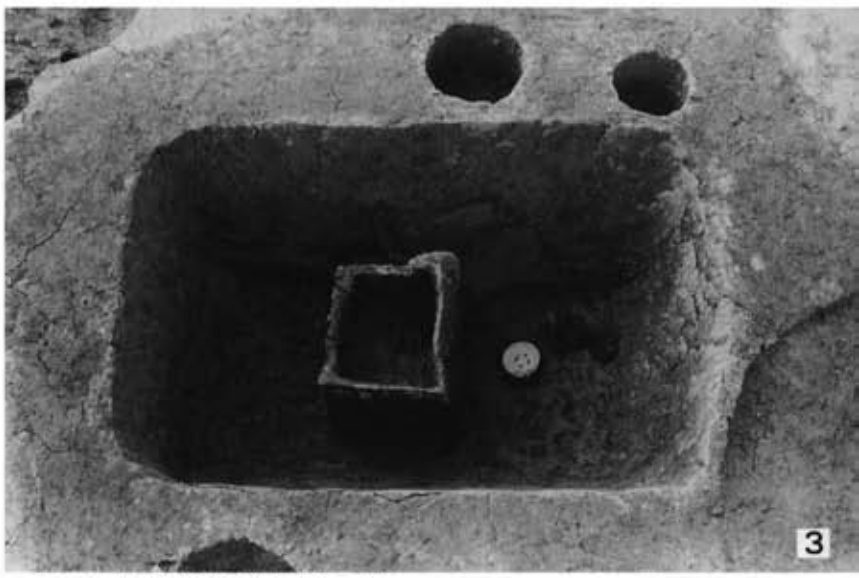
検出した遺構は、溝跡５条・井戸跡17基・貯蔵穴６基・木棺墓１基の他、土壙・小穴があり、遺構の時期は大きく弥生時代と中世とに分けられ、大部分を中世のものが占める。

弥生時代の遺構には貯蔵穴と土壙がある。貯蔵穴の大きさは長さ2.2m、幅1.4m、深さ1.5m程で、時期は弥生時代中期前葉～中葉のものである。

中世の遺構は溝跡・井戸跡・木棺墓等が検出された。溝跡のうちSD101溝跡は遺跡の北端に位置し、遺跡の北限を区切るものとみられる。又南側に位置するSD103溝跡は方形に廻ることも考えられ、環濠になる可能性がある。井戸跡は調査区の中央と南側に集中している。平面形は円形で、SE108井戸跡が二段掘りである他は、単掘りのものである。大きさはSE102･103･104井戸跡などの直径１ｍ以内のものから、SE106･110･111井戸跡など２ｍ近くのものがある。井戸跡からの出土遺物は少なく、土師器小皿・杯・椀などが出土した。木棺墓は調査区の北側に位置する。長さ1.75m、幅1.15m、深さ0.5mの長方形の墓壙の中央に、長さ0.4m、高さ0.4m以上の方形の木棺を埋置し、木棺の西側には1.45mの棒を置いている。副葬品としては、白磁皿２個が出土した。

このように本分三本柳遺跡は、弥生時代と中世の２期にわたる遺跡であるが、本分貝塚などのこれまでの調査例からも三根町の遺跡は弥生時代前期まで遡ることはなかったが、今回の調査においても同様の結果が出た。また本分遺跡は弥生時代の遺跡と考えられていたが、今回の調査で中世の遺構も多く分布していることがわかり、特に木棺墓は当時の埋葬のあり方を示す好例であるといえる。

注　志佐惲彦他編『本分貝塚』佐賀県立博物館調査研究書第７集　1981



1．本分三本柳遺跡全景（南から）
2．溝跡検出状況
3．木棺墓検出状況

4．大曲遺跡群　大曲A遺跡〔OMG (A)〕—1
亀作A遺跡〔KMS (A)〕—2

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字大曲

調査主体者

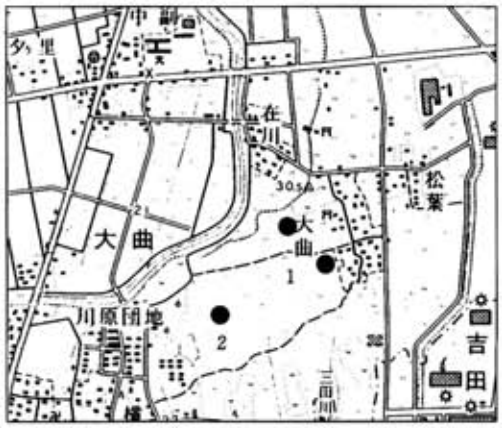
東脊振村教育委員会

調査期間

昭和59年４月～昭和60年３月

調査面積

11,000㎡



第49図　大曲遺跡群周辺地形図（1/25,000）

遺跡の概要

大曲遺跡群は脊振山系に源を発する田手川によって形成された洪積世段丘のうち目段原段丘上に広がる標高27m前後の水田部に立地する、弥生時代～中世にいたる遺跡群(注)である。

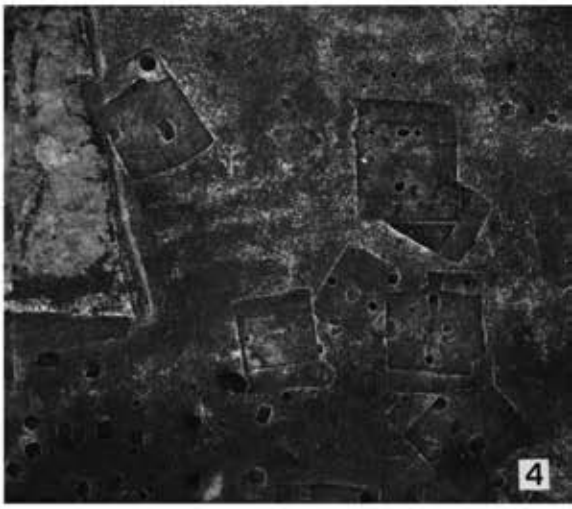
大曲A遺跡第１地区は、現在の大曲集落の西に接する地区である。調査の結果、検出された遺構は溝跡４条、掘立柱建物跡１棟、土壙２基、畝状遺構、小穴である。溝跡はいずれも遺構群を区画する方形のものである。地区西方で検出された畝状遺構は、中世の畑地跡である可能性がある。出土した遺物は土師器、陶磁器、白磁、青磁、土製品等である。

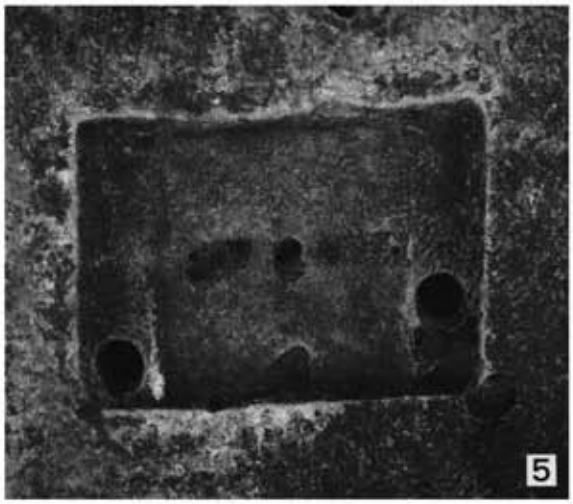
大曲A遺跡第２地区は第１地区の北側に位置する。遺構の密度は粗で、掘立柱建物跡３棟等である。調査区は南側に緩やかに落ち込んでおり、弥生～古墳時代の遺物包含層となっている。

亀作A遺跡は大曲・横田両集落のほぼ中間に位置する地区で、周囲の水田よりやや小高い部分であった。検出された遺構は長方形の竪穴住居跡22棟、２×３間と２×２間の掘立柱建物跡15棟、その他土壙、小穴群である。弥生時代後期の土器を主体に、青銅鏡・鉄鎌・鉄斧等の金属器、石製穂摘具等が多数出土した。青銅鏡は直径3.7cmの仿製鏡で、竪穴住居跡柱穴の埋土に鏡面を下にして埋納されていた。

このように大曲遺跡群の調査で、弥生時代及び中世の集落跡等が検出された。大曲A遺跡第１地区で検出された中世の周溝を持つ遺跡群は、現在の大曲集落の前身をなすものと思われ、興味深い資料である。亀作A遺跡では、多くの竪穴住居跡が検出されたが、ベッド状部の形態に数種あり、又そこに貯蔵穴状の竪穴を１～２個持つものがある事、供献された土器が多い事、青銅鏡の出土等当時の住居形態を考える上で貴重な資料を数多く得ることができた。

注　西田和己『松ノ森遺跡』佐賀県教育委員会　1983
久保伸洋『東外遺跡』東脊振村教育委員会　1983
同　『大曲遺跡群Ⅰ』　同　1984
同　『大曲遺跡群Ⅱ』　同　1985
『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書１～３』佐賀県教育委員会　1983～1985





1．大曲A遺跡全景（南から）
2．大曲A遺跡周溝部
3．亀作A遺跡全景（南から）
4．亀作A遺跡竪穴住居跡群
5．亀作A遺跡SH001竪穴住居跡
6．亀作A遺跡SH020竪穴住居跡

5．的五本黒木遺跡（略号：ＹＫＷ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字志波屋

調査主体者

神埼町教育委員会

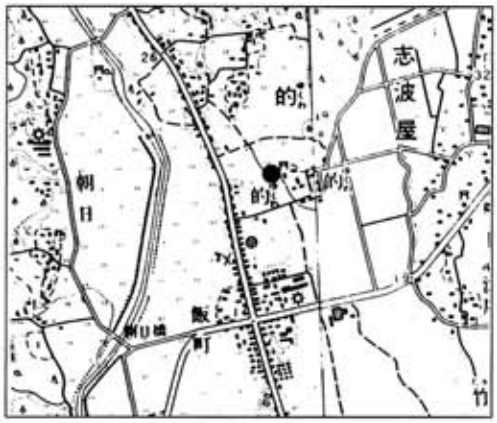
調査期間

昭和59年４月～11月

調査面積

6,000㎡

遺跡の概要



第50図　的五本黒木遺跡周辺地形図（1/25,000）

的五本黒木遺跡[注1]は、神埼町北部に分布する的遺跡群の１つで、脊振山系南麓に派生する標高約22m の段丘上に立地する。的遺跡群は旧石器時代～中・近世に及ぶ広汎な集落跡・墳墓群で総面積約136,000㎡ に及ぶ。これまでの調査では昭和56年度の志波屋五本松遺跡[注2]（弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡）、昭和57年度の志波屋六本松遺跡[注3]（縄文・古墳時代集落跡）、昭和58年度の船塚遺跡[注4]（旧石器～古墳時代集落跡）等がある。

調査は東のＡ地区、西のＢ地区に分けて行った。

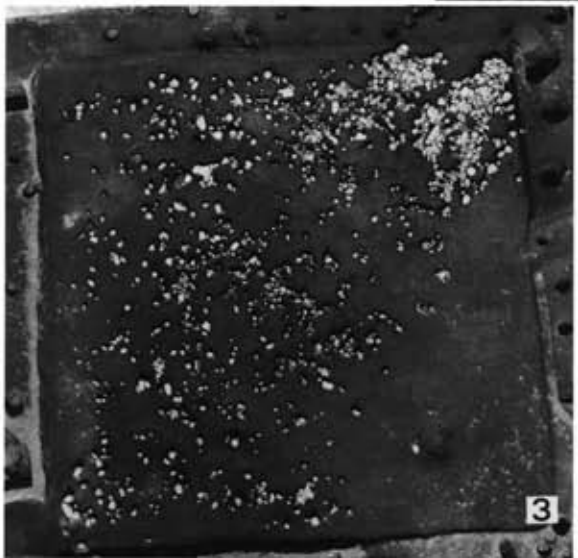
Ａ地区で検出された遺構は、竪穴住居跡80軒、掘立柱建物跡11棟、土壙22基、溝跡12条等で、弥生時代中期～古墳時代中期のものである。竪穴住居跡のうち弥生時代終末期の10.2×6.2m のものと、古墳時代初頭の10.3×10.2m の大型のものが検出された。特に後者のものは南東部より土師器ミニチュア土器が大量に出土しており興味深い。出土した遺物は、弥生土器・土師器の甕・壺・高杯等のほか、石包丁・石鏃・石剣・石製紡錘車・ガラス小玉・管玉・鉄斧・鋤先・鉄鏃等で量、質ともに豊富である。

Ｂ地区では、弥生時代前期の溝跡、弥生時代中～後期の竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡３棟、中世～近世の不定形落ち込み等である。竪穴住居跡は平面方形～長方形のもので、柱穴は２～４本、ベッド状の施設を持つものが３軒ある。土壙をもつものが３軒あり、４軒より炉跡が検出された。出土遺物は壺・甕・鉢等の土器や管玉・ガラス玉・鉄斧・環頭刀子等の鉄器等である。掘立柱建物跡は１×１間２棟、１×２間１棟である。又、包含層から四角錐台形を呈する鐸型土製品が出土したことは注目される。

以上のように的五本黒木遺跡は、弥生時代中期～古墳時代にかけての集落跡で、佐賀平野の中でも大規模な集落であることが確認され、遺物の豊富さと合せて、集落跡研究にとって重要な遺跡といえよう。

注１　緒方祐次郎『的五本黒木遺跡』神埼町教育委員会　1985（Ｂ地区の報告書）
注２　森田孝志編『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書１』佐賀県教育委員会　1983
注３　八尋実『志波屋六本松遺跡』神埼町教育委員会　1983
注４　八尋実『舟塚遺跡』神埼町教育委員会　1984

1．的五本黒木遺跡Ａ地区全景
2．的五本黒木遺跡Ｂ地区全景
3．Ａ地区ＳＨ019住居跡
4．Ａ地区ＳＨ047住居跡



6．荒堅目遺跡（略号：ＡＫＭ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字本堀

調査主体者

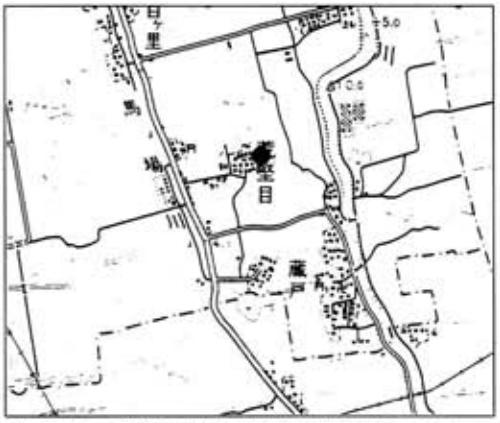
神埼町教育委員会

調査期間

昭和59年８月～昭和60年３月

調査面積

4,000㎡



第51図　荒堅目遺跡周辺地形図（1/25,000）

遺跡の概要

荒堅目遺跡(注)は、神埼町の南東部、田手川西岸に形成された標高3.6mの自然提防上に立地する。本遺跡は今回の調査以前にも弥生時代の貝塚として知られていた遺跡で、遺跡の南方にも森ノ木遺跡・高志神社遺跡・詫田西分遺跡等、貝塚の存在が知られている遺跡が分布している。荒堅目遺跡は確認調査の結果、南北約200m、東西200mの拡がりを持つと考えられ、今回の調査は遺跡のほぼ中央部を南北に走る水路部分について行った。

調査の結果、検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟以上・竪穴住居跡１軒・井戸跡45基・土壙65基以上・柵列・溝跡９条等である。

弥生時代の遺構は前～中期のもので調査地区中央部に分布する。この時期のものとして完全な人骨１体が遺存していた石蓋土壙墓等土壙墓・土壙があり、甕・壺・高杯等が出土した。

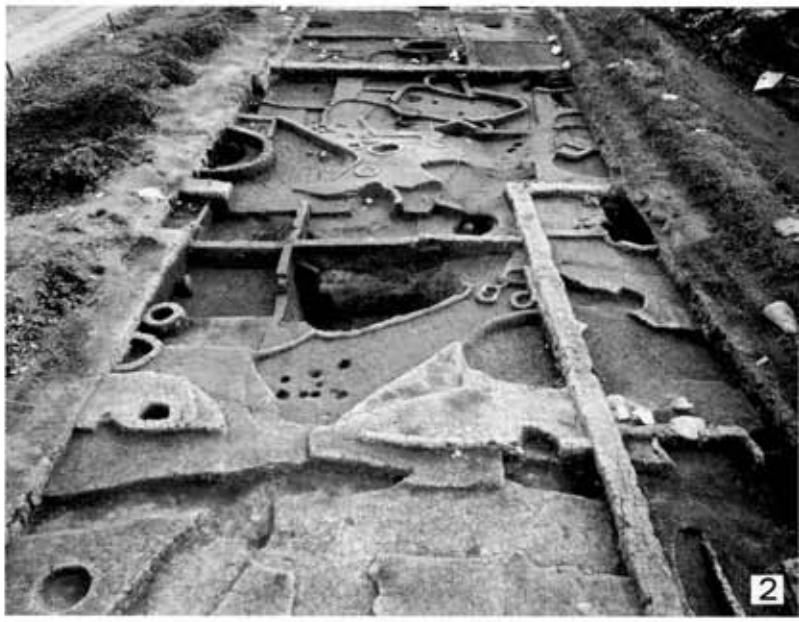
古墳時代の遺構は前期に位置付けられるものが主体を占め、調査区南半分に分布する。この時期の遺構は掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・溝跡等で、出土した遺物は甕・壺・高杯等のほかミニチュア土器・土製勾玉・子持勾玉・人形土製品・土製鏡等である。

平安時代に位置付けられる遺構は、溝跡・柵列・土壙墓等で、調査区北部に分布する。出土した遺物としては、土師器椀・杯や馬・牛・猪・鹿等の獣骨等の他、SD151溝跡最下層の木簡、SX040遺構の緑釉陶器や、SK011土壙で検出された１体分の馬骨等興味ある資料が多い。

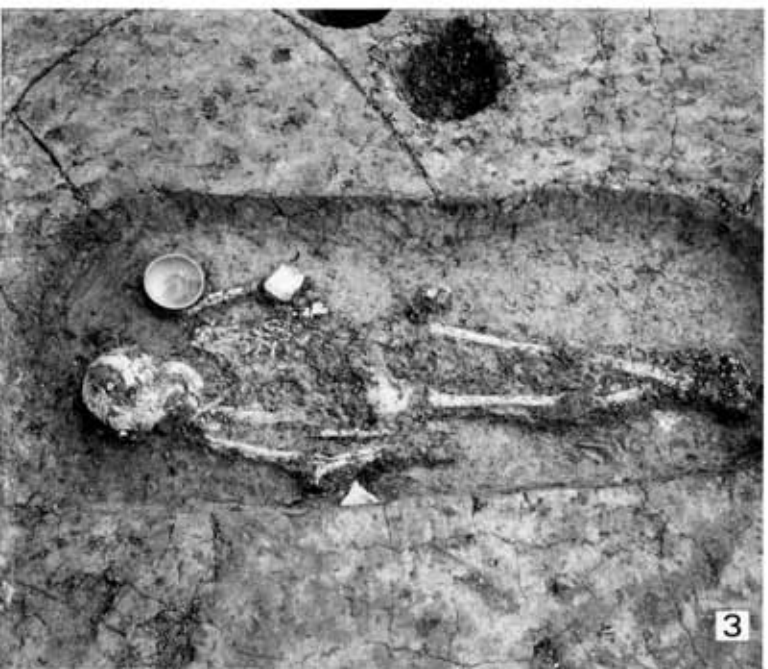
平安末～鎌倉時代の遺構としては調査区ほぼ全域で井戸跡が検出された。素掘りと２段掘りのものがあり、井戸枠は検出されなかった。特にSE001井戸跡からは、土師器椀・杯・小皿・瓦器・白磁・陶磁とともに銅銙帯・人面形石製品等が出土し注目される。

以上のように荒堅目遺跡では弥生時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。従来本遺跡は弥生時代の貝塚として知られていたが、今回の調査では弥生時代の貝層は検出されず、検出された貝層は、一部古墳時代の所産と思われるものが確認されたが、主体は平安～鎌倉時代に位置付けられるものであった。遺物としては県下初の出土である木簡を始め、興味深い資料が数多く出土しており、注目すべき遺跡である。

注　八尋実『荒堅目遺跡』神埼町教育委員会　1985



1．荒堅目遺跡北部全景
2．荒堅目遺跡中央部全景
3．人骨出土状況
4．馬骨出土状況



7．森ノ木遺跡（略号：MNK）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字本堀

神埼郡千代田町大字下板

調査主体者

神埼町教育委員会

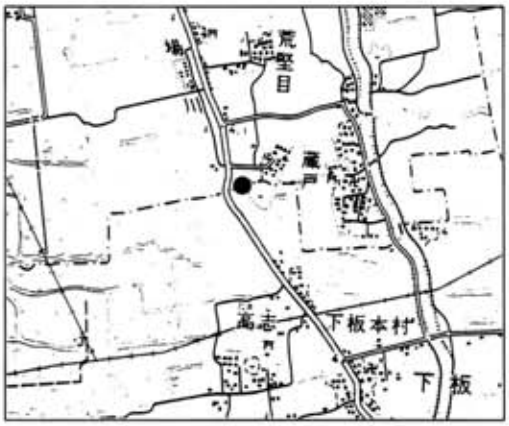
千代田町教育委員会

調査期間

昭和59年12月～昭和60年３月

調査面積

1,500㎡



第52図　森ノ木遺跡周辺地形図（1/25,000）

遺跡の概要

森ノ木遺跡は、田手川と馬場川に挟まれた地区で、標高3.7mの水田部に立地する。神埼町と千代田町の境に沿った部分に計画された水路予定地について調査を行った。本遺跡は荒堅目遺跡の南約450mの地点に位置する。

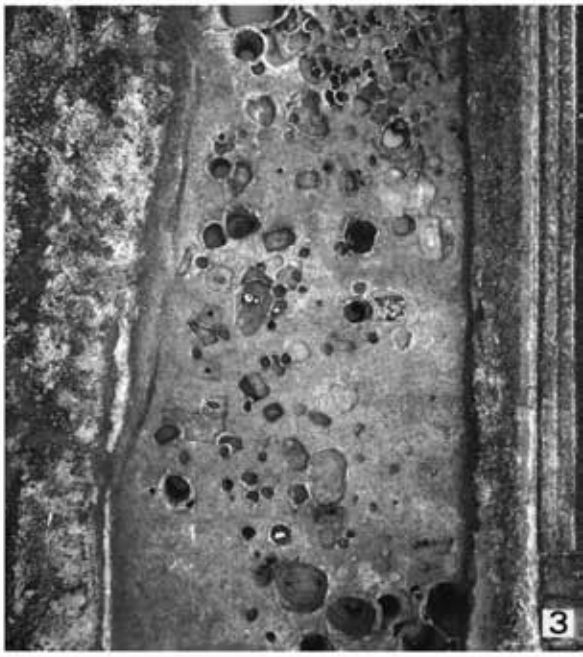
調査の結果、弥生時代～鎌倉時代の集落跡が検出された。遺構は東半部に密集し、西半部は東西・南北方向の溝跡が検出された。

弥生時代の遺構は掘立柱建物跡・井戸跡・土壙等で、中期～後期に位置付けられる。また東辺で前期の貝層が堆積した不定形落ち込みが検出された。出土した遺物は、土器・木器・石包丁等である。

古墳時代の遺構は井戸跡・土壙・溝跡等である。井戸跡中SE051井戸跡は平面方形の単掘りで、内部より土師器甕・壺・ミニチュア土器、木器等が完形で得られた。その他の遺構にも完形の土器を数多く埋納したものが見られる。

平安、鎌倉時代の遺構は井戸跡・溝跡・土壙等で、土師器・瓦器・黒色土器等が検出された。

以上のように森ノ木遺跡では弥生時代～鎌倉時代の集落跡が検出された。前述の遺構の他にも数多くの小穴が存在し、それらのうちのいくつかは掘立柱建物跡として復元できるものかも知れないが、今回の調査が水路予定地の狭い範囲のものであったため、明確にすることはできなかった。遺構の中には完形に近い土器・木器等が一括埋納されたものがあり、当時の生活を考える上で重要な資料となる。今後、南方の高志神社遺跡、詫田西分遺跡や北方の荒堅目遺跡との関連を考える等、佐賀平野における本遺跡の位置付けを把えていきたいと考えている。



1．森ノ木遺跡全景（西から）
2．森ノ木遺跡東部
3．森ノ木遺跡中部
4．井戸跡
5．土壙

8．黒井遺跡（略号：ＫＲＩ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字黒井

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和59年７月～12月

調査面積

4,000㎡

遺跡の概要

第53図　黒井遺跡周辺地形図（1/25,000）

黒井遺跡は、千代田町の北西部、城原川西方の標高３～４ｍの沖積平野上に立地する。遺跡の南隣には、銅矛・銅剣の鋳形が出土した姉遺跡(注)、北方には上黒井遺跡・大石遺跡など弥生時代の貝塚を持つ集落跡として知られていた。調査は掘削を受ける水路予定地について、便宜的にⅠ～Ⅲの小調査区に分け実施した。

Ⅰ区からは、弥生時代～歴史時代の井戸跡・溝跡・土壙・貯蔵穴・小穴・土器溜り等の遺構が検出された。遺構の密度は調査区中央部から南側にかけて密に分布し、西側、東側、北側にいくに従い稀になる。また調査区南東部には薄い貝殻片の堆積が見られ、南方の姉貝塚との関連が考えられる。遺物としては弥生土器（甕・壺・高杯・器台・鉢）、瓦器、瓦質土器、土師器、青磁、白磁等の土器類の他、石包丁・砥石・凹石・摺石等の石器類が出土した。

Ⅱ区からは、土壙・溝跡・小穴が検出された。遺構はほとんどが中世のもので、部分的に弥生時代の遺構が混じる。溝跡は大小あり、すべて北東～南西のほぼ同じ方向に走る。出土遺物は、弥生土器をはじめ、中世の土器・陶磁器類とともに少量の石器が出土した。特に注目される遺物として、東端を走る溝跡より出土した木製の梯子で、Ⅱ層の砂層中より弥生時代後期の土器とともに出土した。この梯子は長さ４ｍ、径0.3ｍのほぼ円筒状をなすもので、７つの段を有し、上・中・下位にそれぞれ刳り抜きを持つ。

Ⅲ区からは、中世の溝跡・土壙・性格不明遺構を検出した。中央部を東西に蛇行しながら流れる溝跡の両側に疎らに点在する。出土遺物は、瓦器・瓦質土器・青磁等の土器類で量的にはそれほど多くない。

以上のように黒井遺跡は、弥生時代～中世にかけて長い間営まれた集落跡であり、今回の調査で多くの資料を得ることができた。特に木製の梯子の出土は、古代の有明海沿岸地域の家屋構造を解明する上で重要な資料であり、今後の研究に資する所が大きいと考える。

注　堤安信『姉遺跡』千代田町文化財調査報告書第３集　千代田町教育委員会　1975

9．黒井八本松遺跡（略号：ＫＨＭ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字黒井

調査主体者

千代田町教育委員会

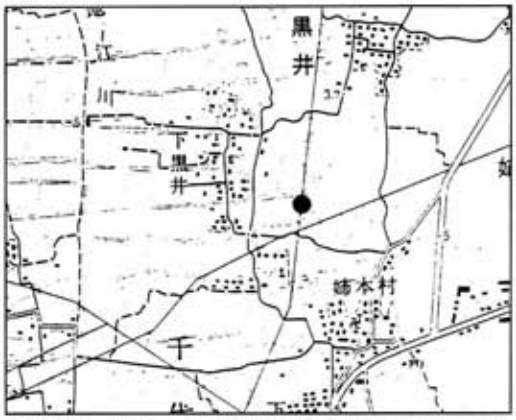
調査期間

昭和60年１月～２月

調査面積

1,100㎡

遺跡の概要



第54図　黒井八本松遺跡周辺地形図（1/25,000）

黒井八本松遺跡は千代田町の北西部、城原川西方の標高３～４ｍの沖積平野上に立地する。遺跡の南方には、姉遺跡や今年度発掘調査を実施した黒井遺跡、北方には上黒井遺跡・大石遺跡などの弥生時代遺跡が点在している。また周辺には大石集落や黒井集落等の中世環濠集落が存在し、現在も溝渠（クリーク）を中心とした生活が営まれている。調査は掘削を受ける水路予定地について実施した。

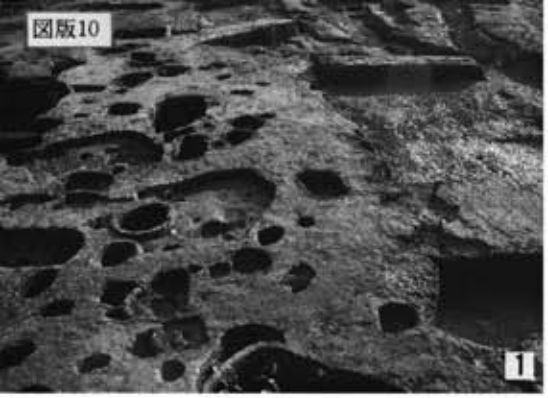
調査区のうち中央やや西側部分及び西端部分は後世のクリーク造営のため、かなり破壊されている。このクリーク部分を隔てて西側部分を便宜的にＡ地点、東側をＢ地点として調査を実施した。

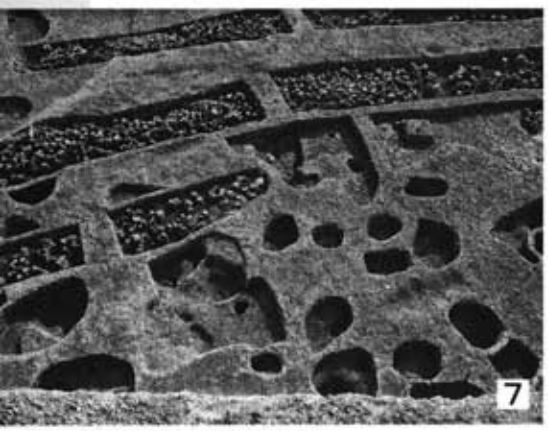
検出した遺構の大部分が弥生時代のもので、溝跡４条・土壙・貯蔵穴７基・井戸跡４基・大小柱穴・小穴95個・不明遺構５基である。SD004溝跡はＡ地点西側よりＢ地点のほぼ中央部まで約60m延びており、更に西方へ続くものと考えられる。SD017溝跡はＢ地点南西部分からほぼ中央付近までの約30mが検出された。SD016溝跡は東側が削平を受けており約20mが検出された。これら３条の東西に走る溝跡からは弥生時代中期の土器が投げこまれた状態で大量に出土した。井戸跡は４基確認されたが、それぞれ10～15層の堆積が確認できた。

遺物としては甕・壺・器台・高杯等の弥生土器の他に、土師器・瓦器・瓦質土器等の土器類や、石包丁・石斧・砥石等の石器類も出土した。

今回の調査は支線水路に伴う狭い地区の調査であったため、遺跡の全体規模や、明確な性格等は不明であったが、本調査区内だけでも多数の遺構・遺物が検出されており、昭和58・59年度にかけて実施された姉遺跡や黒井遺跡の調査結果等を総合することにより、城原川西岸地域、ひいては有明海沿岸地域の古代～中世にかけての集落構造の解明のための貴重な資料を数多く得ることができるであろう。

図版10





1．黒井遺跡Ⅰ区（西から）
2．黒井遺跡Ⅰ区（西から）
3．黒井遺跡Ⅰ区（北から）
4．黒井遺跡Ⅱ区（西から）
5．黒井遺跡Ⅲ区（東から）
6．黒井八本松遺跡全景
7．黒井八本松遺跡中央部
8．黒井八本松遺跡西部

10. 楢田(ならだ)遺跡（略号：NRD）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上字楢田

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和59年８月～10月

調査面積

800㎡

遺跡の概要

第55図　楢田遺跡周辺地形図（1/25,000）

楢田遺跡は、大和町の南西部、嘉瀬川と平川に挟まれた標高４～５ｍの水田地帯に立地する。調査対象地は通称古屋敷と呼ばれている場所の北側にあたり、周辺より一段高い畑地となっている。周辺には弥生時代の住居跡・洗場跡等が検出された久留間(くるま)遺跡(注)や弥生時代の遺物が多量に出土した楢田三本松遺跡等多くの遺跡が存在する。また北の池上集落付近には道善寺古墳や風楽寺古墳等の前方後円墳がいくつか所在する。当遺跡は確認調査の結果、約60,000㎡の広がりを持つ遺跡だと考えられ、今回はそのうち水路予定部分にかかる幅８ｍ、長さ100ｍの部分について調査を行った。

調査の結果、井戸跡18基、土壙10基、溝跡18条、柱穴・小穴群が検出された。溝跡からは弥生時代の壺・甕等大量の遺物が出土した。又、土壙からは土師器甕・壺・皿等が出土した。

今回の調査は狭い水路予定部に限定されるものであったため、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、本遺跡が弥生時代～奈良・平安時代にわたって営まれた集落跡であることが判明した。

注　七田忠志・松尾禎作「久留間遺跡調査概報」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第10集』1951

図版11

楢田遺跡全景

楢田遺跡遺物出土状況

11. 加与丁野村遺跡（略号：ＫＴＮ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂字加与丁

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和59年７月～８月

調査面積

800㎡

遺跡の概要

第56図　加与丁野村遺跡周辺地形図(1/25,000)

加与丁野村遺跡は、諸富町の北部、佐賀江川南岸の標高約３ｍの低平地に立地する。「加与丁」は「嘉与丁・駕与丁」とも記し、江戸時代佐賀本藩と蓮池蓮の侍が居住していたとされる(注)。地区周辺には「源兵衛屋敷」等の屋敷名に関連する小字名が多い。現在加与丁集落は県道神埼・諸富線に沿って街道街的な形状をしている。加与丁集落の西の陣の内集落付近にも中～近世の遺物が散布しており、又集落の名称から当該期の集落跡・館跡が存在するものと考えられる。

調査は加与丁集落東側部分に東西に計画された水路部について実施した。その結果、掘立柱建物跡３棟・溝跡７条・井戸跡５基・土壙３基・柱穴と思われる小穴多数が検出された。出土した遺物等から考えて室町時代末～江戸時代にかけての時期のものと考えられる。遺構は東側に密度が高い地区があり、西へ行くに従って疎になる。調査区中央部に東西方向の溝跡が検出されたが、埋土から松浦系古唐津の皿や碗が出土した。またこの溝跡に沿って１間×12間の掘立柱建物跡が検出された。この掘立柱建物跡の柱穴部には礎板が用いられている。時期は江戸時代初期のものであろう。これらの出土遺物のほかに、土師器・瓦器等の土器類や、明代の青磁・白磁、絵唐津等が出土している。

以上のように今回の調査では加与丁野村集落の上限が室町時代末にまで遡ることが確認された。また佐賀平野ではこれまで江戸時代の屋敷跡を調査した例がほとんどなく、今回の調査で得られた資料は、佐賀平野の近世史を考える上で重要なものであろう。

注　『日本地名大辞典41　佐賀県』「加与丁」の項　角川書店　1982

1．加与丁野村遺跡全景
（東から）
2．遺物出土状況

12. 村中角遺跡（略号：MNS）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂字大堂本村

調査主体者

諸富町教育委員会

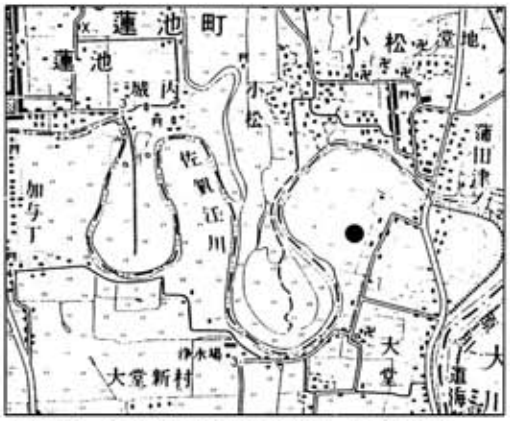
調査期間

昭和59年９月～昭和60年３月

調査面積

3,200㎡

遺跡の概要



第57図　村中角遺跡周辺地形図（1/25,000）

村中角遺跡は城原川と佐賀江川が合流する付近の低平な水田部に立地する。当地区付近は、中世の遺物散布地として知られていたが、昨年11月の確認調査によって60,000㎡の広さを有する遺跡の存在が確認された。今回はそのうち水路予定地部分について調査を実施した。当地区から佐賀江川を隔ててすぐ北には蒲田津・堂地集落を中心とした地域が弥生時代・中世の遺物散布地である小松遺跡として知られており、また地区の西部、佐賀江川の蛇行によって囲まれた地区には、諸富町側に小田城跡、佐賀市側に著名な蓮池城跡が存在する。

調査の結果、弥生時代後期～江戸時代にかけての掘立柱建物跡４棟・井戸跡39基・土壙10基・溝跡11条・小穴多数が確認された。これらの遺構からは種々の遺物が出土した。そのうち弥生時代後期末の溝跡から出土した銅鏃は、柳葉型銅鏃と呼ばれるもので、これまでは古墳時代前期に属するものとされていたが、それより古い時期のものとして注目された。また奈良時代の井戸跡からは、土師器の底部に「宮殿」等の文字が刻まれた土器が出土した。このほか木製品や石器、骨角器も多い。村中角遺跡ではこれらの人工遺物のほかに、多くの自然遺物も出土している。スミノエガキ・サザエ・ハマグリ・シジミ等の貝類、瓢箪・桃・梅等の植物遺物、猪・鹿・犬・馬等の動物骨、魚骨等である。

このように村中角遺跡では弥生時代～江戸時代にわたる長い時期の遺構・遺物が検出された。これらは各時代の生活や文化に関する様々な資料を提供してくれた。弥生時代終末期の土器の中には瀬戸内系や熊本地方の土器に類似した特徴を持つものが見られ、それらの地域との交流を考えることができるであろう。また「宮殿」の文字を記した土師器からは、当時この遺跡付近に、この地域の中心的な役割を持つ建物があったことを予想させるものである。今後整理が進むにつれ、多くのことが判かってくるものと思う。

1．村中角遺跡Ⅰ区調査状況
2．Ⅰ区東側井戸跡出土動物骨
3．Ⅰ区東側井戸跡出土動物骨
4．Ⅰ区鹿骨出土状況
5．Ⅰ区人骨出土状況
6．Ⅰ区井戸跡遺物出土状況

13. 中小路増富遺跡

遺跡の所在地

多久市南多久町大字下多久字増富

調査主体者

多久市教育委員会

調査期間

昭和59年８月～10月

調査面積

4,500㎡

遺跡の概要

第58図　中小路増富遺跡周辺地形図（1/25,000）

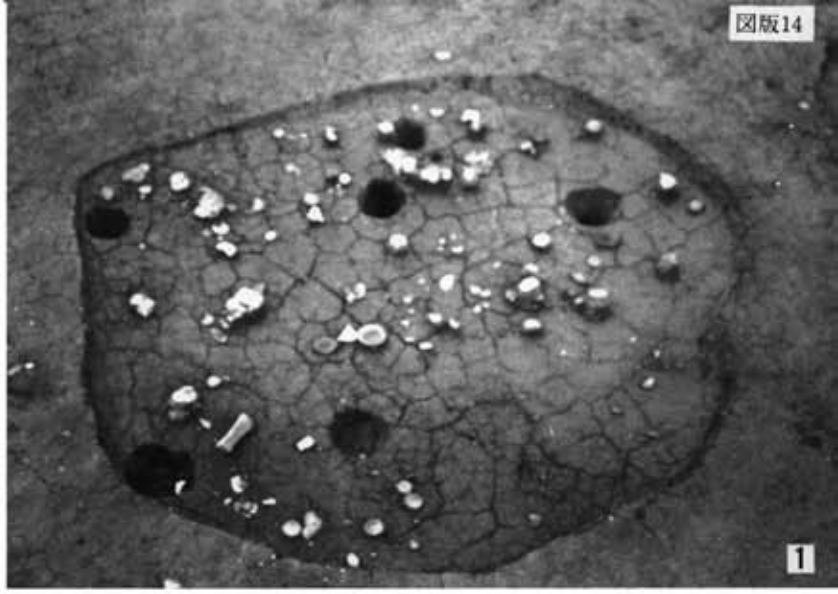
中小路増富遺跡は、天山山系から南に延びる多久中央台地の先端に形成された扇状地上の標高15m前後の水田部に立地する。本遺跡周辺には中小路遺跡・中小路古墳・陣内城等、弥生時代～鎌倉時代にかけての遺跡が集中し、市内でも遺跡分布密度の高い地域となっている。

調査の結果、弥生時代の住居跡・小溝跡・甕棺墓や、平安時代の掘立柱建物跡・土壙墓・不定形土壙・小穴群等約60の遺構が検出された。

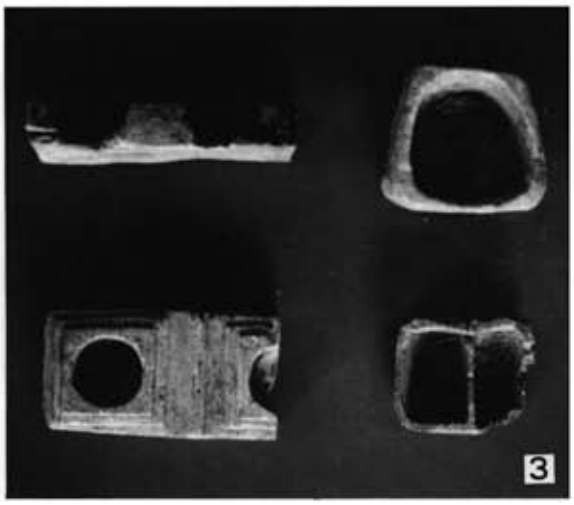
出土した遺物は、弥生時代の甕・壺・高杯、平安時代後期の土師器皿・杯、白磁皿・碗等で、平安時代に属するものが最も多く、全遺物の約８割を占める。その他にふいごの羽口や滑石製石製品・石剣・鉄製品等が出土した。特に注目される遺物として縄文時代の抉状耳飾は県内初の出土である。

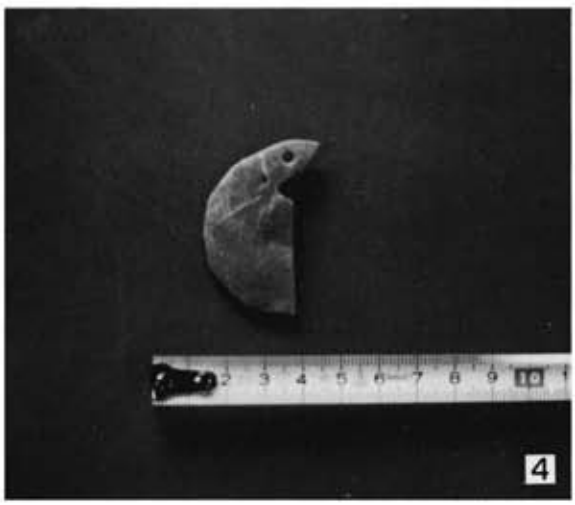
遺構の大部分は平安時代後期に位置付けられるもので、この時期の遺構群が一ケ所に集中した例は市内で初めてのものである。同地区は建久４(1193)年、前多久家の祖、多久太郎宗直が多久支配の本拠地とした場所で、多量の白磁や十数個に及ぶふいごの羽口の出土等、その前段階に中小路増富遺跡周辺が多久の行政の中心地であったことが推測できる。大量のふいごの羽口の出土例は、相知町伊岐佐伊良尾遺跡等の例と合わせて古代製鉄（鍛冶）の実態を知る手がかりとなろう。弥生時代の住居跡出土の高杯は中期の特徴を持つが、壺は後期に編年でき、住居跡は後期初頭に位置付けられることから、牟田辺遺跡や中小路遺跡との関連が考えられる。

以上のように中小路増富遺跡は平安時代後期に鉄製品を製作する集団が居住し、高い技術水準を有していたことが窺われ、多久市の歴史解明に重要な資料を提供することとなった。



1．中小路増富遺跡
　　住居跡
2．土壙遺物出土状況
3．出土滑石製品
4．抉状耳飾





14. 辺田三本松遺跡（略号：ＨＳＡ）

遺跡の所在地

杵島郡有明町大字辺田字三本松

調査主体者

有明町教育委員会

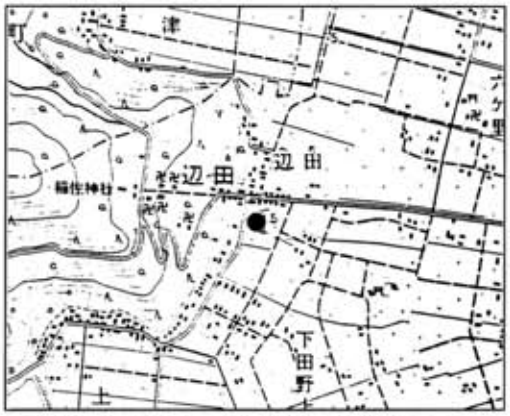
調査期間

昭和59年10月～昭和60年１月

調査面積

630㎡

遺跡の概要



第59図　辺田三本松遺跡周辺地形図（1/25,000）

辺田三本松遺跡は白石平野の南西部、沖積平野に浮かぶ標高15m程の独立丘陵上に立地する。この独立丘陵は稲佐神社参道が山手への登り口にかかる地点からすぐ南へ折れた地点に位置するもので、南北65m、東西50m程の楕円形をなしており、頂部には南北40m、東西25m程の平坦面がある。今回調査の対象となったのはこの平坦面の南西隅と西側斜面である。本地点を含む付近一帯は、弥生時代～中世の同名の遺物散布地として知られており、また西にせまる丘陵東斜面からその周辺部まで遺跡の密集する地域となっている。

調査の結果遺構を検出したのは主に頂部平坦面で、土壙48基・小穴36・敷石遺構２基であった。土壙の多くは径１m、深さ0.5～0.9m前後の楕円形を呈している。これらの土壙はほぼ等間隔に並ぶ傾向があり、中には壙底に径0.2m程の小穴を更に穿つものも見られることから柱穴の可能性がある。しかし同時に埋葬等に伴うものとも考えられ、今後の検討が必要である。この他SK032土壙は長さ1.6m、幅1.2m、高さ0.9mの整美な巨石を壙底に据えており、何らかの祭祀に関わる可能性が考えられる。また調査区西北側斜面には厚さ２m以上にわたる土師器の包含層が形成されていた。

出土遺物としては包含層より出土した多量の土師器が特筆され、他に青銅器・銅銭・青銅製簪等が出土した。

以上より本遺跡は中世末から近世初期にかけて形成されたものと思われ、特に包含層出土の土師器杯・小皿類は本丘陵上での祭祀活動を示すものと言えよう。この遺跡に関連するものとして稲佐神社の存在が考えられる。稲佐神社は「三代実録」貞観３年８月24日条に初見する神社で、平安時代～中世にかけて密教の道場として多くの坊舎を有したという。江戸時代前期に藩主の庇護を受けている。辺田三本松遺跡で検出された遺構の性格についてはなお不明な点が多いが、今後の調査研究に期待したい。

1．辺田三本松遺跡遠景
（東から）
2．同全景（西から）
3．同全景（東から）

15. 天神溜遺跡（略号：ＴＥＪ）……1
浦川内東方遺跡（略号：ＵＴＴ）……2

遺跡の所在地

伊万里市東山代町大字浦川内

調査主体者

伊万里市教育委員会

調査期間

昭和59年11月、昭和60年１月

調査面積

800㎡

第60図　天神溜・浦川内東方遺跡周辺地形図
（1/25,000）

遺跡の概要

天神溜遺跡・浦川内東方遺跡(注)は、伊万里市街地の北東、寺田川・脇野川によって開削された谷平野部に立地する。標高は天神溜遺跡で3.8m、浦川内東方遺跡で13mを計る。天神溜遺跡の西の丘陵麓には寺田貝塚や山代七ケ寺の一つ、恩徳廃寺跡と伝えられる中世寺院跡が存在する。調査は圃場整備事業に伴い、削平される部分について実施した。

天神溜遺跡は、烏帽子岳（標高597m）から北東に延びる丘陵の先端付近の東側にある崖下の水田面に立地する。検出された遺構は、室町時代の井戸跡２基・集石遺構・杭列等である。ＳＥ001井戸跡は木製井戸枠を持つ径0.7×0.8m、深さ0.8mのもので、井戸枠を拳大の礫６個で支えている。埋土上層より土師器、下層より曲物の底板、下駄等が出土した。SE002井戸跡は径0.6mで深さは現況で0.3mである。井戸枠は征目の杉板で作った曲物の底板を取り去ったものを転用している。埋土より大甕片が出土した。本遺跡で出土した遺物としては、青磁・白磁・青花・褐釉陶・石質土器・土師器・須恵質土器・瓦・石鍋・銅銭（太平通寶）・鉄鏃・下駄・曲物・木匕等や墨書を持つ木札等がある。その他縄文・古墳時代の遺物の流れ込みも見られた。

以上のように天神溜遺跡は小規模な調査ではあったが、土器や木製品を始めとする多くの遺物が出土しており、これらの持つ資料的価値は高い。この遺跡が恩徳寺に関連する可能性も高く、今後の調査が待たれる。

浦川内東方遺跡は天神溜遺跡南方の、丘陵東側水田部に立地する。調査の結果10～30cmの遺物包含層が検出された。基本層位はⅠ～Ⅳ層が判別でき、遺物包含層はこのうちⅤの灰黒色粘質土層である。出土した遺物は弥生土器・須恵器・瓦質土器等で、全部で500点ほど出土したが、総じて細片が多い。しかし磨耗は比較的少なく、近い所より移動してきたものであろうと考えられる。地区周辺は棚田として開墾されており、本来の遺跡は削平されてしまった可能性が強く、そのうち凹地に堆積した部分が削平にあわず、遺存していたものであろう。

注　盛峰雄『天神溜遺跡・浦川内東方遺跡・鈴桶遺跡』伊万里市教育委員会　1985

16. 鈴桶(すずおけ)遺跡

遺跡の所在地

伊万里市二里町

調査主体者

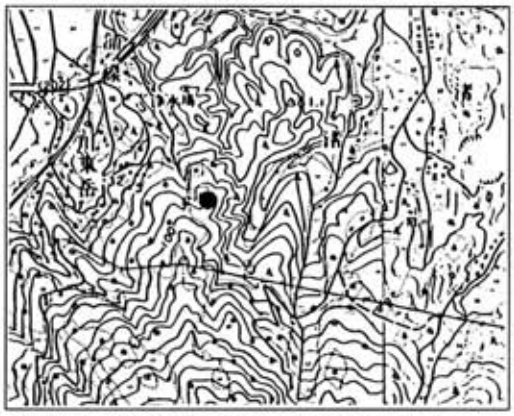
伊万里市教育委員会

調査期間

昭和59年６月～昭和60年３月

調査面積

650㎡



第61図　鈴桶遺跡周辺地形図（1/25,000）

遺跡の概要

鈴桶遺跡(注)は、伊万里市街地の南に聳える標高487ｍの腰岳の北麓の標高100～200ｍの部分に位置する。今回調査対象となった地区は、腰岳頂部より北へ延びた尾根の先端付近にあたり、腰岳農免道路建設に伴い調査を実施した。腰岳は現在死火山で高所は流紋岩に覆われており、そのうち急冷部が黒曜石として散在し、先史時代の石器の材料として広く交易されていたことが知られている。昭和36年日本考古学協会西北九州調査特別委員会・明治大学により本年度調査地区の南の地点が調査されている。地区の西約500ｍの所には高岸石棺墓遺跡、その北には平沢良遺跡・杢路寺古墳が所在する。

調査の結果、明瞭な遺構は確認することはできなかったが、石核・剝片等の遺物が集中する地点を数箇所確認することができた。

出土した遺物は、石核・縦長剝片・不定形剝片・掻器・石鏃・敲石・原石等で、その数は数十万点に及ぶ。石核には、上下に打面をもつもの、一方のみに打面をもつもの、不完形のものの概ね三形態があり、各々大小のものがある。その他注目されるものとして敲石があげられる。硬質砂岩の円礫を使用しており周辺には明瞭な使用痕が認められる。

以上のように今回の調査では、数箇所の遺物集中と大量の遺物が出土し、多くの資料を得ることができた。そして過去の資料に剝片・石核等のまとまった資料を加えることができた。また今回は、上下三層に大別できる土層を確認し、各層間で石器の組成や形態に相異点が認められる示唆的資料を得ることができた。今後得られた資料の分析を通して、学史的に著名な当遺跡の具体的内容を明らかにし、更に遺跡の保存のために活用していきたい。

注　79頁注を見よ。

17. 伊岐佐伊良尾遺跡（略号：１１０）

遺跡の所在地

東松浦郡相知町大字伊岐佐

調査主体者

相知町教育委員会

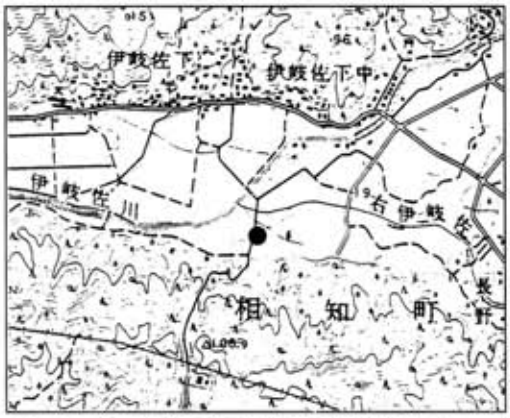
調査期間

昭和59年５月～８月

調査面積

1,700㎡

遺跡の概要



第62図　伊岐佐伊良尾遺跡周辺地形図(1/25,000)

伊岐佐伊良尾遺跡は伊岐佐川の左岸、標高12～14mの河岸段丘上に立地する。地区北方の丘陵斜面には縄文時代の遺物散布地である塩木遺跡や伊岐佐古墳群が知られていた。しかし谷平野部については従来遺跡の存在はほとんど知られていなかったが、昭和58年度の相知町教育委員会により伊岐佐中原遺跡の調査が行われ、弥生時代～鎌倉時代の集落跡・甕棺墓が確認され、当地区にも人々の生活が営まれていたことが明らかにされつつある。今回調査の対象となった遺跡は東西200m、南北100m程の範囲に、概ね３つのグループが点在した形で確認されていた。今回はこれらの３つのブロックをⅠ～Ⅴ区に分け調査を実施した。

Ⅰ区では平安時代から鎌倉時代にかけての竪穴３基・土壙９基以上・柵列２条・溝跡１条・柱穴多数が検出された。このうちSX006竪穴は長さ８m、幅６mの不整長方形で、その南半部には炉跡２基を含む小鍛冶遺構が検出された。１号炉は炉底径約0.5mの円形で半球形の炉底滓が残存していた。

Ⅱ区では時代は不詳であるが古代から中世にかけての所産と思われる柱穴・土壙が検出された。

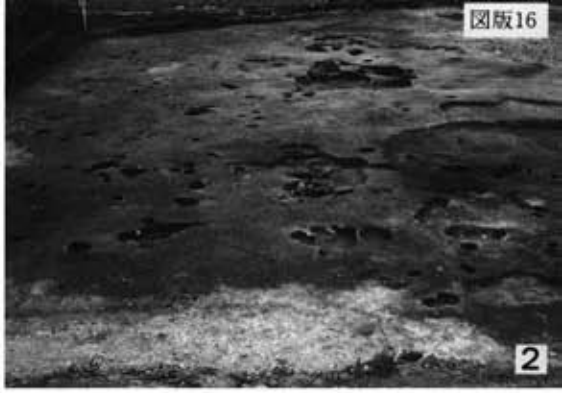
Ⅲ区は中央付近が流路となっており、主にその東側より時代不詳の柱穴が検出された。

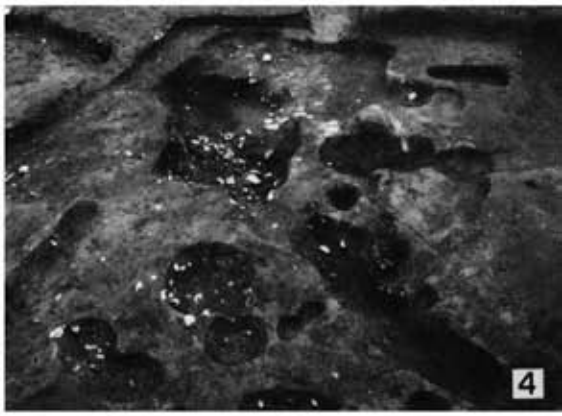
Ⅳ区は奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構が密集して検出された。掘立柱建物跡９棟・土壙29基・小鍛冶炉１基・柱穴多数である。掘立柱建物跡は復原困難なものを含めれば更に数が増えるものと思われる。

Ⅴ区もⅣ区とほぼ同じ状況で柱穴・土壙が検出された。

出土遺物は各地区より須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁・滑石製品等の他、Ⅰ区及びⅣ区で多量の鉄滓とフイゴ羽口が、又Ⅰ区で珠数玉・土製菩薩像が出土したことは特筆される。

以上のように伊岐佐伊良尾遺跡は平安時代～鎌倉時代にかけて小鍛冶を行っていた掘立柱建物跡集落として県下でも数少い貴重な遺跡と考えられる。





1．伊岐佐伊良尾遺跡遠景
2．伊岐佐伊良尾遺跡Ⅰ区全景
3．Ⅰ区検出小鍛冶遺構
4．Ⅰ区検出小鍛冶遺構
5．伊岐佐伊良尾遺跡Ⅱ区全景
6．伊岐佐伊良尾遺跡Ⅲ区全景
7．伊岐佐伊良尾遺跡Ⅳ区全景
8．伊岐佐伊良尾遺跡Ⅴ区全景

18. 上場地区の調査

(1) 唐津市

小十遺跡は、唐津市梨川内小十に所在する。石高山北西部の丘陵東斜面に作られた窯跡である。遺跡の北側には大良川の支流が流れる。唐津市では古唐津の窯跡は小十窯（小次郎窯）しか知られておらず、また古唐津の中でも特異な窯として知られていた。

調査の結果、A・B 2基の窯跡の下端部及び物原・土壙が検出された。A窯は従前より広く知られていた窯跡で胴木間（炊き口）・灰原・第1焼成室のそれぞれ一部と物原を調査した。B窯は今回新たに発見されたもので胴木間・土壙・物原を調査した。その結果、A窯の物原がB窯の胴木間を切って堆積していることから、B窯の方が古いと知れる。出土した陶片は皿が最も多く次いで碗、少ないものとして大皿・壺・擂鉢等がある。窯道具としては陶枕・ハマがあり中型品が多く、大型・小型は少い。釉薬は灰釉が多く長石釉（白唐津）は少数である。飴釉・褐釉は更に少なく、絵唐津もまた少い。

今回の調査により多くの新知見を得ることができた。まずA・B 2基の窯跡の存在が明らかになったことで、これにより新旧2期の出土遺物の検討が課題となる。またA窯は焼成室の床面形状が主軸断面で10°内外の傾斜を持っており半地下式階段状登窯と考えられ、岸岳古唐津系の飯胴甕との類似性が考えられる。

大良中尾二ツ枝遺跡は、唐津市大良中尾に所在する。大良地区は上場台地での低盆地地域にあたり、有浦川上流の名場越川流域である。遺跡が立地するのは両側に枝状谷を持つ丘陵腰部谷頭で、周辺には旧石器時代の遺跡がいくつか知られている。

調査の結果、2層からは縄文時代前期の住居状竪穴9基・土壙10基・集石遺構・柱穴が検出され、遺物は前期を中心に早～中期の押型文土器・曽畑式土器・船元系土器や石鏃・石槍・石匕・磨石等が出土した。3層からは旧石器時代の遺物集中が識別され、それに伴い礫遺構も数ヶ所確認され、ナイフ形石器・彫器・削器・掻器・石核・石刃等が出土した。旧石器時代の遺物が全遺物の7～8割を占める。

今回の調査により、旧石器～縄文時代の豊富な資料が得られ、特に縄文時代前期の比較的まとまった遺構群は、県下でもまだ資料が少なく重要である。また旧石器時代の良好な石器群の包含層が検出されたことは、西北九州における石器群編年をする上での重要な位置を占めると思われ、又同時代の遺構と考えられる集石・配石等も極めて重要な資料といえよう。

見借遺跡は唐津市見借に所在する。見借地区は唐津平野西方を北流する佐志川による谷底平野の最奥部に位置する。佐志川流域には女山・惣原・下戸・中山等の古墳が知られており又、本遺跡周辺にはいくつかの弥生時代の遺跡が知られていた。

調査の結果、弥生時代～古墳時代の住居跡・土壙・土壙墓・柱穴等や室町時代の掘立柱建物跡が検出された。また旧石器時代～縄文時代の包含層も一部確認された。出土遺物には旧石器

時代のナイフ形石器・剥片、弥生時代～古墳時代の甕・壺・高杯・杯等の土器や石斧・石錘・砥石、室町時代の土師器皿・青磁・白磁・石皿等がある。

以上のように今回の調査で佐志川流域に弥生～古墳時代の集落跡が検出されたことは、古墳形成の歴史的背景を探る上で重要であり、室町時代の掘立柱建物跡についても同様である。また旧石器時代の包含層の確認は上場台地の旧石器遺跡の分布範囲が従来の予想を越えることを示唆し、今後の調査に注目される。

馬部甚蔵山遺跡は唐津市枝去木馬部に所在する。馬部地区は唐津湾にそそぐ浦川上流の標高100～150mの低湿地地帯に延びる舌状丘陵の1つに位置する。本地区は現在上場台地の交通の要衝である岩野・加倉交差点に近接し、古代より交通の要であったことが窺える。周辺には原・馬部伍丁・枝去木分校入口・枝去木山中等の著名な遺跡が密集し、旧石器時代の核地域的様相が強い。

調査の結果、2層上面より室町時代の掘立柱建物跡群・土壙墓・土壙・道路遺構が検出された。道路遺構は3段階の整地面があり最下整地面は近世初頭期と予想され、伝太閤道との関連が考えられる。遺物は土師器皿・白磁・青磁・鉄器・銅銭等が出土した。また2層下位には旧石器時代の遺物包含層があり、集中遺物分布が明瞭に認められ、礫集積も数ヶ所検出された。遺物はナイフ形石器・局部磨製石斧・石核・剥片等約6,000点が出土した。

今回の調査により、上場台地の旧石器時代の核地帯での文化の様相が更に明らかになり、又石器編年上においても貴重な資料を得ることができた。また室町時代の道路敷遺構や集落跡の検出等、上場台地集落形成期の問題と関連して注目されるものである。

笹ノ尾遺跡は唐津市佐志に所在する。本遺跡は上場台地東側の谷頭南側斜面に立地する。地区の南側には湧水点を有し、遺跡の立地には適していると思われる。

調査の結果、旧石器時代・縄文時代の礫群や土器の遺物包含層が検出された。出土した遺物はナイフ形石器・縄文式土器（塞ノ神式・押型文）・磨石・石鏃・スクレイパー等がある。特に南九州の土器である塞ノ神式土器が唐津地方にまで分布していたことは注目される。

(2) 肥前町

池ノ田Ⅰ遺跡は肥前町大字納所字池ノ田に所在する。上場台地西側に半島状に突き出た納所の北端、岬上のなだらかな丘陵上に位置する。調査地点は池ノ田溜のすぐ西に接する畑地部分について調査を行った。周辺には野稲畑Ⅰ・Ⅱ・杉山Ⅰ・西ノ辻等の旧石器時代の遺跡や月ノ輪・海士子等の縄文時代の遺跡等が数く分布する。

調査の結果、縄文時代前期頃の住居跡状竪穴2基・土壙約90基・大小小穴多数が検出された。住居跡状竪穴は径3～4mの小型のもので中央に焼土が見られ、炉跡と考えられる。壁高は20cm程検出された。埋土からは黒曜石片・土器片が出土したが細片のため器形は不明である。遺物は土壙内を中心に石鏃・スクレイパー・石核・細石刃・ナイフ形石器・三稜尖頭器・石槍等

が出土した。また磨石と石皿がセットで出土したのは注目される。

以上のように本遺跡は、丘陵上に小規模に営まれた遺跡で、当時の人々が狩猟等を目的として季節的に移動してきた生活跡ではないかと想像される。またこの地域で縄文時代の遺構・遺物等の資料が比較的まとまった状態で得られたのは初めてで、今後この地域の古代の生活を考える上で重要な資料となろう。

(3) 呼子町

呼子町については、呼子港の北約550mの対岸に位置する加部島の2基の古墳について調査を実施した。加部島は周囲約12km、面積2.68km²の島で、呼子港の天然の防波堤の役割を果たしている。現在島民は島の東～南岸に居住している。古老の話によると島内には以前約80基程の古墳が存在したが、現在瓢塚・鉢の底・御手洗・鬼口・唐干田・二軒屋等数基しか残存していないとのことである。島内の田島神社は式内社で、また大陸との交通の前線基地であった。

今回調査を行った2基の古墳は島の北西部のなだらかな丘陵部に位置する。

御手洗古墳は御手洗川の右岸、標高21mの丘陵端に位置する。調査前は墳丘の盛土が流出し、石室の石材が露出していた。天井石はかろうじて残存していた。内部は盗掘等による攪乱を受けていた。

調査の結果、当古墳は単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする径約10m程の円墳と考えられる。周溝等は検出されなかった。横穴式石室は2.0×1.8mの玄室を持ち、短い羨道を付設する。遺物は、玄室の四隅から鉄製品（直刀・鉄鉾・鉄鏃・鉄斧・釣針）・耳環・玉類及び須恵器（長頸壺・杯・甕等）が出土した。

本古墳は、須恵器等の出土遺物から7世紀初頭に造営され、7世紀末頃まで追葬を行っていたのではないかと思われる。また鉄製釣針等の漁撈具の出土は県下でもまだ類例が少なく、また被葬者の性格を表わすものとして重要な資料である。

鬼の口古墳は標高30mの緩傾斜丘陵上に立地する。調査前は耕作時に出てくる礫石の廃棄場所となっていた。盛土は完全に流出し、天井石・壁体部も失われ、わずかに腰石のみが残存していた。内部は後世の盗掘を受けていた。

調査の結果、当古墳は単室両袖型石室を内部主体とするもので、南に開口する。周溝等の外部施設は検出できなかった。玄室は2.7×1.8mで、20×30cm大の扁平な石を敷いていた。遺物は玄室の四隅に鉄器（鉄鉾・鉄鏃・刀子・釣針・銛）・須恵器（甕・杯・𤭯等）や耳環・土玉・船底形石器等が出土した。

本古墳の造営年代は須恵器等の出土遺物から御手洗古墳と同じく7世紀初頭に造営され、7世紀末頃まで追葬を行ったものであろう。

両古墳ともに盗掘は受けているものの、出土した漁撈具・農工具等の豊富な遺物は当時の人々の生活を知る上で貴重なものである。

Ⅶ．総　　括

昭和59年度に実施した農業基盤整備事業に係る文化財確認調査は、佐賀東部地区で基山町・北茂安町・上峰村・三根町・東脊振村・三田川町・神埼町・千代田町の17地区、佐賀西部地区の佐賀市・大和町・諸富町・多久市の５地区、佐賀南部地区で武雄市・北方町・白石町・有明町・鹿島市・太良町・嬉野町の15地区、佐賀北部地区で伊万里市・西有田町・相知町の６地区、佐賀上場地区で唐津市・肥前町・鎮西町の３地区である。佐賀東部地区の北茂安町北茂安西部地区・脊振村脊振中部地区・三瀬村高瀬第２地区、佐賀西部地区の佐賀市嘉瀬地区・同市城西第２地区、佐賀南部地区の白石町白石第三地区・有明町有明第２地区・塩田町塩田地区、佐賀北部地区の伊万里市上伊万里地区・山代西部地区・天神搦地区、佐賀上場地区の肥前町切木地区・鎮西町塩鶴地区については踏査を行った。また、神埼町・三田川町・白石町・有明町については埋没条里確認調査を実施した。その他筑後川下流用水事業に係る文化財確認調査は神埼町・千代田町・諸富町の４地区について行った。発掘調査は佐賀東部地区10遺跡、佐賀西部地区４遺跡、佐賀南部地区１遺跡、佐賀北部地区４遺跡、佐賀上場地区８遺跡について実施した。以下確認調査については地区ごとに、発掘調査については各時代ごとにまとめる。

文化財確認調査

佐賀東部地区　基山町園部地区・上峰村上峰北部地区・三根町三根東地区・東脊振村西石動地区・松葉地区・裏田地区・西石動農道・広域基幹林道・神埼町本告牟田地区・千代田町大石地区・柴尾地区で遺跡の存在が確認された。園部地区では住居跡・土壙・溝跡・小穴が検出され土師器・須恵器等の遺物から奈良・平安時代の集落跡と考えられる。上峰北部地区では甕棺墓・竪穴住居跡・土壙・柱穴が検出され、出土した弥生土器・須恵器・土師器等から、弥生時代中～後期・古墳時代の集落跡及び良好な状態の甕棺墓の存在が考えられる。三根東地区では数ヶ所に分散して弥生時代を中心とする遺物の散布が見られた。西石動地区では土壙・小穴・包含層が検出され出土した遺物から弥生時代前～中期、奈良・平安時代の集落跡・墳墓の存在が予想される。松葉地区では土壙・小穴・包含層が検出され中世の土師器が出土したことから、鎌倉期を中心とする集落跡の存在が考えられる。裏田地区では従前から知られていた４基の古墳の他その周辺で縄文時代～古墳時代の遺物包含層等が検出された。西石動農道では土壙・小穴・遺物包含層が検出され出土した遺物から中世の生活跡と考えられる。広域基幹林道では尾根上より土壙が検出され土師器が出土したことから近くの飯盛城関連の遺跡ではないかと考えられる。本告牟田地区では現在の本告牟田・莞牟田集落の環濠内に設けた試掘溝から溝跡・土壙・小穴が検出され出土した遺物から中～近世の集落跡の存在が考えられる。千代田町大石地区では支石墓の可能性が指摘されていた伏石の他に大石・上黒井集落付近で小穴・遺物包含層・貝層が検出され出土した遺物から、弥生時代中期を中心とする集落跡の存在が考えられる。柴

尾地区では小穴・遺物包含層が検出され、弥生時代末～古墳時代の集落跡の存在が考えられる。

佐賀西部地区　佐賀市久保泉東部地区・大和町川上南部第２地区・諸富町大堂地区で遺跡の存在が確認された。久保泉東部地区では数条の溝跡が検出されたが出土した遺物から鎌倉～室町時代の集落跡の存在が考えられる。川上南部地区では井戸跡や小穴が検出され、弥生時代・鎌倉時代の集落跡と考えられる。大堂地区では小穴や遺物包含層が検出され、出土した遺物から弥生時代末～中世にかけての集落跡と考えられる。

佐賀南部地区　白石町白石西第１地区・白石西第４地区で遺跡の存在が確認された。白石第１地区では小穴・土壙・遺物包含層が検出され出土した遺物より、古墳～平安時代の集落跡の存在が考えられる。白石西第４地区では、２層の生活面が検出され豊富な遺物から弥生時代～中世の集落跡の存在が考えられる。

佐賀北部地区　伊万里市腰岳地区・西有田町大山地区・曲川地区・黒岩地区で遺跡の存在が確認された。腰岳地区では多量の黒曜石器・石片が出土した。大山地区では著名な坂ノ下遺跡周辺で小穴・遺物包含層が検出され、遺跡の範囲を推定することができた。曲川地区でも小穴・落ち込みが検出され、その上面に縄文時代の遺物包含層が確認された。なお大木・曲川両地区には田面に五輪塔が存在し、工事着手前に確認調査をする必要があろう。黒岩地区では小森窯跡（古唐津）の下方で土壙が検出され窯跡関連の遺構と考えられる。

佐賀上場地区　明瞭な遺構が検出された遺跡は確認されなかった。

筑後川下流用水事業　神埼町馬郡地区で行った確認調査により、弥生時代～中世の遺物包含層・土壙・小穴が検出されたことから、集落跡の存在が考えられる。

埋没条里確認調査

条里地割が比較的良好な状態で残っている神埼郡神埼町・三田川町、杵島郡白石町・有明町について実施した。神埼町では田手川左岸については遺構は検出されず、後背湿地と思われる。右岸については条里制に関連すると思われる遺構は検出されなかったが、平安時代頃の遺物包含層が確認された。三田川町では江戸時代の記録で条里的地割が施行されていることが判かる地区について調査を行い、近世期のものと思われる畦畔及び溝渠ないし沼状地への落ち込みが検出された。白石町では廿治地区で中世後～近世初の溝跡が検出された。また小島地区では東へ傾いた現況の条里的地割以前に、西に傾いた地割が存在したことを示唆する溝跡が検出された。有明町では互いに傾きの異なる条里的地割の接する地区について調査を実施したが、成因・状況を示す遺構は検出されなかった。

発掘調査

旧石器時代　旧石器時代の調査は上場台地について行われている。遺物集中（ユニット）や礫遺構が大良中尾二ツ枝遺跡や馬部甚蔵山遺跡で、良好な包含層が上記２遺跡の他見借遺跡・笹ノ尾遺跡で確認された。ここ数年の上場台地における旧石器時代の調査で上場台地ひいては

北西九州における石器群の様相を示す資料が蓄積されつつある。又同時に遺跡の分布範囲についての資料も増えつつあり、今後注目される地域である。

縄文時代　縄文時代の調査も上場台地を中心に行われた。大良中尾二ツ枝遺跡や池ノ田Ⅰ遺跡では、県下でもまだ資料の少い縄文時代前期の集落跡が検出されている。遺物包含層は見借遺跡・笹ノ尾遺跡で検出された。特に笹ノ尾遺跡で出土した塞ノ神式土器は特筆される資料である。その他伊万里地方の腰岳では著名な鈴桶遺跡の調査が行われ、多くの資料が得られた。

弥生時代　弥生時代の調査は県東部を中心に県下各地で行われた。集落跡の調査が中津隈四本松遺跡（後期）・本分三本柳遺跡（中期）・亀作A遺跡（後期）・的五本黒木（前～後期）・荒堅目遺跡（前～中期）・森ノ木遺跡（中～後期）・黒井遺跡（中～後期）・黒井八本松遺跡（中期）・楢田遺跡・村中角遺跡（後期）・中小路増富遺跡（後期）・見借遺跡で行われ、又鈴桶遺跡で石器製作遺跡、天神搦・浦川内東方遺跡で遺物包含層が検出された。特筆されるものとして仿製鏡や一括遺物が得られた亀作A遺跡、的五本黒木遺跡の鐸型土製品・祭祀遺構、梯子が出土した黒井遺跡、柳葉型銅鏃等が出土した村中角遺跡があげられる。又弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物が中津隈四本松遺跡・亀作A遺跡・森ノ木遺跡・村中角遺跡等で得られ、当該期の土器編年をする上で貴重な資料が増加している。また有明海沿岸地域での弥生文化の様相が明らかになりつつある。標高２～４ｍの低湿地帯と山麓地域での文化(？)的差異はしばしば指摘されてきたが、従来〝貝塚〟と総称されてきた集落跡の様相、他地域の文化の流入形態、現在までの所竪穴住居跡が検出されていないこと等、具体的な文化的特質が議論される様な資料が増えており、今後の調査研究に期待される。

古墳時代　古墳時代の集落跡が中津隈四本松遺跡・的五本黒木遺跡・荒堅目遺跡・森ノ木遺跡・黒井遺跡・楢田遺跡・村中角遺跡・見借遺跡等で検出された。またこれまで調査例の少なかった島部での調査が加部島で行われ、御手洗・鬼ノ口両古墳が後期古墳であることが判明し、また出土した副葬品の中に漁撈・農工具が含まれており、当時の人々の生活を考える上で貴重な資料を得ることができた。有明海沿岸地域での古墳時代の集落跡の調査はこれまで度々報告されてきたが、まだまとまった資料はなくこれからの課題であろう。

古代（奈良・平安時代）　奈良・平安時代に属する遺跡の調査は一ノ坪遺跡・中津隈四本松遺跡・荒堅目遺跡・森ノ木遺跡・黒井遺跡・楢田遺跡・村中角遺跡・中小路増富遺跡・浦川内東方遺跡・伊岐佐伊良尾遺跡等で行われた。興味ある遺跡としては一ノ坪遺跡・中小路増富遺跡・伊岐佐伊良尾遺跡で小鍛冶遺構が検出されたことで、古代の鉄製産を考える上で重要な資料が得られた。古代の社会に関する研究で官衙についての資料は見逃すことのできないものであるが、59年度の調査で官衙跡との関連が考えられるものとして木簡や緑釉陶器等豊富な資料が得られた荒堅目遺跡、「宮殿」等のヘラ書き文字が書かれた土器が出土した村中角遺跡があり、石帯が出土した中津隈四本松遺跡にも注意が必要である。

中世（鎌倉・室町時代）　鎌倉・室町時代に属する遺跡の調査としては一ノ坪遺跡・中津隈四本松遺跡・本分三本柳遺跡・大曲A遺跡・荒堅目遺跡・森ノ木遺跡・黒井遺跡・加与丁野村遺跡・村中角遺跡・辺田三本松遺跡・天神搦遺跡・伊岐佐伊良尾遺跡・見借遺跡・馬部甚蔵山遺跡等がある。多くのものは前時代から引き続くものであるが、大曲A遺跡は現大曲集落の前身と考えられるものであり、加与丁野村遺跡は江戸時代に続く屋敷跡・集落跡として注目される。見借遺跡・馬部甚蔵山遺跡で検出された室町時代の掘立柱建物跡は上場台地における近世集落の初現期を物語る資料として重要なものであろう。特異な遺跡としては近くの稲佐神社との関連が考えられる辺田三本松遺跡、山代七ヶ寺の一つ、伝恩徳寺跡との関連が考えられる天神搦遺跡があり、天神搦遺跡については伊万里地方初の木製品資料の出土、特に木簡の出土等興味ある遺跡である。

近世（安土・桃山・江戸時代）　近世の遺跡の調査としては室町時代から引き続いて営まれた加与丁野村遺跡・村中角遺跡・辺田三本松遺跡等の他に、小十遺跡の古唐津窯跡の調査がある。また日本史の舞台の一つともいえる上場地方の安土・桃山～江戸時代初頭にかけての資料が増加していることは今後の研究に資するもので、伝太閤道との関連が指摘されている馬部甚蔵山遺跡で検出された道路敷遺構は興味深いものであろう。

佐賀県文化財調査報告書第83集

佐賀県農業基盤整備事業に
係る文化財調査報告書4

発行　昭和61年3月31日
佐賀県教育委員会
佐賀市城内1-1-42

印刷　西部印刷企画株式会社
佐賀市鍋島町八戸1323-4
TEL 0952-24-3569